

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Cultural Resources and Ethnic Groups in Southwest China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 誠之, 覃, 溥, 吳, 偉峰, 謝, 沫華, 李, 黔濱 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4923

Senri Ethnological Reports

109

SER 109

国立民族学博物館

調査報告

109

Cultural Resources and
Ethnic Groups in
Southwest China

Edited by

Shigeyuki Tsukada

西南中国少数民族の文化資源の“いま”

塚田誠之 編

西南中国少数民族の
文化資源の“いま”

塚田誠之 編

National Museum of Ethnology
2013 Osaka

ISSN 1340-6787
ISBN 978-4-906962-00-6 C3039



国立民族学博物館 2013

国立民族学博物館 調査報告

109

西南中国少数民族の文化資源の“いま”

塚田誠之 編

国立民族学博物館

2013



国立民族学博物館開館30周年記念 国際シンポジウム

西南中国少数民族の 文化資源のいま

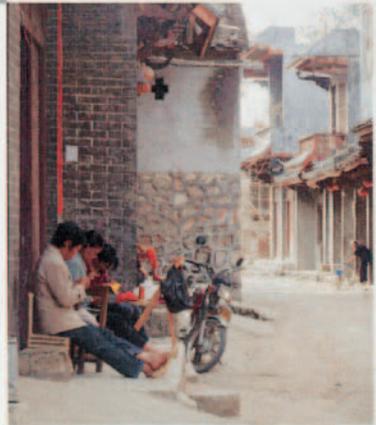
日時——2008年3月13日(木)
10:00～18:00

会場——国立民族学博物館
第4セミナー室

定員——50名(要申込)

使用言語——日本語、中国語(同時通訳)

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立民族学博物館



はじめに

塚田誠之

本書は、2008年3月13日、国立民族学博物館において開催された国立民族学博物館開館30周年記念国際シンポジウム「西南中国少数民族の文化資源の“いま”」において発表された研究報告および討論を収録したものである。西南中国の少数民族地域では、それぞれの民族が豊富な文化を有する。有形・無形の文化は、民族を特徴付ける資源として形成され応用されている。文化資源は絶えず変貌を遂げ戦略的に活用されてきた。本シンポジウムでは、中国西南部、広西・雲南から各博物館の館長など文物や文化の管理・保護・活用を研究・担当している研究者3名を招聘し、各省区の最新の具体的な事例にもとづいて、少数民族の文化資源がどのように形成され、現在どう活用されているのか、またどのような課題を抱えているのかについて比較し検討した。報告者のほか総合コメントーター、各発表に対するコメントーターを国内から招聘した。なお、李黔濱氏は都合により論文参加という形になった。

文化資源について、いくつかのポイントを挙げると、まずその形成の歴史に基づいた検討が必要である。たとえば伝統と看做されているものがある時代に創作されることがある。伝統は時間とともに変化する。国立民族学博物館特別展「深奥的中国——少数民族の暮らしと工芸」(2008年3月13日～6月3日)でチワン(壮)族の高床式住居や年中行事において漢文化を受容し自らの文化を形成してきたことを紹介した。外来文化を受容し、もとの文化とが融合して新たな文化を作り出してゆく事例は多く見られる。現状を正確に認識するためには文化形成の歴史をふまえた検討が必要だと思われる。この場合、現在における新たな伝統の創出という点も問題になる。

また、文化が資源として具体的にどのように活用されているかという問題がある。たとえば最近各地で生態博物館を建設する試みがなされているが、それはもともとあった農村を利用して、住民の参与のもとに、住民の民族文化を保護し伝承していく取り組みで注目を集めている。そのことを通じて、地元の少数民族の社会経済の発展をも促進し、当該の民族や地域の住民のアイデンティティを生み出したり、すでにあるアイデンティティを一層高めて行く点でも注目される。文化がどのように活用され、そのことで人々のアイデンティティにどのような影響を与えているのだろうかという点である。生態博物館のほか従来型の博物館や民族村を含む屋外での展示といった文化の展示の装置と方法もここで問題となる。

さらに、文化資源の活用は現在、さまざまな問題点に直面している。たとえば特別展示で、チワン族の高床式住居の2層部分を再現したが、広西で高床式住居は、観光地では景観の一部をなす文化資源として保存が積極的に議論されている。しかし、観光化さ

れていないところでは自然の成り行きにまかせ、結果として多くの地域で出稼ぎに行った若者がセメントブロックのビルに建て替える動きが見られる。急速な現代化、経済のグローバル化の進行に直面している現在、資源としての伝統的な文化が変化する場合が多く見られる。文化の資源としての保護と活用がどのような問題点に直面して、どのような取り組みがなされているかという点が問題になる。

本シンポジウムでは、西南中国の少数民族の文化資源の問題について、各省区を代表する研究者が最新の状況を報告し、それに基づいて日中の第一線で活躍している研究者により討論を行った。討論を通じて文化資源について理解を深めるとともに、研究上の新たな発見や大きな発展が得られた。

なお、本シンポジウムは、共同研究「民族文化資源の生成と変貌——華南地域を中心とした人類学・歴史学的研究」(代表武内房司)、および科学研究費補助金・基盤研究(B)「中国南北の国境地域における多民族のネットワーク構築と文化の動態」(課題番号19401046、代表者塚田誠之)と合同で開催した。

本書の内容の紹介

覃溥報告では、広西における生態博物館の建設の実践と直面する問題点が検討されている。まず、生態博物館の建設の目的として、それが少数民族の文化の保護や発展に必要であって、民族の経済発展、生態環境の保護にとっても重要であることをふまえたうえで、学際的な研究を行い、各級政府の共通の認識を得た上で建設されるべきであること、その運営において、現地の村民の意識を高めることや、文化の保護とその合理的な活用・管理の強化が必要であることが指摘されている。さらには、生態博物館と広西民族博物館とが連携して、ネットワークを構築し、研究のステーションとなるべきことが指摘されている。従来型の博物館と異なる、既存の村落を活用した生態博物館が各地で建設され、注目を集めているが、その建設に際しての具体的な取り組みの内容が詳細に検討されている点で注目される。

なお、シンポジウムの開催の時点から本論集の刊行までに、すでに4年余の時間が経過した。覃溥報告で、広西民族博物館を建設し、各地の民族の調査研究・文化遺物の収集の基地としての10の生態博物館との全方位的な資源共有のプラットフォームを構築し「連合体」とする壮大な構想が提示されている。広西民族博物館は2008年12月に竣工し、2009年4月に正式に对外开放された。また10カ所の生態博物館も今日までに全て建設されている。ただし、それらは建設されたばかりであるので、広西民族博物館と各地の生態博物館との間に構築されるであろう研究や資料収集のネットワークがどのように機能していくのかについては、今後長期的に注視していく必要がある。

次いで、呉偉峰報告では、広西壮族自治区博物館の室内外展示の特色と発展について検討されている。広西壮族自治区博物館に隣接して、広西民族文物苑が建設されている

が、そこでの展示の内容が紹介され、その社会的な機能にふれ、あわせて室内展示の内容と特徴も紹介されている。広西民族文物苑では、トン族の風雨橋や鼓楼、チワン族やミャオ族の民家を復元して展示している。とともに、民族の歌や踊りの上演、エスニック料理を出すレストラン、土産物の販売など多角的な経営をしている。そこでは伝統的なものに加えて新たにつくられたもの（とくに民族の料理や歌・踊り、土産物）が調和し、観客が民族文化を五感で味わうことができるよう工夫されている。さらにそれらの実践を通じて社会に奉仕している現状、また文化資源の活用場として今後いっそう発展させるための構想が提示されている。なお、室内展示は、広西民族博物館の開館にともない銅鼓や民族民俗展示が移管され、もっぱら広西の歴史に特化したものになった。室外展示は、多角経営が成功を収め、市民の憩いの場として今も賑わっている。

李黔濱報告では、ミャオ族の民族衣装の重要な構成要素である銀製装身具について、その起源、形態分類、中原文化との関係、銀の機能、近年の変化など多方面から検討されている。銀製装身具が、文献史料の記載から明代に使用されはじめ清代に盛んになったこと、また中原地域で早期から流行していた魔除けの長命鎖を導入したこと、さらに未婚女性が民族的な活動へ参加したり嫁入り道具としての機能を持つこと、くわえて近年、銀よりも廉価な白銅（銅に銀メッキをほどこしたもの）が流行していること、銀細工職人の分散の現状などが指摘されている。銀自体に呪術的機能があることも指摘されている。銀製装身具の歴史と現状について、従来の見解に見直しをせまる研究として注目される。

謝沫華報告では、雲南の民族の多元性・多様性を論じたうえで、民族文化が現在直面する問題、とくに伝統的な文化資源の消滅・変化が顕著で、開発と文化の保護の矛盾が生じているなど問題点が検討されている。そして、この20年間の文化保護への取り組みの実例として、伝統的な形式の博物館の建設のほかに、民俗村、民族文化伝習館、民族文化生態村、民族文化活態博物館の建設などが紹介されている。さらに雲南における文化資源の保護のための取り組みについて、最新の具体的な情報が提示されている。

なお、中国側の4本の論文は当時の総合研究大学院大学院生の長沼さやか氏（現・日本学術振興会特別研究員（PD）、国立民族学博物館共同研究員）、岡晋氏（現・国立民族学博物館外来研究員）が邦訳を担当したが、邦訳の全責任は編者である塚田にあることを申し添えたい。

また、編集の都合上、第一セッションの司会を担当していた韓敏氏（国立民族学博物館）、第二セッションの司会を担当していた横山廣子氏（国立民族学博物館）の発言は割愛させていただいた。さらに、上記の民博共同研究の班員には、時間の関係上、コメントを一部の方のみにお願いせざるをえなかった。

目 次

はじめに	塚田誠之	1
〈第一セッション〉		
背負起现代社会发展少数民族文化保护传承的时代责任与义务 ——中国“广西民族生态博物馆建设1+10工程”实践——	覃 溥	9
現代社会の発展過程における少数民族文化保護・伝承を担う時代の責任と義務 ——中国「広西民族生態博物館建設1+10プロジェクト」の実践——	訳：長沼さやか	23
コメント&リプライ		43
广西博物馆室外展示的特色和发展	吴 伟 峰	51
広西博物館の室外展示の特色と発展	訳：長沼さやか	59
コメント&リプライ		71
〈第二セッション〉		
文化多样性的保护 ——云南的探索与实践——	谢 沫 华	79
文化多様性の保護 ——雲南の探求と実践——	訳：長沼さやか	85
コメント&リプライ		93
苗族银饰的文化赏析	李 黔 滨	97
ミャオ族銀飾りの文化赏析	訳：岡 晋	103
コメント		111
〈第三セッション〉		
総合コメント・討論		117
シンポジウム「西南中国少数民族の文化資源の“いま”」日程		140
発表者・討論参加者一覧		142

〈第一セッション〉

背负起现代社会发展中少数民族 文化保护传承的时代责任与义务

——中国“广西民族生态博物馆建设1+10工程”实践——

覃 溥
广西文物局

- | | |
|---|-------------------------------|
| 1 中国广西民族文化与文化遗存保护的形势 | 统文化和其他文化遗产保护、研究、传承与展示工作任务的联合体 |
| 1.1 多样性和丰富性 | 3 广西民族生态博物馆建设“1+10工程” |
| 1.2 独特性和稀有性 | 3.1 广西南丹里湖白裤瑶生态博物馆 |
| 1.3 传统性和完整性 | 3.2 三江侗族生态博物馆 |
| 1.4 渗透性和兼容性 | 3.3 百色靖西县旧州壮族生态博物馆 |
| 1.5 和谐性和生态性 | 3.4 桂北灵川县灵田乡长岗岭村汉族生态博物馆 |
| 2 广西政府关于民族生态博物馆建设的思考与探索 | 3.5 桂北龙胜龙脊壮族生态博物馆 |
| 2.1 专业性的指导贯穿始终 | 3.6 桂东贺州市莲塘镇客家围屋生态博物馆 |
| 2.2 试点项目的准入基点把握和各级共识的搭成 | 3.7 桂西那坡县达文黑衣壮生态博物馆 |
| 2.3 学习型的实验 | 3.8 融水苗族自治县安太苗族生态博物馆 |
| 2.4 强化村民是生态博物馆主人的意识 | 3.9 桂南东兴京族三岛生态博物馆 |
| 2.5 中国政府“保护为主、抢救第一合理利用、加强管理”的文物工作方针同样适用于生态博物馆建设 | 3.10 桂中金秀瑶族自治县瑶族生态博物馆 |
| 2.6 将生态博物馆建设与广西民族博物馆联系式成为承担政府实施民族传 | 4 评价和问题 |

虽然我们不愿意看到冲突的存在，但是世界每一天都在发生冲突，冲突在各种文明间发生，冲突在传统与现代间发生，冲突以不同的内容和方式发生，更以其不同的结局影响着世界的发展。这其中，对于已经日益陷入弱勢的少数民族文化，在冲突以波及范围史无前例、变得更为纷繁快速的时代大背景下，仅有关注已经远远不够了。在中国，经济的全球化、国际区域经济自由贸易区形成所带来的近距离与频繁交往、中国乡镇建设城市化的加速推进，文化多样性与多元化的保留与持续，也以从未有的严峻成为关乎民族命运的重大社会问题。历史的事实证明，放弃民族精神家园的国家与民族其衰落甚至消亡将是必然。文化的多元、保护与传承关乎人类生存、发展和国家、民族的认同，如同人们对环境与资源的保护关乎人类存亡一样，已经形成使命号召全世界的仁人志士身心以投，付诸行动。

1 中国广西民族文化与文化遗产保护的形势

广西是一个多民族聚居的边疆地区，居住着总数约1800多万人口的壮、瑶、苗、侗、水、仫佬、仡佬、彝、毛南、京、回等11个少数民族。历史上，由于地域的缘故各种古老的文化如古老瓯骆文化、越文化、滇文化、楚文化、中原汉文化，以及各个民族的传统文化，甚至还有一千多年前就随着“海上丝绸之路”泊来的“洋”文化，都在这块土地上获得共存，相互影响和交汇融合，由此造就了深厚与丰富的广西民族传统文化，留下我们今天所看到的独具特色的民族文化生态。

中华人民共和国成立以来广西政府对全境有过三次较大的文化遗产普查，特别是上世纪八十年代初的全国性文物普查和本世纪历时两年的广西境内的古代民居建筑群和少数民族建筑群保护情况调查，共登记了具有一定价值的各个历史时期的一万多处不可移动保护点，其中具有明显民族标识的不可移动保护点就有四千多处，几乎占总数一半。而尚未列入登记的古代民居、古代街镇、古代村寨仍有四百多处分布在广西各地——它们不仅保存完整地保存着上至明清时期、下至民国时期的建筑布局与风格，并因它们的存在延续了许多古老的民俗风尚和传统技艺，具有很高的历史、科学和艺术价值。此外，在广西一百多个各种类型的文化遗产保护机构还收藏着27万余件历代出土与传世文物及艺术品；在少数民族民间还流传使用着传承了千年历史的铜鼓及其他民族器具；在各民族中还保留着包括语言、神话、史诗、音乐、舞蹈、戏曲、曲艺、剪纸、绘画、雕刻、刺绣、染织等各种文化、艺术、技艺及各种礼仪、节庆、民族竞技活动等丰富的非物质文化遗产，并以其强大的生命力影响着今天的广西文化传承与发展：

1.1 多样性和丰富性

广西历史悠久，幅员广阔，民族众多，不同民族、不同支系、不同地域，有其不同的文化形式和文化内容，民族文化多样而丰富。如民居建筑，有汉族庭院式的民居、园林式的山庄、有客家围屋，有少数民族的干栏式建筑，还有南洋风格的骑楼；民族服饰，广西12个世居民族都有自己的传统服饰，同一个民族的不同支系又有各式各样的服饰，其中瑶族就有20多种不同风格的服饰，尤为典型。

1.2 独特性和稀有性

不同的民族有不同的文化，广西民族文化的独特性和稀有性是显而易见的。如战国至东汉时期壮族先民骆越人巫术活动遗留下来的左江岩画，绵延分布在200公里的左江沿岸，其中典型代表宁明花山岩画面宽达172米，面积8000多平方米，共画有1900多个，人物最高至3米，最小的仅0.3米，间有少量兽类和器具，规模宏大，场面壮观，内容十分丰富，其所具有的历史、艺术、科学和民族研究价值被世人叹为罕见。而广西的铜鼓文化除独具许多特色之外，一是源远流长，时至今日古老的铜鼓和与铜鼓相关的习俗仍在许多少

数民族地区使用（仅民间收藏就达1500面之多）和流行，浑厚悠远的铜鼓声穿越千年时空至今仍不绝耳，成为万人们探秘古老铜鼓文化的活化石；二是种类齐全，数量最多：广西目前拥有约2000多面自春秋战国到明清时期、涵盖各个时期和各种类型的铜鼓，为世界之最；三是体形硕大，铸造精美，不乏精品：如出土于北流县的云霄纹大铜鼓面径达165厘米、重300多公斤，是迄今世界上所知体量最大的铜鼓，被誉为“铜鼓之王”。出土于贵港汉墓的划船羽人舞蹈纹铜鼓、桂平县的牛拉橇变形羽人纹铜鼓都造型华丽优美、图案清晰丰富、立体雕饰多样且充满生活气息，均不失为稀世珍宝。

1.3 传统性和完整性

广西地处祖国边陲，属经济欠发达地区，加之许多民族的聚居地又相对偏僻，因此许多传统文化得以系统、完整地保留下来。像侗族的民居建筑及工艺、壮侗瑶苗各族的纺织、染绣、金属敲制服饰技艺，还有许多民族的节日、歌谣、技艺等都一直比较完整地流传下来。

1.4 渗透性和兼容性

广西各个民族的分布具有大分散、小聚居的特点，各民族长期接触、交往，各个民族的文化一方面具有独特的传统，另一方面又互相渗透、互为兼容。如桂北农村壮族、汉族、侗族、苗族的干栏式木楼，建筑选材、造型结构、工艺及装饰都大同小异就是典型的例证。其他如节庆、饮食、娱乐等方面，各民族也都有许多相近、相同的习俗。

1.5 和谐性和生态性

广西各个民族千百年来发源于斯，发展长于斯，是这方水土养育着这方人民也孕育了这方的文化，民族文化呈现出一派与自然和谐依存的景象。侗族山乡的侗寨、鼓楼、风雨桥与绿色的山岭、田野、河流的和谐之美；坐落于崇山峻岭之上的瑶族山寨，掩映在森林之间，原有地形、地貌和植被保存非常完好，充分体现了白裤瑶“物我合一”的哲学理念。正是在这样的人文与自然环境里（和谐、生态的文化环境是民族文化保存的重要条件，且尤以少数民族文化最为突出），民族传统文化千百年来一直完整地保留和延续着，并与各种传统文化互相依存，绵延传承。

广西民族文化源远流长，民族文化生态蔚为大观，这是广西各民族人民引以为荣的文化成就和文化遗产。但是，伴随着中国现代化进程的加快及市场经济向广度和深度上发展，昔日相对与世隔绝的民族地区正面临着外来文化的不断冲击，碰撞和融合激烈与快速的发生；新的生活方式改变着人们的衣食住行、外来文化的涌入和追求感官享受的快餐文化快速占领着文化消费市场、科学技术日新月异和知识的高速更新等形成对传统、民族文化的冲击正在向这最后的“净土”袭来，一些珍贵的民族文化遗产（特别是无形文化遗产，包括民族民间语言和艺术、民族民间工艺美术、民族民间风俗礼仪、节庆等方面）面临着消

失的严重危机。这个时刻，中国广西政府以敏锐的意识和义不容辞的责任感，以更具体的措施和行动强化政府在这方面的职能和义务。

2 广西政府关于民族生态博物馆建设的思考与探索

上世纪后期、贵州省政府以中国生态博物馆建设的先趋者行动引进欧美生态博物馆理念，用于中国少数民族文化保护与传承。从1998年开始，我们一直关注着在邻省进行着的这项伟大的文化工程进展，也开始了对起源于欧洲的新的博物馆理论的接触，并把广西的生态博物馆建设问题纳入了广西文化遗产保护“十·五规划”，开始思考、研究如何将生态博物馆的模式运用到广西文化遗产保护事业的具体实践。2001年我们组织了广西相关的各级政府、文化官员组成的考察团，专程赴贵州省参观建设在六枝特区以北50多公里大山深处的中国第一个生态博物馆——梭嘎乡陇戛寨苗族生态博物馆。在听取贵州省关于策划、选点、启动、组织和具体实施等多年来的建设思路和情况介绍中，我们还仔细考察了建于苗寨里、已对外开放的资料中心和生态博物馆的文化示范户，与苗族村民交谈，体会他们作为生态博物馆重要组部份的感受和朴实的热情。考察使我们看到了生态博物馆建设在中国的特色化选择与实验的可行与前景，也使我们在长时间盘行往返的崎岖山路中、在陇戛寨苗族生态博物馆建设的艰难环境和任重道远中深切感觉到这一选择的意味——这是一项不能退缩与放弃的选择，因为它已经不是一项传统意义上的博物馆建设，它已经被赋予了太多的内涵和原来不属于它的作用。所以，在之后的近两年多时间里我们一直在思考，在听取各方面的建议，更深入的去反复考察、分析广西的资源和各方面的条件，研究切合实际的方案，尽力去寻求既是“中国特色”向又适合广西区情的生态博物馆建设模式，以有效的方式应对传统民族文化保护的紧迫局面。

生态博物馆走进中国是对中国现代化建设下悠久历史文化保护和灿烂民族传统文化传承需要的适应，是中国少数民族政策及部份少数民族地区的社会与文化的发展需要。现代化工业的发展、对自然资源的过速开发并由此带来对自然环境和人文生态的破坏、以及伴随着这一切随之而来的对传统文化的冲击是各国生态博物馆建设者们抉择的共同背景。但是，与最初创建在法国、以后在欧美甚至亚洲日本实验建设的各国生态博物馆最大的不同是，贵州省则选择了社会发展相对落后、条件最艰难的地区进行开全国先列的中国生态博物馆建设实验；发达到国选择的建设生态博物馆的地域多在“已经现代化和人民生活富庶”的村镇、旧工业区和城市中的历史街区，而中国贵州省的生态博物馆建设选点以民族个性鲜明、风情习俗和民族传统技艺与区域自然环境和协保存为基础条件——中国民族传统文化保护的主要对象和分布区域，决定了这块“净土”必需边远山区、村寨和社会与经济的欠发展地区而不能其他；发达国家的生态博物馆建设在雄厚的经济支持下，以最高的科技含量之载体和手段，幅面、容量、形式最大化的快速输入“稍纵即逝”的一切过去与现在的信息，中国的生态博物馆则要更多的从国情出发“因地制宜”，面对不济财力的制约，欲

速不得；发达国家的生态博物馆建设来自地域民众已经觉醒的“回归”自觉意识和良好的文化素质下的积极参与，我国的生态博物馆倡导者和建设者们所面临的则要对当地民众进行新意识、新观念和先进文化的灌输和参与动员，因为他们面对的人们还在与贫穷作斗争为温饱而努力。这四个方面的重要区别决定了中国生态博物馆的特殊性，也决定了它虽同为“文化机构”而不同任务的职责与使命：发展经济、普及文化、保护自然生态、改造居住环境和建设新家园，与传统民族文化保护与传承必须同步。这对于一项文化事业它固然显得沉重与艰难了一些，但正因为如此，中国生态博物馆的建设称得上是伟大的事业。

2002年广西政府在首府南宁市启动蕴酿了多年的广西民族博物馆筹备建设，这个规模达三万多平方米的现代化博物馆在未来将成为广西收藏、保护、研究、传承与展示广西各个民族传统文化的专业性大型博物馆。但是，对于已经直面外来文化冲击与碰撞、根植于广大民族村寨的民族传统文化保护，国外和贵州省生态博物馆的实践和成功经验还提供了另一条切实可行的道路——建设生态博物馆。2004年广西政府在六年的思考与准备之后，以六项原则为指导，探索性地开始广西特色的生态博物馆建设之路：

2.1 专业性的指导贯穿始终

组成了一个由民族学、考古学、博物馆学、历史学和地方史学等方面专家组成的“广西生态博物馆建设课题小组”，专题承担广西生态博物馆建设的专业及所涉及的相关学科的可行性研究，并在项目启动建设后始终负责该项目业务指导，以保证今后实施的生态博物馆建设项目始终在一个专业的团队指导下实施。这项机制无论是对政府主管部门们决策的科学性，还是对项目所在地人员专业素质一时不适应状况的弥补作用都很大。

2.2 试点项目的准入基点把握和各级共识的搭成

尊重生态博物馆定义的基本原则，强调民族代表性、特性鲜明、有一定的历史积淀和历史文化遗存，现存自然与文化生态现状保护良好等所构成的“鲜活的文化整体”是试点项目选择的必备要素。在项目启动前期与试点项目所在市、县、乡和村四级政府与组织在项目建设意义、目标、选点、管理机制和投资组合等问题上形成共识并保证落实，以广泛的一致性为项目的实施提供保证。

2.3 学习型的实验

生态博物馆是近四十年来世界博物馆体系中突起的“异军”，不仅理论在完善之中，实践活动中称谓也不尽统一、模式多样。所以，实际工作中它更需要有清晰的思想指导，以把握根本，不弃立意。2003年广西政府以《十百千人才重点项目》的人才培训基金，资助了在即将建设广西第一个生态博物馆的南丹县举办《广西生态博物馆建设思路与模式探讨高级研讨班》，对五十多名地方政府官员和文化遗产保护机构的五十多人员进行专业培训。中国著名博物馆学理论家苏东海先生等国家级专家欣然远道而来，给学员们授课，与大家

探讨、解答试点项目所在地具体工作者在理论与实践上的疑惑与问题，从而使广西民族生态博物馆的建设在丰富实践经验与理论的指导下起步；贵州省的“生态博物馆项目实施小组”也带来了他们六年丰厚的实践经验。因为是对新事物的尝鲜，在此后的项目实施中我们始终强调各种形式的不断“学习”与讨论。

2.4 强化村民是生态博物馆主人的意识

生态博物馆的特点是当地人民的参与，这也是一个生态博物馆是否成功的衡量标准之一。我们强调正确处理各级政府、文化行政主管部门和当地人民在生态博物馆建设中的关系，在今后的长期工作中要求把更多的注意力放在当地居民参与的组织上，充分地认识到只有当地人民真正的动员起来、参与进去，并最终成为生态博物馆的主人，生态博物馆有效保护与传承区域内民族文化的目的和任务才可能实现。

2.5 中国政府“保护为主、抢救第一合理利用、加强管理”的文物工作方针同样适用于生态博物馆建设

生态博物馆的建设基于自然与人文资源保护与传承的需要，因此生态博物馆建设的远大目标是未来。中国式的、理想的生态博物馆的建设，是它的主人们改变生活、发展地域经济，建设更美好的家园的开始，而原来这里的全部有形的与无形的、具备“文化因素的有特殊价值和意义”的资源保护则是这项目标实现和永续发展的前提保证。因此，在生态博物馆敞开大门迎接四方宾客之前，保护的意识牢固树立，深入至每一个当地居民是非常重要的。

2.6 将生态博物馆建设与广西民族博物馆联系式成为承担政府实施民族传统文化和其他文化遗产保护、研究、传承与展示工作任务的联合体

广西政府以行政措施在分布于全区的各民族生态博物馆与广西民族博物馆之间建立起长期、稳定的互动与延伸关系：以广西民族博物馆研究工作站的形式，使各生态博物馆成为广西民族博物馆对各个民族进行长期跟踪调查研究、搜集文化遗存和扩张研究成果利用的基地；运用现代科技手段，在两者间构建信息网络，使各生态博物馆借助广西民族博物馆这更广阔的平台，延伸与外部世界的联系，不受地域和时空局限扩大受众面；以行政调控方式为两者间建立起全方位的资源共享平台，使两者形成优势互补，从而提高资源价值和利用率。“联合体”的作用，在各生态博物馆的初创时期对其健康成长是尤其重要。

2003年下半年至2005年5月，在实地考察和可行性研究完成后，广西政府选择了少数民族聚居的百色市靖西县旧州壮族、河池市南丹县里湖白裤瑶、柳州市三江侗族自治县苗江侗族三个村域作为广西民族生态博物馆的试点项目。两年后，“广西南丹里湖白裤瑶生态博物馆”、“广西三江侗族生态博物馆”及“广西靖西旧州壮族生态博物馆”完成了基础性的建设并开展工作。但是，正是在经历了两年多的探索性实践后，我们却强烈地意识到这

才是真正意义的开始——这又是生态博物馆与传统博物馆的最大不同，尤其在中国——传统的博物馆万事开头难，生态博物馆则“难”在后面。实践中我们深刻地感到没有任何一项原本是文化概念的事业，其内涵与外延有着如此地复杂和宽泛，所涉及的社会问题那么多，与一个地区、一个范围内的村落民众的生活改观和社会发展那么紧密的结合；也没有任何一项需要居民参与的文化事业在进行过程中将面临那么多观念上、行为上和利益上的冲突，以及对这些冲突正确引导和处理之艰难。但是，意义也正在于此，这项事业的探索有一个过程，需要恒心与毅力。

3 广西民族生态博物馆建设“1+10工程”

三个试点项目的经历告诉我们广西式的生态博物馆建设仍有许多问题需探讨与完善，但这是一项事业发展中的正常现象，不能改变民族生态博物馆在民族文化保护与传承上已经发挥作用的事实。广西各级政府坚定建设民族生态博物馆事业的步伐，在进一步总结和分析的基础上，2005年广西政府作出了将正在建设的广西民族博物馆与未来在全区陆续建设的10座民族生态博物馆结成“联合体”，共同承担起政府在广西全境实施民族文化遗产保护、研究、传承与展示任务的决策，并批准了“广西生态博物馆建设课题小组”运用现代工程学方法编制的《广西民族生态博物馆建设“1+10工程”项目建议书》，从地域、民族及影响、辐射、效益、研究课题等方面综合规划，在未来3年内在桂中、桂西、桂北及桂东南、桂东等地再建七个民族生态博物馆，即桂东贺州市莲塘镇客家围屋生态博物馆、桂中融水苗族自治县苗族生态博物馆、桂北灵川县灵田乡长岗岭商道古村生态博物馆、桂南东兴京族三岛生态博物馆、桂北龙胜龙脊壮族生态博物馆、桂西那坡达文黑衣壮生态博物馆、桂中金秀瑶族自治县瑶族生态博物馆，与三个试点项目构成“1+10工程”中的“10”，并发挥广西民族博物馆工作站和研究基地的作用；而广西民族博物馆则是“1+10工程”概念中的“1”，发挥“龙头”与“1+10”的总平台作用。将建设的各个民族生态博物馆在选址区域划定一定的文化保护区外，在保护区内外的适当位置建设规模适度、风貌景观与文化保护区协调、方便利于村民利用与活动的展示中心。展示中心除设有一个用现代展示技术反映当地历史概貌与民族文化的专题展示外，还设有记忆工作室、小型多媒体会议室和方便学者短期驻地研究的客房。广西民族博物馆为各个民族生态博物馆配备了全套集摄、录、存、放等功能的设备，以供各个生态博物馆进行长期的文化记录、展示、网络链接和学术研究。10座民族生态博物馆都将作为广西民族博物馆的长期工作站和民族文化研究基地，源源不断地向广西民族博物馆提供藏品和研究成果，以丰富广西民族博物馆的馆藏和展示内容，并通过网络技术使它们与广西民族博物馆之间搭建起共享资源、研究成果和展示宣传的远程平台，形成事业上的联合整体，以持续发展。

3.1 广西南丹里湖白裤瑶生态博物馆

2003年12月3日，广西第一座、中国第一座瑶族生态博物馆——广西南丹里湖白裤瑶生态博物馆展示中心于南丹县里湖乡怀里村举行奠基。由于历史、传统与自然环境等方面的原因，怀里村白裤瑶目前仍保存、延续着极为独特、完整和丰富的传统文化，包括染织文化、礼仪文化、制度文化、铜鼓文化、丧葬文化、建筑文化均与众不同。从某种意义上讲，这项选点的白裤瑶文化体现了广西民族文化中处于封闭、偏僻自然地理环境下独立、缓慢发展的少数民族文化的特点，而这样的例子在广西并不少见，因为只有在相对偏僻的环境中，少数民族的文化才更有可能较少的免受全球化与现代化的冲击与影响，才更有可能保存着古老原始的民族文化；而与之相伴的则是当地经济建设的相对落后与人民生活水平的相对低下，在这种环境下的民族文化相对来说也是较为脆弱，在这样的条件与背景下建设民族生态博物馆，探索在落后地区保护与传承民族文化，促进当地经济、社会的协调发展，具有深远的实践意义。生态博物馆由展示中心与怀里蛮将、化图、化桥三个自然屯的原状保护两部分组成。展示中心占地3亩，总建筑面积900平方米，总投资达到180万元，2004年11月正式建成对外开放。2005年6月初，参加贵阳生态博物馆国际会议的包括生态博物馆学创始人戴瓦兰先生在内的二十多位国内外专家学者专程到南丹进行了考察，并对白裤瑶生态博物馆给予高度的评价，同时对白裤瑶文化的未来发展走向表达了强烈的关注。目前，中国民族博物馆已将南丹里湖白裤瑶生态博物馆定为研究工作站。

3.2 三江侗族生态博物馆

2004年底借中国湘、黔、桂三省侗族文化保护研讨会在三江召开之机，广西文化厅重点完善已建成开放多年的三江侗族博物馆，投入资金将博物馆的陈列重新设置（开放《三江侗族文化展》），以位于县城的三江侗族博物馆作为三江侗族生态博物馆的展示中心与资料收集中心，同时采取“馆村结合”、“馆村互动”的方式，将三江境内苗江15公里流域范围内的高定、独洞、座龙、岜团等村寨列入生态博物馆保护范围，保护范围内有风雨桥13座，鼓楼26座，在这范围内侗族传统的建筑文化底蕴丰厚，织锦文化典雅大方，“月也”等节日风情淳朴浓郁，“款制”等制度文化依稀可见。三江侗族处于中国南部侗族文化圈范围内，是中国具有较为强大的文化生命力的民族之一，而由于旅游业发展较早、交通条件的改善很快，加之侗族人民对外来文化惯有的开放包容心态，外来文化的对这个区域的影响也较突出，文化的融合与变迁已在缓慢地发生，三江侗族生态博物馆的建设是在旅游业发展的背景下引导民族文化保护与传承发展的典型实践。三江侗族生态博物馆的建设根据当地实际情况，利用已有设施与资源，采取了展示中心与保护范围异地相结合的模式，保护幅盖面宽，管理模式（政府、专业机构与村民共同）新颖，“三江模式”作为目前中国生态博物馆建设中的独有类型得到了国内外专家的高度评价。

3.3 百色靖西县旧州壮族生态博物馆

壮族是广西的主体民族，建设具有代表性、能充分反映壮族历史与文化的壮族生态博物馆是广西政府建设广西生态博物馆体系的重点。在靖西县旧州街，壮族刺绣、织锦、土司遗存、民居建筑、山歌艺术、壮剧、木雕、节日等民族文化遗存的丰富性、完整性使之成为壮族文化的一个典型代表；而旧州壮族在历史上一直胸怀对各种外来文化兼收并蓄、为我所用的特点，是研究壮族文化变迁的一个典型地点。同时当地自然环境优美，交通便利，是与南丹白裤瑶及三江侗族情况完全不同的选址。旧州壮族生态博物馆展示中心占地2亩，总建筑面积700平方米，2004年3月奠基，2005年8月将建成。靖西是壮族人口高度集中的地方，壮族文化具有深厚的文化底蕴，作为其旅游业重点的旧州街，旅游市场已初步形成，而当地壮族人民对壮族文化的传承具有高度的自觉性，在发展旅游的同时也在逐步恢复业已消失的传统文化，体现着壮族人民在现代化冲击下高度的文化自觉性，旧州壮族生态博物馆的建立无疑将在机制上提升和强化这种自觉性，并朝着保护上的整体性方向发展。

3.4 桂北灵川县灵田乡长岗岭村汉族生态博物馆

汉族约占广西人口总数的五分之三。考古发现证明，早在春秋战国前后中原文化就开始了与古代广西区域的交流，中原民族也在此后陆续迁入岭南，形成了今天汉族与当地少数民族融合发展的盛况。在广西桂北地区，汉族在几千年的历史发展过程中，在带来中原文化的同时，也吸收了当地少数民族的文化精华，创造出有别于中原汉族传统文化的独特文化，并一直延续到现在。灵川县灵田乡长岗岭古城堡原叫瑶山岭，莫、陈、刘三姓于明朝初年迁入，建村历史已达600多年。由于地处“湘桂古商道”上的关键位置，经济繁荣，历史上有“小南京”有称号。在这里，汉族古建筑保存基本完好，科举文化丰厚，中原汉族文化遗存丰富，是桂北汉族文化的典型代表。古民居内保存完好的格扇、神龛、供桌、古匾、古椅、古床、古衣柜、书桌、书柜、花轿，雕花玲珑剔透，各式各样。长岗岭古城堡明清时期人才辈出，据不完全统计，有正五品1人，从五品1人，正六品2人，授六品军功3人，八品军功3人。长岗岭村四周至今还保留明清以来各时期大型的石雕豪华古墓葬七十多座，琳琅满目，各式各样。居民目前仍保存着传统的农业生产方式，各式各样的传统生产工具、生活用具及民俗文物应有尽有。长岗岭村集自然和人文于一体，集科研考察和传统研究于一体，具有较高的文化遗产保护和旅游业发展价值。当地群众对建立生态博物馆、保存民族文化、弘扬民族精神有着很好积极的认识和热情。在此地建设汉族生态博物馆，以此展开汉族（中原）文化与广西少数民族文化的融合、变迁的研究，具有地域性的人类学、考古学、历史学、民族学、文化学等标本研究作用。

3.5 桂北龙胜龙脊壮族生态博物馆

龙胜县龙脊梯田是一处闻名中外的旅游胜地，一年四季，龙脊梯田以其各具特色的美

丽风光吸引着无数的游客。龙脊梯田始建于元朝，完工于清朝，至今已有650年的历史，景区面积66平方公里，有“梯田世界之冠”美誉。龙脊的主要居民是壮族，这部分壮族是北部壮族的代表，服饰独特，风情独具，有古朴的民族歌舞与优美的壮族山歌，铜鼓舞、师公舞、打扁担舞令人耳目一新，传统的干栏建筑很有特点。有意义的是，在这里旅游业发展反而使当地壮族慢慢地恢复了过去已经消失了的部分壮族民俗与民族工艺，在中外游客的观赏中传承。龙脊旅游已经开展了十几年，旅游市场业已初步形成，在此地建设壮族生态博物馆，探索生态博物馆在旅游胜地为保护与传承民族文化，重新恢复那些消失了的民族文化元素，强化旅游区的人文内涵，为当地旅游业的发展提供文化支持，同时也为壮族民族文化在现代化冲击中的恢复与变迁进行学术上的深入研究，其意义是多方面的。

3.6 桂东贺州市莲塘镇客家围屋生态博物馆

“客家”人口在中国有八千多万。客家人从西晋至宋元年间历史上陆续均有迁入广西与当地文化相结合，形成了自己独具特色的客家文化，内涵丰富。客家围屋是客家文化的重要载体，在贺州市的莲塘镇有三处独具建筑结构特色、保存非常完整的客家围屋，在当地及邻近的广东省享有盛名。其中占地20多亩，建于清朝道光年间的仁冲村客家围屋是目前中国保存最完整、规模最大、历史最悠久的古建筑之一。其内部以下堂为中心分里外对称四层，有大小天井，四通八达。整座建筑平面呈方形，有高墙与外界相隔，屋宇、厅、堂、房、井布局错落有致，有北京故宫的建筑規制特色，也有江南建筑的风味，回廊、屋檐、挡风板、梁柱雕龙画凤，富丽堂皇。防御系统齐全，了望台周围枪眼分布合理，易守难攻，充分体现了古代客家人的聪明才智，有“江南紫禁城”之称，是典型的客家建筑艺术的结晶。客家围屋不仅具有聚族而居、安全防卫、防风抗震、冬暖夏凉的功能，而且具有丰富的文化内涵，其古老独特的客家建筑、精雕细刻的百兽图案、古朴典雅的明清家具、历经百年沧桑的农家作坊、热情奔放的客家歌舞、独具特色的客家饮食、感人的客家历史传奇，是客家文化的象征。莲塘镇客家围屋生态博物馆，对研究客家文化在广西的变迁过程及人文展示，不失为活态客家文化百科全书的广西章卷之阅。

3.7 桂西那坡县达文黑衣壮生态博物馆

黑衣壮是壮族的一个支系，自称为“敏”（亦称布壮），总人口5万多人，主要集中居住在广西的西南部那坡县。黑衣壮以黑为美，以黑色作为穿着和支系的标记。其服饰是黑衣壮物质文化的重要组成部分，反映着黑衣壮的社会经济生活及其变化，起到表征、再现黑衣壮文化内涵的作用。2000年南宁国际民歌艺术节上，黑衣壮的天籁般的歌声引起了国内外人士对黑衣壮的强烈关注，有关黑衣壮的人类学、民族学、历史学、艺术学等学科的研究一时成果丰硕，前所未有。有关专家认为，黑衣壮是至今保持壮族特色最为完整、最为显著，也是最为古老的族群之一，是壮族传统文化的活化石。在那坡县龙合乡共合村达文屯，黑衣壮保持着千百年来的生产生活方式，由于地处大石山区腹地，信息相对闭塞，

当地黑衣壮居民仍继承沿袭其古老的民族文化，如服饰文化、银饰文化、山歌文化、节日文化、丧葬文化、干栏文化、族内婚制度、男耕女织自然经济文化等，是研究黑衣壮的资源库。而对于在达文屯建设黑衣壮生态博物馆，当地村民表示了热切的期盼和大力支持——建设进入最后阶段了的达文屯建设黑衣壮生态博物馆是广西10座生态博物馆中，当地村民参与程度最高的一个项目。随着那坡黑衣壮生态博物馆、龙胜龙脊壮族生态博物馆将相继在2008年12月前完成基本建设，加上已建成的靖西旧州生态博物馆，分布于南、北与西部的广西三座壮族生态博物馆，构成了广西体系较完整的壮族文化保护区域与壮族文化研究的基地。

3.8 融水苗族自治县安太苗族生态博物馆

苗族人口在中国约有900万，主要分布在中国西南地区的贵州、湖南、云南、四川和广西等地。广西的少数民族排序为“壮瑶苗侗”，有着180万人口的苗族在广西是一个人口众多、民族特色鲜明的少数民族。广西融水县境内的“大苗山”以其原生态的自然环境，淳厚的民族风情、壮观的梯田风光闻名遐尔，广西的苗族主要聚居于这个区域。苗族历史、文化遗存极为深厚丰富，反映苗族文化、民俗及工艺的芦笙坡会、百鸟衣、斗马、“埋岩”、吊脚楼、“坐妹”、打油茶、酸鱼等民族文化表象更绚丽多彩，近现代中国关于少数民族题材的文学艺术、影视优秀作品中，苗族题材的作品尤为突出和流传广泛；以元宝山、摩天岭、贝江为代表的自然风光神秘悠远、丽壮观。安太苗族生态博物馆就选择在广西第三高峰的元宝山下、融浓郁的民族风情与秀丽的自然风光为一体的筱桑、元宝、培秀等三个苗族村寨。长此以来有关融水苗族的人类学、民族学、历史学、艺术学等学科的研究一直方兴未艾，安太苗族生态博物馆的建设不仅对苗族传统文化的保护与研究将产生更活态的标本式作用，还使苗族人民在基于对本民族文化的弘扬中，更自信地创造未来。

3.9 桂南东兴京族三岛生态博物馆

京族是广西特有的少数民族，共有人口近2万人，分布在东兴市北部湾的万尾、巫头、山心（称为“京族三岛”）一带，是广西少数民族中唯一以渔业为主的民族。京族原来居住在越南涂山一带，明清时期陆续迁入广西，至今已有近五百年的历史。京族是跨境民族，在越南叫越族，是越南的主体民族。京族语言与越语相同，风俗与越族也是大同小异，“唱哈节”是京族民间最隆重的传统节日。京族也是我国少数民族中人均收入最高的民族，他们在发展经济的同时又保存了自己的民族文化（如节日文化、服饰文化、独弦琴文化、婚恋文化、渔猎文化、干栏式建筑文化等），同时，京族与越南靠近北部湾的越族也有较为密切的交往，因此京族文化兼具民族文化、边关文化和海洋文化的特点。但是同其他地方一样，京族文化也面临着现代化与全球化的严峻挑战，其丰富且富有特色的文化也在慢慢流失，保护与传承京族文化是目前很迫切的任务。因此，建立京族生态博物馆，更好地收集、研究、展示京族文化，建立国内京族资料研究中心，借此研究跨境民族的文化变迁，推动

中越民族文化研究的合作，增强中国与东盟各国的文化交流，具有广阔的发展前景，更具有深远的国际意义。如今，东兴京族三岛生态博物馆已落户中国京族聚居区域——东兴市北部湾的“京族三岛”（万尾、巫头、山心三个村屯）上，开始了建设期。

3.10 桂中金秀瑶族自治县瑶族生态博物馆

金秀瑶族自治县位于广西中部偏东的大瑶山主体山脉上，最高海拔1979米，与广西东北、东南的七县、四市接壤，是中国第一个瑶族自治县，总人口约150000人，聚居着瑶、壮、汉等民族，其中瑶族人口占十分之四，是全国瑶族支系最多的县域。聚居在大瑶山腹地的茶山瑶、盘瑶、花蓝瑶、山子瑶、坳瑶5个瑶族支系虽属于中国瑶族共同体范畴，但在语言、服饰、社会生产、生活习俗等方面有着较多的独特性，以其古老悠久的历史文化、丰富多彩的习俗风情、斑斓五彩的瑶族服饰、朴实自然的黄泥鼓舞、神奇莫测的瑶医瑶药、惊险刺激的度戒绝技表演而名声远扬。该县地理位置于南亚热带和中亚热带交汇处，境内海拔1500米以上的山峰有24座，山峦起伏，绵延不绝，以丹霞地貌为主，风光旖旎、物景天成；广西第四高峰圣堂山空气清新，气候宜人，全年平均气温17℃，夏季平均气温23℃，是理想的旅游和避暑胜地，20世纪30年代就已被誉为“人间之桃源仙国”。

广西因是中国瑶族人口最为集中的省区而以“瑶族大本营”的称著。由于大山阻隔居住环境相对比较闭塞，不仅瑶族民族文化至今仍保持良好，还与东南亚、北美洲的瑶族有着很深的历史渊源，也因此大瑶山有着成就为“瑶族研究中心”的良好条件。原中国人大副委员长、著名民族学家费孝通先生于20世纪30年代曾到金秀进行瑶族社会历史情况调查，不仅撰写了许多相关金秀瑶族研究的专著，还根据金秀保存良好的瑶族文化生态，给予了金秀“世界研究瑶族在中国，中国研究瑶族在金秀”评价。金秀瑶族博物馆是广西较早建立的民族县域博物馆之一，十余年里为县域内瑶族文化生态的保护做了大量卓有成效的工作，也已成为国内外游客了解瑶族的重要场所。我们将结合金秀的实际，对金秀瑶族生态博物馆的建设沿用了“三江模式”，仍以县城的瑶族博物馆为主要基地，将其完善成为瑶族资料集成、研究中心和相对静态的展示中心，再将费孝通先生曾经调查过的六巷乡门头村（花蓝瑶）、古陈村（坳瑶）及金秀镇六段村（茶山瑶）等地划定为生态保护范围，从而形成金秀瑶族生态博物馆新的保护区域与体系，从机制上为实现“世界研究瑶族在中国，中国研究瑶族在金秀”、为研究半个多世纪以来瑶族社会历史、文化的传承与演变提供世界共享的平台。

4 评价和问题

传统博物馆是将藏品异地保护和展示，藏品完全脱离了它的原生环境；传统博物馆无法将藏品的信息量最大限度地展示给观众，更无法将无形文化遗产作为藏品看待，在少数民族传统文化的收藏保护与研究展示上弊端表尤其明显。“广西民族生态博物馆1+10工

程”既有藏品原地保护和展示，也有异地保护和展示；既有有形文化遗产的保护和展示，也有无形文化遗产的保护、传承、展演和发展，还有民族生态博物馆保护区政治、经济、文化等方面发展演变的全程记录，既可立体展现又可记忆展现，它解决了藏品的最大信息量问题，也解决了藏品“鱼儿离不开水”的问题，还解决了传统博物馆以往不太把无形文化遗产和有形文化遗产等同看待的问题，生态博物馆理念对中国经济欠发达地区的传统、民族文化的保护与传承的实用性，在中国贵州省、云南省、内蒙古自治区和广西等省区近十年的引入实验、探索与创新活动中已经得到证实。

“广西民族生态博物馆建设1+10工程”总策划总结了我国已建生态博物馆的经验教训，以冷静思考的态度对待所建设的民族生态博物馆持续性的专业化发展、文化机构功能的永久保持、受众面与利用平台的扩展与延伸、不可预见的非理想局面发生以及文化遗产保护的多渠道与多形式等问题，对待这些问题事先作出了独特的创造性防范与应对；以其重视不同国情与文化差别、前人实践经验与启示的学习与研究态度，客观认识和处理中国民族生态博物馆的实践中，保护区居民将经历一个从被动参与到自觉参与、再由自觉参与到民主管理的较长时期的事实，以三级政府引导和相对稳定的多学科专家集体先入的方式，创新了中国生态博物馆实践中的“广西”模式和道路（也被专家喻为“中国民族生态博物馆的第二代模式”）；在国际生态博物馆理念的指导下，强调生态博物馆的专业化，将传统博物馆基本功能的坚持和现代“生态”保护与展示理念的有效结合，保证其对文化遗产保护与传承（教育）职能卓有成效地履行；对实践经验和教训进行了理论性的总结与提升，形成规划、政府宏观调控的介入、一系列针对性专项规章的制定以规范，从而使其有序、健康并更具科学性；以核心项目与散而布之的项目的集约与联盟式稳定关系建立、以各种力量和资源的共享、以乐于担当虽为附加效益的其他社会责任为己任，不遗余力推动所在地社会与经济发展而深受村民欢迎与参与使之更具实践性、社会性和可持续性；以已建成项目在文化遗产保护职能作用有效发挥、对当地社会与经济促进的明显作用、受着待启动项目建设地政府与村民的热切期盼、国内外专家学者的高度关注与媒体的广泛宣传—这些效益与影响，都可预期其不仅因此将在国际生态博物馆发展史及中国博物馆发展史写入自己创新的一页，也将对中国民族文化遗产保护、历史街区、历史名镇名村、工业遗产的保护，以及其在社会主义新农村建设中已经产生的独特作用而具有较为广泛的借鉴与示范作用。

生态博物馆在中国的实践还收获了两项成果——一是生态博物馆不仅创造了城市居民享受了在地域上扩展与活态化了的博物馆文化，更重要的是它结束了广大乡村地区居民在居住区域享受不到博物馆文化的历史。传统博物馆是城市文明的象征，在中国发展的百余年历史中，它的存在与乡村文化的发展几乎毫不相干，而生态博物馆在乡村的建设将带给中国广大乡村地区遗产保护和公共文化体系建设划时代的影响与变化；二是在少数民族地区建设民族生态博物馆的实践，以保护民族文化生态为出发点，这项保护是整体保护、原地保护、自我保护及发展中保护相结合的系统工程。在民族生态博物馆成为专家学者研究

民族文化特别的基地的同时，这种保护模式带来了它的副产品——不同层次的旅游者随之而来，集合了文化旅游、生态旅游、学术旅游、采风旅游、大众旅游的民族生态博物馆旅游业的发展，推动少数民族社区社会、经济和文化的全面发展，改善了社区人民的物质生活条件，提高了他们对本民族、本社区特有文化的自尊心和自豪感，我们所看到的局面是，在这些已建和将建民族生态博物馆的民族地区和村寨，当地的民族同胞们已经开始以从未有过的、上升到了文化权益的意识，逐渐自觉地强化对本民族传统的、民族的文化的系统审视、珍惜保护和传承发展。

中国民族文化、尤其是少数民族文化保护与传承的另一实践途径——建设生态博物馆的实践大地在中国具有各方面典型性的农村，即文化保存较完整但经济相对落后的民族村寨，这决定了生态博物馆保护区居民对保护与传承的参与将经历一个较复杂的、由被动到自觉民主管理的一个长期过程，如何引导保护区居民从被动参与到自觉参与，再从自觉参与到民主管理，并保证其持续性发展，是中国民族生态博物馆实践的另一难点，也将在很大程度上决定中国生态博物馆事业的发展道路；中国式的生态博物馆建设中，政府、专家、居民三者对其持续发展有着重要社会基础条件，如何科学的处理和长期保持；旅游业在民族生态博物馆保护区域的发展势必造成新的文化冲突，如何处理民族传统文化保护和旅游开发的关系，如何处理文化遗产保护和当地居民对现代生活的追求等；政府如何实施对这一另类的“文化机构”长期的营运与管理、资金投入保障等等问题。

因其成为使命，所以笔者认为宋人苏洵“不先审天下之势，而欲应天下之务，难矣”应成为背负世界传统、民族文化保护与传承使命并为之努力者的警言。一个多元文化的世界的存在与持续还需要“因时立政”的智谋与进取式的实践。

現代社会の発展過程における少数民族文化保護・ 伝承を担う時代の責任と義務

— 中国「広西民族生態博物館建設1+10プロジェクト」の実践 —

覃 溥
訳：長沼さやか

- 1 中国広西の民族文化と文化遺産保護の状況
 - 1.1 多様性と多彩さ
 - 1.2 独自性と稀少性
 - 1.3 伝統性と完全性
 - 1.4 浸透性と包括性
 - 1.5 調和性と生態性
- 2 広西政府の民族生態博物館建設に関する思考と探究
 - 2.1 専門的な指導を首尾一貫して行う
 - 2.2 試行地区プロジェクトの選択の基点の把握と各級の共通認識の達成
 - 2.3 学習型の実験
 - 2.4 村民に生態博物館の主としての意識を強化させる
 - 2.5 中国政府による「保護を主体とし、救済を第一とする：合理的な利用と管理の強化」という文物工作の方針を生態博物館建設にも適用する
 - 2.6 生態博物館の建設と広西民族博物館の関係方式を政府が実施する民族の伝統文化とその他の文化遺産の保護、研究、伝承、展示工作の任務をになう連合体とする
- 3 広西民族生態博物館建設の「1+10プロジェクト」
 - 3.1 広西南丹県里湖の白褲ヤオ生態博物館
 - 3.2 三江県トン族生態博物館
 - 3.3 百色市靖西県の旧州チワン族生態博物館
 - 3.4 桂北霊川県霊田郷の長崗嶺村漢族生態博物館
 - 3.5 桂北龍勝県の龍脊チワン族生態博物館
 - 3.6 桂東賀州市蓮塘鎮の客家囲屋生態博物館
 - 3.7 桂西那坡県達文の黒衣チワン族生態博物館
 - 3.8 融水ミャオ族自治県の安太ミャオ族生態博物館
 - 3.9 桂南東興市のキン族三島生態博物館
 - 3.10 桂中金秀ヤオ族自治県のヤオ族生態博物館
- 4 評価と問題

我われがその存在を見たくないと思っても、世界では毎日のように衝突が起こっている。衝突は各種文明の間、伝統と現代の間において、異なる内容と方式で発生し、さらにはその異なる結果によって世界の発展に影響を及ぼしている。なかでも、日に日に劣勢となってきた少数民族文化にとって、衝突の影響が及ぶ範囲は歴史にも前例がない。複雑かつ高速に変化する時代の大きな背景のもと、わずかに注がれる関心のみでは、もはや遠く及ばない状況にある。中国における経済のグローバル化や、国際的な範囲に

おける経済自由貿易区の形成がもたらした距離の短縮と交流頻度の増加、郷鎮の都市化建設の加速と推進、文化多様性と多元化の保存と持続は、いまだかつてないほど緊迫した、民族の命運に関わる重大な社会問題にもなっている。歴史的な事実、民族精神や故郷を見守ろうとする心を放棄した国家と民族の衰退、甚だしい場合には消滅が必至であることを証明している。文化の多元性とその保護と伝承は、人類の生存・発展や国家と民族のアイデンティティに関わるものである。それは人びとの環境や資源に対する保護が人類の存亡に関わるのと同様、世界中の心ある人びとにその心身を投じるよう呼びかけて行動に移す使命を帯びている。

1 中国広西の民族文化と文化遺物保護の状況

広西は、多くの民族が集住する辺縁地域の1つであり、チワン（壮）、ヤオ（瑶）、ミャオ（苗）、トン（侗）、スイ（水）、ムーラオ（仫佬）、コーラオ（仡佬）、イ（彝）、マオナン（毛南）、キン（京）、回族の11の少数民族、合わせて約1800万人以上の人びとが暮らしている。歴史上において、たとえば古代陝西文化、越文化、滇文化、楚文化、中原漢文化のような各種の古い文化、ならびに各民族の伝統文化、はては千年以上も前に「海のシルクロード」を伝ってやってきた「洋」文化などが、みなこの地域に共存し、相互に影響と交流・融合をしながら、深厚で豊富な広西民族伝統文化を造り上げ、今日、我われが眼にする特色のある民族文化生態を残してきた。

建国以来、広西政府は自治区全域において、三度にわたる大規模な文化遺産調査を行ってきた。とくに1980年代初期の全国的な文物調査と、2000年代に2年にわたって行われた古民家建築群と少数民族建築群の保護状況に関する調査では、合わせて1万カ所を超える一定の価値を有する各時代の移動不可能な保護地点が登録された。そのなかには、明確な民族の特徴をもった保護地点が4000カ所以上あり、総数の半分を占めるに及んだ。しかし、いまだ登録されていない古民家や古い街並みや村落もまた400カ所以上あり、広西各地に分布している——これらは、古くは明清時代、新しくは民国時代の建築構造とスタイルを完全に保存しているだけでなく、多くの古い民俗と伝統的な技芸を引き継いできており、非常に高い歴史、科学、芸術的価値を有している。このほか、広西では100カ所以上の文博機関において、これまでに出土したものや、後世に伝えられてきたものなど、27万点以上の文物や芸術品を所蔵している。少数民族の民間で千年もの間伝承され、現在も使用されている銅鼓およびその他の民族器具、各民族の間に残されている言語、神話、叙事詩、音楽、舞踏、戯曲、曲芸、切り絵、絵画、彫刻、刺繍、染物などの各種文化、芸術、技芸、および各種の儀礼、年中行事、民族競技活動など、豊かな無形文化遺産は、その強い生命力によって今日の広西文化の伝承と発展に影響を与えている。

1.1 多様性と多彩さ

広西の歴史は長く、土地の面積は広く、民族は多く、異なる民族、異なる支系、異なる地域には、異なる文化の形式と内容があり、民族文化は多様かつ多彩である。たとえば民家建築のように、漢族の中庭式の民家、園林式の山荘、客家の囲屋、少数民族の高床式建築、南洋スタイルの騎樓などがある。民族衣装については、広西に住む12の民族はみな、それぞれの伝統的服飾を有している。同じ民族でも支系が異なれば、やはりそれぞれに異なった服飾がある。なかでもヤオ族は異なるスタイルの服飾が20種類以上も存在し、その典型である。

1.2 独自性と稀少性

異なる民族は異なる文化を有しており、広西の民族文化が独特、かつ稀有であることは目に見えて明らかである。たとえば、戦国から後漢にかけて、チワン族の祖先である駱越人がおこなっていた巫術活動がとどめられている左江岩画は、左江沿岸の200kmに渡って延々と分布している。そのなかでも典型的である寧明の花山岩画は、幅が172mに達し、面積は8000㎡以上、描かれている人物は1900以上である。人物のうち最も大きなものは3m、最も小さなものは0.3mであるが、他に動物や器具も少し描かれている。規模が大きく、情景は壮観で、内容もたいへん豊富であり、その歴史、芸術、科学、民族研究上の価値は、稀少なものとして賛嘆されている。

また、広西の銅鼓文化は独自の特色を有しているだけでなく、第一に起源が古い。古い銅鼓とこれに関連する習俗は、今日に至っても依然として、多くの少数民族地区で使用され（民間で收藏されているのはわずかに1500面となっている）流行しており、重厚で深遠な銅鼓の音色は千年の時空を超えて、現在も絶えることはない。古い銅鼓文化は、万人がその神秘を探ろうとする生きた化石となっている。第二に、種類がそろっており、数が最も多い。広西は現在のところ、春秋戦国から明清にかけての各時代、各タイプの銅鼓を2000面以上も保存しており、世界一を誇る。第三に、大きさが巨大で、鑄造が精巧であり、逸品が多い。たとえば、北流県で出土した雲霄紋大銅鼓は、鼓面の直径が165cm、重さが300kg以上ある。これまで世界で知られてきたなかでは大きさ、重さともに最大の銅鼓で、「銅鼓の王」と讃えられている。貴港澳墓で出土した「割船羽人舞踏紋」銅鼓や、桂平県の「牛拉槓変形羽人紋」銅鼓も、華麗で優美な造型で、図案ははっきりとしていて多彩であり、立体的な彫刻は多様であるうえに生活の息吹にあふれている。いずれも世にも珍しい貴重な逸品である。

1.3 伝統性と完全性

広西は祖国の辺縁に位置し、経済発達が遅れた地域に属するうえに、多くの民族が集住する比較的辺鄙な地域であるため、多くの伝統文化が系統的かつ完全に保存されてき

ている。たとえばトン族の民家建築・工芸、チワン・トン・ヤオ・ミャオ各民族の紡織、染物、刺繍、金属加工、服飾技芸、多くの民族の年中行事、歌謡、技芸などもみな、比較的完全な形で伝承されてきている。

1.4 浸透性と包括性

広西の各民族の分布は、「大分散、小集居」という特徴がある。各民族は長期間にわたって接触・交流をくりかえし、それぞれの文化は一方で独特な伝統を有しながらも、他方では互いに浸透・融合してきた。桂北の農村のチワン族、漢族、トン族、ミャオ族の高床式の木造建築や、建築資材、建築構造、工芸や装飾はみなだいたい同じであるが、これはその典型的な例である。このほか、祝賀行事や食文化、娯楽などにおいても、各民族はみな、類似した習俗、または共通した習俗を数多く有している。

1.5 調和性と生態性

広西の各民族は長い間、この地に発祥し、発展してきた。この地の水土が育てた人民がこの地の文化を育ててきており、民族文化は、自然に調和した光景を呈している。トン族が住む山地の村落・鼓楼・風雨橋は、緑の山々・田野・河流と調和した美しさを呈している。高山峻嶺にあるヤオ族の村は森林の間で互いを引き立てあい、もとの地形と植生が非常によく保存されており、白褲ヤオの「物我合一」の哲学理念をよく表している。まさに、このような人文・自然環境において（調和的、生態的文化環境は、民族文化の保存のための重要な条件であり、また少数民族文化のとりわけ突出した点でもある）、民族の伝統文化は長きにわたって完全な形で保存され、持続されてきたのであり、各種の伝統文化と相互に依存しながら、綿々と伝承されてきたのである。

広西の民族文化の起源が長く、民族文化の生態が多様で壮観であることは各民族の人びとに華々しい文化成就と文化遺産をもたらした。しかし、中国の現代化の加速と市場経済の広がり・発展にともない、昔は相対的には世間から隔てられていた民族地区も外来文化による不断の衝撃に直面するようになり、衝突と融合の激化と加速化を生んだ。新たな生活スタイルは人びとの衣食住や行動を変え、外来文化の流入とファストフード文化は文化消費市場を急速に占領し、科学技術の日進月歩の発展と急速な知識の更新は、伝統や民族文化に対する衝撃を生み出し、まさにこの最後の「浄土」にも襲来した。稀少な民族文化遺産（とくに、民族の民間言語や芸術、民間工芸美術、民間風俗儀礼、祝賀行事などの無形文化遺産）は、消滅の重大な危機に面している。この危機に際して中国広西政府は鋭敏な意識と、辞退しがたい責任感をもって、さらなる具体的な措置と行動により、この方面における職能と義務を強化したのである。

2 広西政府の民族生態博物館建設に関する思考と探究

20世紀後半、貴州省政府は中国生態博物館建設の先駆者として、欧米の生態博物館の理念を中国少数民族文化の保護と伝承に用いた。1998年より我われは、隣省がおこなってきたこの偉大な文化プロジェクトの伸展を注視しながら、ヨーロッパに起源をもつこの新たな博物館の理念への接触を開始し、広西における生態博物館建設の問題を、広西文化遺産保護「十・五計画」に組み入れ、いかにして広西の文化遺産保護事業の具体的な実践に生態博物館のモデルを運用してゆくかについての検討と研究をはじめた。2001年、我われは広西において関連する政府や文化関係の官員で構成された視察団を組織して貴州省を訪問し、六枝特区の50数km北にある山深くに建設された、中国で最初の生態博物館——梭嘎鄉隴戛寨ミャオ族生態博物館を参観した。貴州省の計画・場所の選定・事業の始動・組織と具体的な実施など、長年にわたる建設に関する思考の道筋や状況についての説明を聴いてゆく中で、我われは、ミャオ族村内に建てられ、すでに対外的に開放された資料センターと生態博物館の文化模範家庭を詳細に視察し、ミャオ族の村民と談話し、彼らの生態博物館の重要な構成部分としての体験と実直な情熱を体感した。この視察で我われは、中国的な特色のもとでの生態博物館建設の選択と実験の可能性、および将来的な見通しを目にすることができた。また、我われは長時間かけて険しい山道を往復するなかで、隴戛寨ミャオ族生態博物館建設の困難な環境と、任務は重要だが道のりは遠いという状況において、この選択をすることの意味に深く思い当たった。生態博物館の建設は尻込みや放棄ができない選択であり、伝統的な意味での博物館の建設とは異なり、あまりに多くの内容と従来にはなかった機能を付与されている。そのため、その後の2年余りの時間において我われは、熟考し、各分野の意見を聞き、さらに深く広西の資源とさまざまな条件の考察と分析を繰り返し、実情に見合った方案を研究してきた。「中国の特色」があり、広西の実情にも合う生態博物館の建設モデルを全力で追求し、そのことを通じて伝統的な民族文化の保護の緊迫した局面に有効な方法で対応しようとした。

中国における生態博物館の広まりは、中国の現代化建設のもと、悠久の歴史文化を保護し、光り輝く民族伝統文化を伝承してゆくうえで必至であり、中国少数民族政策および、一部の少数民族地域の社会と文化の発展のためにも必要なものである。現代化における工業の発展や、自然資源に対する急速な開発、それによってもたらされる自然環境と人文生態の破壊、ならびにこれらすべてから引き起こされる伝統文化への衝撃が、各国における生態博物館の建設者たちが選択した共通の背景である。しかし、フランスにおいて最初に創建され、その後も欧米、アジア、日本に至るまで実験的に建設された各国の生態博物館ともっとも異なる点は、貴州省は社会発展が相対的に遅れており、条件的にもっとも困難である地域を全国に先駆けて中国生態博物館建設の実験地として選択

したということである。先進国は、「すでに現代化され人びとの生活が豊かな」村や町、旧工業区や、都市のなかの歴史街区を生態博物館の建設地を選んでいいる。しかし、中国の貴州省の生態博物館建設地は、民族の個性が明確で、情緒や習俗、民族伝統技芸と地域の自然環境が協和し保存されていることを基本条件としている。中国の民族伝統文化保護の主な対象と分布地域は、このような「浄土」(聖域)である辺縁の山岳地域や村落、社会と経済の発展が欠けている地区が選ばれ、それ以外はあり得ない。先進国の生態博物館建設は、十分な経済基盤のもと、最高の科学技術が誇る媒体と手法、広がり、容量、形式を最大限に快速化することで、「稍縦即逝」、少し放置するとすぐに消え去るような一切の過去と現在の情報を打ち込んでいる。中国の生態博物館は、国情から「因地制宜」(土地の事情に合わせて適切な方法をとる)という考え方を必要としており、経済面で助けられないという制約条件に向きあっており、性急にことを進めるとかえって目的を遂げられない。先進国の生態博物館建設は、地域の人びとがすでに「回帰」を自覚し、良好な文化レベルのもと、積極的に参加するなかで行われているが、我が国の生態博物館の提唱者や建設者たちが直面しているのは、当該地域の人びとに対して新たな意識、観念と先進文化を導入し、参加の動員をおこなうことである。なぜならわが国の建設者たちが向き合っているのは、衣食を満足させるために貧困と闘い努力している人びとであるからである。このような4点の重要な違いを中国の生態博物館の特殊性ととらえ、「文化機構」は同じでも、課せられた職責と使命は異なるのだと考える。つまり、経済の発展、文化の普及、自然生態の保護、居住環境の改善、新たな故郷の建設、伝統民族文化の保護と伝承は、すべて並行されなければならない。このような文化事業に対して、それは重く困難であるかに見える。しかし、まさにそれゆえに中国生態博物館の建設は、偉大な事業と呼ぶにふさわしいのである。

2002年、広西政府は区都、南寧市において長年にわたり練り上げてきた広西民族博物館の建設計画を開始した。これは規模が面積30000㎡以上に達する現代的な博物館で、将来、広西各民族の伝統文化を収蔵、保護、研究、伝承、展示する専門の大型博物館となる予定である。しかし、すでに直面している外来文化の衝撃と衝突について、広大な民族村落の伝統文化保護に根ざして国外や貴州省でおこなってきた生態博物館の実践と成功は、現実的に実行可能なもう1つの道筋を提示している。すなわち生態博物館の建設である。2004年、広西政府は6年間の思考と準備のすえ、6項の原則のもと、広西の特色をもった生態博物館建設の道のりを模索的に進み始めた。

2.1 専門的な指導を首尾一貫して行う

民族学、考古学、博物館学、歴史学、地方史学などの専門家で「広西生態博物館建設課題チーム」を組織し、特定のテーマで広西生態博物館建設の専門の業務と関連する学科の実行可能性の研究をおこない、プロジェクトが始動した後も最後までこれらの業務

指導を担当する。専門家の団体が終始、指導に当たりながら実施することで、今後実施してゆく生態博物館建設プロジェクトを保証する。こうした仕組みはもちろん、政府の管轄する部門が決定した科学的方策であり、プロジェクト実施場所の人員の専門レベルが一時的に不適合な状況にあった場合、補足作用がたいへん大きい。

2.2 試行地区プロジェクトの選択の基点の把握と各級の共通認識の達成

生態博物館の定義である基本原則を遵守し、民族の代表性を強調し、特性が明らかで、一定の歴史の積み重ねと歴史文化の遺物があり、現存する自然と文化生態の保護が良好であるなど、構成するところが「鮮やかで生き生きとした文化整体」であるのが、試行地区プロジェクト選択の基本の必要条件である。プロジェクト開始前期には、試行地区プロジェクトが置かれる市、県、郷、村の4つの政府、組織とともにプロジェクト建設の意義、目標、場所の選択、管理構造と投資組織などの問題において、共通認識を形成するとともに、実行の可能性を保証し、広範な一致をもってプロジェクトの実施に保証を提供した。

2.3 学習型の実験

生態博物館はここ40年来、世界の博物館体系のなかに突然現れた「新しい勢力」であり、理論が整備される途上であるだけでなく、実践活動においても呼称が統一されておらず、モデルも多様である。そのため、実際の作業にさらに必要となるのは、明晰な思想指導で根本を把握し、決意を捨てないという点である。2003年、広西政府は「十百千の人材に関する重点プロジェクト」による人材育成基金によって、広西ではじめて生態博物館の建設を迎えようとしていた南丹県の「広西生態博物館建設の思考の筋道とモデル検討のための高級研討班」設立を援助し、50名以上の地方政府の官員と、50数名の文化遺産保護機構の人員に対して、専門の訓練養成をおこなった。中国で著名な博物館学の理論家・蘇東海氏など国家クラスの専門家も、欣然として遠路はるばる訪れ、研究員たちに講義をおこない、みなと討論し、試行地区プロジェクト所在地において現実に作業を遂行する者にとっての理論と実践のうえでの疑問と問題に答えた。これにより、広西民族生態博物館の建設は、豊富な実践経験と理論的な指導のもとに発足することとなった。貴州省の「生態博物館プロジェクトの実施チーム」もまた、彼らの6年にわたる豊富な実践経験をもたらした。これは新たな事業の試みであることから、その後のプロジェクト実施においても我われは終始、各種形式の不断の「学習」と討論を強調したのである。

2.4 村民に生態博物館の主としての意識を強化させる

生態博物館の特徴は、当該地域の人びとの参与であり、これは生態博物館が成功する

かどうかを押し量る基準の1つでもある。我われは各級政府、文化行政の主管部門と当該地域の人びとが生態博物館建設における関係を正確に処理するよう強調した。今後、長期にわたる作業の行程においては、地域住民の参与の組織にさらなる注意を払い、地域住民に働きかけて、能動的に参与し、最終的に生態博物館の主人となってゆくことなくしては、生態博物館が効果的に地域内の民族文化を保護、伝承する目的と任務は実現しえないということを十分に認識させたのである。

2.5 中国政府による「保護を主体とし、救済を第一とする：合理的な利用と管理の強化」という文物工作の方針を生態博物館建設にも適用する

生態博物館の建設は、自然・人文資源の保護と伝承の必要性に基づいており、このため生態博物館建設の遠大な目標は未来である。中国式の理想的な生態博物館の建設は、その主人である人びとの生活を変え、地域経済を発展させ、さらにすばらしい故郷を建設することの始まりである。元来、地域にあるすべての有形無形の「文化要素のうち特殊な価値と意義を持った」資源の保護とはすなわち、このプロジェクトの目標の実現と永続的な発展の前提となる保証である。このため、生態博物館の門を開き四方から賓客を迎え入れる前に、保護の意識を固く樹立し、その意識が現地の住民一人ひとりのものに根を下すことが非常に重要である。

2.6 生態博物館の建設と広西民族博物館の関係方式を政府が実施する民族の伝統文化とその他の文化遺産の保護、研究、伝承、展示工作の任務をになう連合体とする

広西政府は、行政的な措置により、自治区全域に分布する各民族生態博物館と広西民族博物館の間に、長期的で安定した相互の活動と伸展の関係を構築してきた。広西民族博物館研究工作点の形式をもって、各生態博物館を、広西民族博物館が各民族に対して行ってきた長期の追跡による調査研究、文化遺物の収集と研究成果利用の拡張における基地とした。現代の科学技術の手法を運用することで、両者の間に情報ネットワークを確立し、各生態博物館には広西民族博物館というさらに広いプラットフォームの助けを借りさせ、外部世界との関係を伸展させ、地域と時空の制約を受けずに観衆を拡げるようにする。行政のコントロール方式をもって、両者の間に全方位的な資源共有のプラットフォームをつくりあげ、両者の優れた部分を相互に補うようにさせて、資源価値と利用率を高める。「連合体」の作用は、各生態博物館の建設初期において、その健康な成長にとりわけ重要なものである。

2003年の下半期から2005年の5月にかけて、実地観察と実行可能な研究の完成後、広西政府は少数民族が集住する百色市靖西県旧州のチワン族、河池市南丹県里湖（郷）の白褲ヤオ、柳州市三江侗族自治県の苗江トン族の3カ所の村落を、広西民族生態博物館

の試行地区プロジェクトとして選出した。その2年後、「広西南丹里湖白褲ヤオ生態博物館」、「広西三江トン族生態博物館」、および「広西靖西旧州チワン族生態博物館」が基礎的な建設を完成させて（生態博物館建設の）作業を発展させた。しかし、まさに2年以上の探求的な実践を行った後、我われはむしろ強烈にこれらの作業が真に意義ある始まりであると思いついた——これは、とりわけ中国においては、生態博物館と伝統的な博物館との最大の違いでもあるが、伝統的な博物館はすべて始まりに困難がともなうが、生態博物館の困難はすなわち開館後にある。我われは実践において、いかなる1つの原本も存在しないというのが文化概念の事業であり、その内容と外延はこのように複雑で広範であり、関連する社会問題は数多くあり、一地域、一範囲内の村落の人びとの生活の変貌、社会発展とこれほど緊密に結びついているのだということを、深く思い知らされた。そしてまた、住民の参加が必要な文化事業の進行過程において、観念、行為、利益の上でこれほど多くの衝突に直面し、そうした衝突を正確に導き、処理することに困難がともなわないケースなど絶対にあり得ないということをも知った。しかし、意義もまたこの点にあるのであり、この事業の探求は根気と強い意志が求められる過程であった。

3 広西民族生態博物館建設の「1+10プロジェクト」

3カ所の試行地区プロジェクトの経歴は、広西式の生態博物館建設が研究討議をおこない完璧にすべき多くの問題を、依然として抱えていることを物語っている。しかし、これは1つの事業が発展する過程での正常な現象であり、民族生態博物館が民族文化の保護と伝承のうえですでに作用を発揮してきたという事実を改変することはできない。広西の各級政府は、民族生態博物館建設の歩みを確固たるものとし、さらなる総括と分析の基礎をつくりあげた。そのうえで、広西政府は2005年、今まさに建設している広西民族博物館と、将来、全自治区で次々と建設する予定である10カ所の民族生態博物館を結びつけて「連合体」を作り出し、広西全域で政府が実施している民族の文化遺産の保護、研究、伝承、展示の任務について政策決定を共に担うこととした。また、「広西生態博物館建設課題チーム」が現代プロジェクト学の方法によって編成した『広西民族生態博物館建設の「1+10プロジェクト」の建議書』を採択し、地域、民族および影響、輻射、効果と利益、研究課題などの方面から総合的に企画し、この先3年以内に桂中、桂西、桂北、および桂東南、桂東などの地域にさらに7カ所の民族生態博物館を建設することとした。すなわち、桂東賀州市の蓮塘鎮客家圍屋生態博物館、桂中融水ミャオ族自治県のミャオ族生態博物館、桂北靈川県靈田郷の長崗嶺商道古村生態博物館、桂南東興（市）の京族三島生態博物館、桂北龍勝（各族自治県）の龍脊チワン族生態博物館、桂西那坡（県）の達文黒衣チワン生態博物館、桂中金秀ヤオ族自治県のヤオ族生態博物館で

あり、3カ所の試行地区プロジェクトと合わせて「1+10プロジェクト」のうちの「10」となり、広西民族博物館の工作点と研究基地としての作用を発揮する。また、広西民族博物館は「1+10プロジェクト」概念のうちの「1」であり、「龍の頭」、あるいは「1+10」の総合的なプラットフォームとしての作用を発揮する。設立するそれぞれの民族生態博物館は、選ばれた地域において一定の文化保護区を画定するほか、保護区内外の適当な位置において、適度な規模で、風貌や景観が文化保護区と調和しており、村民が利用・活動しやすい展示センターを建設する。展示センターは現代の展示技術を反映させた当該地域の歴史概況と民族文化をテーマとした展示をおこなうほかに、記録を整理するための作業室や、小型のマルチメディア会議室、短期逗留して研究する学者にとって便利な客室をそなえている。広西民族博物館は、それぞれの民族生態博物館が撮影、録音、保存、放映したものを集約する機能を持った高度な設備を配備し、それぞれの生態博物館が長期にわたる文化の記録、展示、ネットワークへのリンク、学術研究を行えるようにしている。10カ所の民族生態博物館は、すべて広西民族博物館の長期の作業と民族文化研究の基地として、広西民族博物館に対して収藏品と研究成果を不断に提供し、広西民族博物館の館内所蔵品と展示内容を豊富にする。また、ネットワーク技術を通して、これらと広西民族博物館の間に資源や研究成果、展示宣伝を共有するための遠距離のプラットフォームを作り上げ、事業のうえでの連合総体を形成し、持続的な発展につなげてゆく。

3.1 広西南丹県里湖の白褲ヤオ生態博物館

2003年12月3日、広西、中国ではじめてのヤオ族生態博物館——広西南丹里湖白褲ヤオ生態博物館の展示センターが、南丹県里湖郷懷里村で定礎式を行った。歴史、伝統と自然環境などの要因から、懷里村の白褲ヤオは現在のところ極めて独特で完全、かつ豊富な伝統文化を保存、継承してきており、そこに含まれる染織文化、儀礼文化、制度文化、銅鼓文化、喪葬文化、建築文化は、いずれも一般とは異なったものである。ある意味からすると、この地区の白褲ヤオ文化は広西民族文化のなかでも、閉鎖的で辺鄙な自然地理環境のもとにおかれ、独立して緩慢に発展してきた少数民族の文化の特徴を体現している。しかし、こうした事例は広西では珍しくなく、相対的に辺鄙な環境においてのみ、少数民族の文化はグローバル化と現代化の衝撃や影響を比較的少なく受けるにとどまり、古く原始的な民族文化を保存することが可能となったのである。このことともなっていて生じているのは、当該地域の経済建設の相対的な遅れと、人びとの生活水準の相対的な低下という問題である。こうした環境のもと、民族文化は相対的にいえば脆弱になりがちである。このような条件と背景において民族生態博物館を建設し、後進的な地域において民族文化の保護と伝承を探究し、当該地域の経済と社会の協調的な発展を促すことには、深遠な実践意義がある。生態博物館は展示センターと、懷里村の蛮将、

化図、化橋の3カ所の自然村を現状保護した地点の2つの部分から構成されている。展示センターは三畝の敷地を有し、建物の総面積は900㎡、総投資額は180万円に達し、2004年11月に正式に落成し、対外的に公開された。2005年6月初めには、貴陽の生態博物館国際会議に参加した生態博物館学の創始者ユグ・ド・ヴァリーヌ氏をふくむ20数名の国内外の専門家や学者が特別に南丹に参観に訪れた。彼らは白褲ヤオ生態博物館を高く評価すると同時に、白褲ヤオ文化の未来の発展に対して、強い関心を示した。現在、中国民族博物館はすでに、南丹里湖白褲ヤオ生態博物館を研究工作地点とすることを取り決めている。

3.2 三江県トン族生態博物館

2004年の年末、中国の湖南、貴州、広西のトン族文化保護研究会が三江（トン族自治県）で行われることとなり、広西文化庁はすでに落成し公開して数年が経っていた三江トン族博物館を、重点的に十全なものとし、博物館の展示を改装（『三江トン族文化展』を公開した）するための資金を投入し、県城（県政府所在地）にある三江トン族博物館を三江トン族生態博物館の展示センターと資料収集センターとし、同時に「館村結合」、「館村互動」の方式を採用し、三江県内を流れる苗江の15kmの流域範囲において、高定、独洞、座龍、岜団などの村落を生態博物館の保護範囲に入れた。保護範囲内には、13の風雨橋、26の鼓楼がある。この範囲におけるトン族の伝統的な建築文化は重厚で、錦織文化は優雅で洗練されている。「月也」などの年中行事の情緒は、純朴かつ濃厚で、「款」などの制度文化は希少なものである。三江トン族は中国南部のトン族文化圏の範囲に居住し、中国では比較的に生命力が強い民族文化のうちの1つである。しかし、観光業の発展が比較的早期に進んだことから、交通条件の改善も急速に進んでおり、くわえてトン族の人々は外来文化に対して開放的で受容的な心理状態にある。この地域に対する外来文化の影響は突出しており、文化の融合と変容はすでにゆっくりと生じてきている。三江トン族生態博物館の建設は、観光業の発展を背景に、民族文化の保護と伝承の発展を導くための典型的な実践である。三江トン族生態博物館の建設は、当該地域の実情に合わせて、すでにある設備と資源を利用し、展示センターと保護範囲の異なる部分を結合させるモデルを採用し、領域の広さを保護し、管理モデルを全く新たなもの（政府、專業機構と村民が共同とするもの）にした。「三江モデル」は、目下の中国生態博物館建設における特有の類型として、国内外の専門家の高い評価を得ている。

3.3 百色市靖西県の旧州チワン族生態博物館

チワン族は広西の主体民族で、代表性をそなえ、チワン族の歴史と文化を十分に表現したチワン族生態博物館の建設は、広西政府が広西生態博物館体系を建設した際の重点である。靖西県旧州街は、刺繡、錦織、土司の遺跡、民家建築、山歌芸術、壮劇、木彫、

年中行事などのチワン族の民族文化遺産が豊富、かつ完璧であることから、チワン族文化の典型、代表の1つとされてきた。かつ、旧州のチワン族は歴史上、つねに各種の外來文化を受け入れて蓄え自らのものとする特徴を持ち続けてきた。チワン族文化の変遷を研究するための1つの典型地点である。また、当該地域の自然環境は優美で、交通も便利であり、南丹白褲ヤオ、および三江トン族の状況とは完全に異なる選定地点である。旧州チワン族生態博物館の展示センターは2畝の敷地があり、建物の総面積は700㎡、2004年3月に定礎式を行い、2005年8月に落成した。靖西はチワン族人口がとくに集中する地域で、チワン族文化は奥深く、観光業の重点としての旧州街では、初歩段階の観光市場がすでに形成されており、当地のチワン族の心づきは、チワン族文化の伝承に対する高い自覚を持っている。観光業の発展と同時に、すでに消失した伝統文化の回復をめざす動きも少しずつ起こっており、現代化の衝撃のもとにおけるチワン族人民の高度な文化自覚性を表している。旧州チワン族生態博物館の建設は、間違いなく構造上、このような自覚性を高め強化し、文化の保護が完全になる方向へ向かって発展するだろう。

3.4 桂北靈川県靈田郷の長崗嶺村漢族生態博物館

漢族は、広西の人口総数の約5分の3を占めている。考古学の発見では、つとに春秋戦国時代前後に中原文化が古代広西地域との交流を始め、この後、中原民族が続々と嶺南に移住し、今日のような漢族と当地の少数民族が融合し発展する盛んな状況となった。広西桂北地区は、漢族の数千年の歴史発展過程において、中原文化をもたらしたと同時に、当地の少数民族の文化の精髓を吸収し、中原漢族の伝統文化とは別の独特の文化を創出し、現在まで継承してきた。靈川県靈田郷長崗嶺の古城堡は、もとは瑤山嶺と呼ばれ、莫、陳、劉の三姓が明朝初期に移住してきて、村がつくられてすでに600年以上の歴史がある。「湘桂古商道」（湖南と広西をつなぐ古い商業の道）上の鍵となる地点に位置にするため、経済は繁栄し、歴史上、「小南京」という称号をもっている。ここでは、漢族古建築の保存が基本的に整っており、科挙文化が厚く、中原漢族文化の遺物も豊富であり、桂北漢族文化の典型的代表である。古民家内で保存状態が良好な格扇（隔扇、部屋の仕切り板）、神棚、案卓（供物台）、古い扁額、古い椅子、古いベッド、古い衣装箱、文机、書棚、花轎（花嫁の輿）などは、模様の彫刻が精巧で美しく明晰でさまざまな様式がある。長崗嶺の古城堡は明清時代に人材を輩出し、不完全な統計によれば、正五品1人、従五品1人、正六品2人、六品軍功を授かった者が3人、八品軍功を授かった者が3人いる。長崗嶺村の周囲には今も、明清時代以降、各時代に石を彫ってつくった豪華な70カ所以上の大規模な古い墓が残されている。いずれも逸品揃いで、多種多様である。住民は現在も、伝統的な農業生産の方式を保っており、各種の伝統生産工具、生活用具、および民俗文物がすべて取り揃っている。長崗嶺村は自然と人文、科学研究の考察と伝統の研究が一体化し、文化遺産保護と観光業発展の高い価値をそなえている。当

地の住民は、生態博物館の建設、民族文化の保存、民族精神の発揚に対して、積極的な認識と情熱を持っている。この地に漢族生態博物館を建設し、漢族（中原）文化と広西少数民族文化の融合、変容の研究を展開することで、地域的な人類学、考古学、歴史学、民族学、文化学などの標本研究の作用が備わる。

3.5 桂北龍勝県の龍脊チワン族生態博物館

龍勝県の龍脊棚田は、中国内外でも著名な景勝地である。一年の四季において、龍脊棚田はそれぞれ特徴のある美しい風景で多くの観光客をひきつけている。龍脊棚田は元代に造られ始め、清代に完成した。現在まで650年の歴史がある。風景区の面積は66km²で、「世界一の棚田」と称賛されている。龍脊の主な住民はチワン族で、ここのチワン族は北部チワン族の典型であり、独特の服飾、独自の風情を有し、古風かつ素朴な民族歌舞と優美なチワン族山歌、銅鼓舞、師公舞、打扁担舞（天秤棒を打つ舞）は見る人の耳目を一新するほどである。また、伝統的な高床式建築も特徴的である。この地に観光業を發展させ、また当地のチワン族のもとで過去にすでに消失してしまった一部の民俗と伝統工芸を次第に回復させ、国内外の観光客のまなごしのなかで伝承してゆくことには意義がある。龍脊で観光業が始められてから10数年が経ち、すでに初歩段階の観光市場が形成されている。この地にチワン族生態博物館を建設することで、観光地の生態博物館が民族文化を保護・伝承し、消失してしまった民族の文化要素を再び回復し、観光地区の人文内容を強化してゆくことを探求する。また、当地の観光業發展を文化支援につなげ、同時に、チワン族の民族文化が現代化の衝撃のなかで迎えた回復と変遷について深く学術的な研究を行ってゆくなど、その意義は多方面にわたっている。

3.6 桂東賀州市蓮塘鎮の客家圍屋生態博物館

「客家」は中国に人口8000万人以上が住んでいる。客家人は西晋から宋元年間にかけて歴史上、続々と広西に移住し、当地の文化と結合し、独自の特色ある客家文化を形成してきた。その内容は豊富である。客家圍屋は客家文化の重要な構成要素であり、賀州市の蓮塘鎮には独特の建築構造の特色をそなえ、保存も完璧な3カ所の客家圍屋がある。圍屋は当地および近隣の広東省のそれが著名である。その中でも20畝以上の敷地があり、清の道光年間に建てられた仁冲村の客家圍屋は、現在のところ中国でももっとも完璧に保存され、かつ最大規模であり、歴史が最も古い建築の1つとなっている。その内部は下堂を中心とし、中と外が対称な四層に分かれ、大小の天井を有し、四方八方に通じている。全体の建築平面は四角形で、高い壁で外界と隔たり、家屋、広間、母屋、部屋、中庭の配置は入り組んでおり趣がある。北京の故宮の建築の特徴と、江南の建築の趣もあり、回廊、軒、防風板、梁や柱に彫られた龍や描かれた鳳凰は、華麗で堂々としている。防御システムが完備され、展望台の周囲には銃眼がつくられ、合理的で、守るに易

く攻めるに難い。古代客家人の英知をよく表しており、「江南の紫禁城」と呼ばれ、典型的な客家建築芸術の結晶である。客家囲屋は一族が集住し、安全防衛、防風耐震の機能に優れ、冬は暖かく夏は涼しいだけでなく、豊かな文化内容をそなえており、古く独特な客家建築、精緻に彫刻された百獣の図案、古風で素朴かつ雅やかな明清時代の家具、100年の移り変わりを経た農家の仕事場、情熱的で奔放な歌舞、独特の食文化、感動的な歴史物語はいずれも客家の文化的特徴である。蓮塘鎮の客家囲屋生態博物館は、広西における客家文化の変容過程の研究と人文の展示に対して、生きた客家文化に関する百科全書のうち、広西の巻を見る機会となる。

3.7 桂西那坡県達文の黒衣チワン生態博物館

黒衣チワンはチワン族の支系の1つで、自称は「敏」（または布壮）であり、人口総数は5万人以上で、主に広西の西南部那坡県に集居している。黒衣チワンは黒を美とし、黒色の衣服を着用することで支系のシンボルとしている。その服飾は、黒衣チワンの物質文化の重要な構成部分であり、黒衣チワンの社会経済生活、およびその変化を表し、黒衣チワン文化の内容を表象、再現する作用を発揮している。2000年、南寧国際民歌芸術祭において、黒衣チワンの歌声は国内外の人びとの黒衣チワンに対する強い関心を集め、ある一時期、黒衣チワンに関する人類学、民族学、歴史学、芸術学などの学科研究の成果がこれまでになく豊かになった。関連分野の専門家は、黒衣チワンは今日までチワン族の特色をもっとも完全、かつ明確に保持してきたもっとも古い族群の1つであり、チワン族の伝統文化の生きた化石であるとみなしている。那坡県龍合郷共合村達文屯では、黒衣チワンが千年来の生産生活方式を守っている。大石山区の奥地に位置し、情報から比較的隔てられているため、当地の黒衣チワン住民はその古い民族文化を継承・踏襲してきた。たとえば、服飾文化、銀飾文化、山歌文化、行事文化、喪葬文化、高床式建築文化、族内婚制度、男性が農業労働し女性が機織りをするという自然経済文化などであり、黒衣チワン研究の資源庫となっている。また、達文屯に黒衣チワン生態博物館を建設することに対して、当地の村民は、切実な待望と全力の支援を示している——建設が最終段階に入った達文屯黒衣チワン生態博物館は、広西の10カ所の生態博物館のなかでも、地域住民の参与の度合いがもっとも高い場所の1つである。

那坡の黒衣チワン生態博物館と龍勝の龍脊チワン族生態博物館が、2008年12月を前に相次いで基本的な建設を終わらせたことを受けて、すでに落成していた靖西旧州生態博物館、広西の南、北、西に分布する3カ所のチワン族生態博物館を加え、広西におけるチワン族文化保護区域とチワン族文化研究基地が体系的に整った。

3.8 融水ミャオ族自治県の安太ミャオ族生態博物館

ミャオ族の人口は中国で約900万人を数え、主な分布は中国西南地区の貴州、湖南、雲

南、四川、広西などの地域となっている。広西の少数民族は「壮瑶苗侗（チワン・ヤオ・ミャオ・トン）」と並べられる。180万人を数えるミャオ族は、広西でも人口が多く、民族の特色が明確な少数民族の1つである。広西融水県内の「大苗山」はその原生態的自然環境と、濃厚な民族情緒、壮観な棚田の風景で四方に名を馳せており、広西のミャオ族は主にこの地域に集住している。ミャオ族の歴史、文化遺物は極めて重厚で豊富であり、ミャオ族文化、風俗および工芸を表す蘆笙坡会、百鳥衣（襪の多いスカート）、闘馬、「埋岩」（地域の社会秩序を維持する制度）、吊脚楼（高床式建物）、「坐妹」（不落夫家婚）、油茶（具入りの茶）、酸魚（ナレズシ）などの民族文化は煌びやかで美しく多彩である様を表象している。近現代中国の少数民族を題材とした文学芸術、秀逸な映像作品のなかで、ミャオ族を題材とした作品はとりわけ傑出し広く鑑賞されている。元宝山、摩天嶺、貝江は、神秘的で遠く美麗で荘厳な自然風景の代表である。安太ミャオ族生態博物館は、広西で第二の高峰である元宝山のもと、民族情緒と秀麗な自然風景が一体となった下桑、元宝、培秀など3カ所のミャオ族村落を選んでつくられた。それ以来、融水ミャオ族に関連する人類学、民族学、歴史学、芸術学などの学科研究が盛んになっている。安太ミャオ族生態博物館の建設は、ミャオ族の伝統文化の保護と研究に対して、さらに生き生きとした標本としての作用を発揮するだけでなく、ミャオ族の人のびとが自民族文化の発揚に基づいて、さらに自信をもって未来の創造をおこなってゆくよう促している。

3.9 桂南東興市のキン族三島生態博物館

キン族は広西に特有の少数民族で、人口は合わせて2万人近くを数える。東興市北部湾の万尾、巫頭、山心（「キン族三島」と呼ぶ）一帯に分布しており、広西の少数民族のなかでも唯一、漁業を生業とする民族である。キン族は、もとはベトナム塗山一帯に居住していたが、明清時代に続々と広西に移住し、現在までに500年近い歴史がある。キン族は越境民族であり、ベトナムではベト族と呼び、ベトナムの主体民族である。キン族の言語はベトナム語と同じで、風俗もベト族とほとんど変わらない。「唱哈節」はキン族の民間でもっとも盛大な伝統行事である。キン族はまた我が国の少数民族のなかで平均収入が最も高い民族である。彼らは経済発展と同時に、自分たちの民族文化（たとえば行事文化、服飾文化、一弦琴文化、結婚恋愛文化、漁労文化、高床式建築文化）を保存してきた。また、キン族とベトナムは近く、北部湾のベト族もまた頻りに往来をしている。これによりキン族文化は民族文化と国境文化、海洋文化などの特徴を兼ね備えている。しかし、他の地域と同じで、キン族文化もまた現代化とグローバル化の峻厳な挑戦に直面しており、その豊富な特色をもつ文化もまた少しずつ失われている。キン族文化の保護と伝承は目下、切迫した任務であるといえる。そのため、キン族生態博物館の建設は、さらに良い状態でキン族文化を収集、研究、展示し、国内のキン族資料研究セン

ターを設立する。この場を利用して越境民族の文化変容を研究し、中国とベトナムの民族文化研究の合作を推し進め、中国とアセアン各国の文化交流を活発化させる。幅広い発展の見通しがあるばかりでなく、さらに深遠な国際的意義をも備えているといえる。現在、東興キン族三島生態博物館は中国のキン族集住地域にすでに根を下している——東興市北部湾の「キン族三島」(万尾、巫頭、山心の三カ所の村落)において、建設が始まっている。

3.10 桂中金秀ヤオ族自治県のヤオ族生態博物館

金秀ヤオ族自治県は、広西中部のやや東に位置する大瑤山を主体とした山脈にあり、最高海拔は1979m、広西東北、東南の7つの県、および4つの市と接している。中国ではじめてのヤオ族自治県で、人口総数はおよそ15万人、ヤオ、チワン、漢などの民族が集住し、そのうちのヤオ族は人口の40パーセントを占め、全国でもヤオ族の支系が最も多い県である。大瑤山の奥地に集住する茶山ヤオ、盤ヤオ、花藍ヤオ、山子ヤオ、坳ヤオといったヤオ族の5つの支系は、中国のヤオ族共同体の範疇に属するものの、言語、服飾、社会生産、生活習俗などの方面では多くの独自性をもっている。たとえば、古老悠久の歴史文化、豊富で多彩な風俗情緒、煌びやかで色とりどりの服飾、質素で自然な黄泥鼓舞、神秘的ではかり知れない瑶医・瑶薬、スリリングで刺激的な儀礼「度戒」における秘技などが知られている。この県は地理的には、南亜熱帯と中亜熱帯の交わる地点に位置し、県内には海拔が1500m以上の山々が24もあり、連なる山々は起伏し延々と続いている。広東の丹霞山のように赤色の岩壁を特徴とした地形が主で、風景は柔和にして、造形は天が成したものである。広西第五の高峰、聖堂山は空気が新鮮で気候も心地よく、一年の平均気温は17℃で、夏でも平均気温が23℃と観光と避暑に理想的な景勝地である。1930年代からすでに、「人の世の桃源郷・仙人の国」とたたえられていた。

広西は中国においてヤオ族人口がもっとも集中した地域であるため、「ヤオ族の大本营」とも称される。大きな山に隔てられた居住環境はやや閉鎖的であるため、ヤオ族の民族文化はこれまで良好に保たれてきた。また、東南アジアやアメリカのヤオ族とも深い歴史淵源がある。それゆえ、大瑤山は「ヤオ族研究センター」としての良好な条件をそなえている。かつて、中国人民代表大会の副委員長であり、著名な民族学者であった費孝通氏は、1930年代に金秀を訪れ、ヤオ族の社会歴史状況を調査した。多くの金秀ヤオ族研究に関連する専門書を書き残しただけでなく、金秀がヤオ族の文化生態を良好に保存していることから、金秀に対して「世界でヤオ族を研究するなら中国で、中国でヤオ族を研究するなら金秀で」という評価を与えた。金秀ヤオ族博物館は広西でも比較的早期に建設された民族県域博物館の1つである。十数年の間、県内のヤオ族文化生態の保護のために、著しい成果を残すと同時に、国内外の観光客がヤオ族を理解するための重要な場所となっている。我われは、金秀の実情に結び付け、金秀ヤオ族生態博物館の

建設に「三江モデル」を利用し、県城（県政府所在地）のヤオ族博物館を主な拠点としながら、これをヤオ族の資料集成、研究センター、静態的展示センターとして整備する。費孝通氏がかつて調査を行った六巷郷門頭村（花藍ヤオ）、古陳村（坳ヤオ）、金秀鎮六段村（茶山ヤオ）などの地域を生態保護範囲に画定し、それにより、金秀ヤオ族生態博物館の新たな保護区域および体制を形成する。構造上から「世界でヤオ族を研究するなら中国で、中国でヤオ族を研究するなら金秀で」という状況を実現し、半世紀以来のヤオ族社会の歴史、文化の伝承と変化の研究に対して、世界共通のプラットフォームを提供する。

4 評価と問題

伝統的な博物館は、収蔵品の保護と展示を別の場所で行っている。収蔵品は、従来置かれていた環境から完全に隔離されてしまう。伝統的な博物館は、収蔵品の情報を観客に最大限に展示することができないだけでなく、無形文化遺産を収蔵品として取り扱うことができない。少数民族の伝統文化の収蔵・保護と研究・展示における弊害は、とりわけ明確に表れている。「広西民族生態博物館1+10プロジェクト」は、収蔵品を元来の場所で保護・展示するだけでなく、それ以外の場所でも保護・展示し、有形文化遺産の保護・展示に加えて、無形文化遺産の保護、伝承、展示、公演、発展をも手掛けている。民族生態博物館保護区における政治、経済、文化などの発展・変化の全過程も記録しており、立体的で記憶に残る展示により、収蔵品の情報を最大限に示すという課題を克服した。また、収蔵品の「魚は水を離れられない」という点も考慮し、かつて伝統的な博物館が無形文化遺産と有形文化遺産を同等に扱うことができなかった問題も解決することができた。生態博物館の理念は、中国貴州省、雲南省、内モンゴル自治区、広西などの省や自治区がここ10年の間に導き入れた実験と探究、創造活動を通して、中国における経済発達が遅れた地域の伝統、民族文化の保護と伝承に対する実用性を実証するに至った。

「広西民族生態博物館建設1+10プロジェクト」は、中国にすでにある生態博物館の経験と教訓を総括することを画策している。建設が待たれる民族生態博物館の専門化の持続的発展と、文化機構の機能の永久保存、さまざまな面を引き受け利用するプラットフォームの拡張と伸展、予測不可能な非理想的局面の発生、および文化遺産保護の多数のルートと多数の形式の問題に対して冷静な思考と態度で接し、これら問題に先んじて独特で創造性のある防止策と対応策を作り出す。異なる国の状況や文化の違い、先人が実践経験し啓示してきたものを学習研究する態度を重視し、中国民族生態博物館の実践に対して客観的に認識、対応してゆく中で、保護区の住民は参与させられる状況から自覚的に参与する状況へ、さらには自覚的参与から民が主体となって管理をおこなうまでに至

る長期的な過程を経験する。三級（県・区・中央）政府の指導とさまざまな学問の専門家がチームとなり事前介入する方式により、中国生態博物館の実践における「広西」のモデルとその道筋を新たに創り出した（専門家が称するには「中国民族生態博物館の第二世代モデル」である）。それは、国際生態博物館の理念の指導のもと、生態博物館の専門化を強調し、伝統的な博物館が持っていた基本的機能を堅持しつつ、現代の「生態」保護と展示理念の有効的な結合をもって、文化遺産の保護と伝承（教育）が効果的に実行されることを保証している。実践による経験と教訓を理論的に総括して高め、計画を立て、政府が巨視的にコントロールする。ある系列にねらいを置いた規則の制定を基準とし、それを秩序ある、健全で科学性をそなえたものとする。中心となるプロジェクトとそれを取り巻く周辺プロジェクトの目的を集約し、連盟式の安定した関係をつくりあげ、各種の能力と資源を共用し、利益が付随するその他の社会責任をも進んで己の務めとし、全力で所在地の社会と経済の発展を推し進め、深く村民の歓迎と参与を受けとめ、これをさらに実践性と社会性、持続可能性をともなったものとしてゆく。すでに完成したプロジェクトは、文化遺産保護という機能の発揮や、当該地域の社会と経済の発展促進という作用において、今後プロジェクト建設が待たれる地域の政府と住民の切実な期待、国内外の専門家や学者たちの高い関心を受けとめ、多くのメディアがこれを広く報道している——このような効果と影響はいずれも予測可能のもので、国際生態博物館の発展史、および中国博物館発展史において自己創造の新たな1ページを書き加えるだけでなく、中国の民族文化遺産保護、歴史街区・歴史名鎮・名村・工業遺産の保護、およびそれらが社会主義の新農村建設において生み出した独特の作用に対して広く模範となりうるだろう。

中国における生態博物館の実践は、さらに2つの成果をあげている——第一に生態博物館は、都市住民が地域において伸展、活性化した博物館文化を享受する状況を創り出しただけでなく、広大な農村地域に住む人びとが居住区域において博物館文化を享受しえなかった歴史に終止符を打った点において重要である。伝統的な博物館は都市文明の象徴で、中国における100余年の発展の歴史において、その存在は農村文化の発展とはいささかの関係もなかった。この改革は、中国の広大な農村地域の遺産保護と公共文化体制の建設に、画期的な影響と変化をもたらすであろう。第二に、少数民族地区における生態博物館の実践は、民族文化生態の保護を出発点としており、このような保護とは、全体の保護、現地の保護、自己の保護、および発展中の保護が互いに結合した系統的なプロジェクトである。民族生態博物館は、専門家や学者が民族文化を研究するための特別基地になると同時に、その保護モデルにおいては副産物が生じている——レベルの異なる観光客が訪れるようになり、文化観光、生態観光、学術観光、民謡収集観光、大衆観光を集めた民族生態博物館による観光業の発展は、少数民族コミュニティの社会、経済、文化の全面的な発展を促進し、コミュニティの人びとの物質的な生活条件を改善

し、彼らの自民族、自コミュニティ特有の文化に対する自尊心と誇りを高めている。我われが目にしていく局面とは、すでに建設された、あるいはこれから民族生態博物館が建設される民族地区と村落において、当該地域の民族同胞たちがこれまでになく文化の権益について意識を高め、自民族の伝統的、民族的文化に対する系統的な観察、保護、伝承、発展をすまいに自覚的に強化しているという状況である。

中国の民族文化、とりわけ少数民族文化の保護と伝承のもう1つの実践方法——生態博物館建設の実践は、主として、中国の各方面の典型性を備えた農村、すなわち文化の保存が比較的良好でありながらも、経済発展が相対的に立ち遅れている民族村落において行われている。こうした状況は、生態博物館保護区の住民が、保護と伝承に対して受動から能動へ、さらに能動から民が主体的に管理するまでに至る過程を、複雑かつ長期的なものとした。いかにして保護区の住民を受動的な参与から能動的な参与に導き、さらには能動的な参与から民が主体の管理にかえてゆくのか。またその持続的な発展をいかにして保証するのかという問題は、中国の民族生態博物館の実践のもう1つの難点であり、中国における生態博物館事業の成功と失敗の明暗に大に関わってくるだろう。中国式の生態博物館の建設過程において、その持続的な発展に対して政府、専門家、住民の三者が重要な社会の基礎条件を持ちながら、いかに科学的な対応と長期の持続を行ってゆくのか。民族生態博物館の保護区域の発展において、観光業が必然的に新たな文化の衝突を引き起こすとすれば、民族の伝統文化の保護と観光開発の関係をどのように扱ってゆくべきか。また、文化遺産の保護と当該地域住民の現代生活に対する追求をどのように考えてゆくべきか。そして、政府はいかにしてこのようなもう1つの「文化機構」に対する長期的な運営と管理、資金投入、保障などを実施してゆくべきか。これらの問題がある。

これらを使命とすることから、筆者は、宋代の人・蘇洵の「不先審天下之勢，而欲應天下之務，難矣（天下の勢を先んじて調べなければ、天下の務めに応じたいと望んでも難しい）」という言葉は、世界の伝統、民族文化の保護と伝承の使命を背負い、努力する者への指針となると考えている。ある多元文化の世界的な存続は、「因時立政（時によって政を立てる）」という知謀と、進歩向上に努める実践が必要である。

コメント&リプライ

塚田 覃先生、どうもありがとうございます。ただいまのご発表は、広西壮族自治区でおこなわれております生態博物館の取り組みにつきまして、大変具体的で、また現地の最新の映像をも交えてお話いただきました。

いくつか質問をさせていただきます。ご発表を伺っておりまして、生態博物館の建設は大変大きな意義を持っていることがあらためてわかりました。たとえば農村地域には昔は博物館はなかったのですが、生態博物館の建設によって農民が博物館の文化を共有するということが初めて可能になったんだということですね。ご発表の中では、民族の文化の生態を保護するだけではなく研究もおこなうという点、そして広西民族博物館と各地の生態博物館の間に研究のネットワークを構築していく点、さらに副産物として観光資源としても活用していこうとする点、生態博物館に指定された地域の少数民族の人々の社会や文化の発展を促進したり物質的な生活条件を改善していく点、結果的にその民族やその地域の人々の文化に対するアイデンティティーを深めていくという点が指摘されておりました。

このことにつきましては、私も共感することのできる部分は大変多いです。ただ、私の観点からしますと、いくつかの問題点も抱えていると思います。例えば観客の問題があります。どのような形態の博物館でも、展示というものは見せる側と観客との対話、あるいは交流の場なんですね。観客不在の博物館や展示はありえないです。

では、どのような対話が可能なのかということを検討することが大変重要な問題だと思います。そもそも、まず必要なのは、観客に来てもらうということですね。交通の便や、宿泊や食事といった施設の整備が不可欠です。生態博物館がその民族の伝統文化を濃厚にとどめている、比較的交通便利なところにつくられているのは、伝統文化の保存の現状を考えたときには大変よく理解できるんですね。しかし、遠いところゆえに、観客が行くには不便な場合があります。

だいぶ前ですけれども、2000年でしたか、貴州の梭嘎というところに行ったことがあります。ここは長角苗という女性が牛の角のような形の板を髪につけて、その上から付け髪を巻くミャオ族の村があります。大変ユニークな文化、習俗、服飾を持っているのですが、その梭嘎は都市から非常に遠いんですね。食事や宿泊のための施設がその当時はありませんでした。今はおそらく改善されてるかもしれません。

梭嘎を訪ねたときに私が思ったのは、観客との対話ということです。確かに梭嘎には展示ルームがありました。そこで長角苗の人々の民族文化を、パネル写真、あるいは物で紹介しておりました。ほかに現地の女性が民族衣装を着て、歌って踊ってくれたんですね。

では、そのほかに何をを見せてくれるのか。日常の暮らしの中で観客に何をどこまでを見せてくれるのかという問題があります。例えば一般の住民のお宅の中にまで入って、じかに人々と交流することが可能なのか。私は普通話しかできず、当地の言葉はわかりませんのでよく通じなかったんですけども、たとえば北京や上海などの都市から来た人と言語の上でどういう交流ができるのかという問題があります。

それから当然住民の権利がありますね。四六時中家の中に入ってこられたら、やはり困りますね。そうした住民の権利にも配慮する必要がある。しかし、こうした観客との交流は大変重要なポイントであろうと考えています。

そのことも含めて、観客の意見、観客の希望が反映される仕組みがどのように考慮されているのか。例えば各地に特有の民族文化、物づくりの技術がありますね。観客が物作りなどの現地の人びとの文化を参加体験することができることも必要なと思うんですね。

それから観客に来てもらうためには、民博でも大変努力はしているつもりなんですけれども、広報活動をしなければなりません。宣伝をしないと、今はなかなか、いらっしやってくださらないんですね。

貴州の省都貴陽の街を歩いていて、生態博物館の看板はまったく目にしませんでした。そのかわりに、黄果樹という東洋一といわれる有名な滝があるんですが、そういった観光地の写真はたくさんありました。こうした広報手段の問題がありますね。

まず、質問の第1点は、観客への対応の体制について、広西ではどのように取り組みをなされているのか、紹介していただきたいと思います。

2点目でございますが、観光業との結びつきです。この点は、時間の関係上ご発表の中ではあまりおっしゃらなかったと思いますが、生態博物館の大きな副産物として、観光資源としてそれを活用していこう、そしてそのことによって地元の人も潤うという目的があるように私は理解しています。

ところが、私が訪れた貴州の梭嘎では、非常に多くの人々が出稼ぎに行っていて不在でした。そこでは観光業との結びつきはあまり進んでいないように見受けられました。出稼ぎに行って若い人がいないということは、文化の保護の担い手をどのように再生産していくのか、文化をどのように若い世代に伝えていくのかという問題にとっても重要でありますし、観光業を博物館とどのように結びつけていくのかも、大変重要な問題であります。

貴州の貴陽の近くに鎮山というところがありまして、そこの生態博物館にも行ったことがあるのですが、そこは農民レストラン「農家楽」が林立しておりました。そこは大都市近郊の景勝地のようで、生態博物館なのか、普通の観光地なのか、大変区別がしにくいような状況にありました。観光業との結びつき、あるいは文化の伝承ということは、今すぐ結論は出しにくい、長期的に考えるべき問題でございますが、こういった問題点

を広西ではどのようにお考えになっていらっしゃるのでしょうか。これが第2点でございます。

3点目は、時間の関係上短く触れますが、生態博物館の取り組みとして、広西民族博物館をまずつくり、そこが中心となって、各地の生態博物館との間で民族研究のネットワークをつくる、連携するというご指摘がありました。これは大変興味深い計画だと思います。

では具体的にどうするのか。覃溥先生は文物事業管理局で、文化庁の系統ですね。しかし、研究者の中には大学の先生もいますね。それから中国では民族のことを扱う民族宗教事務局の系統の人もいます。そういう人々とどのように具体的に連携して、どう進めていくのか。例えば、今回の民博の特別展「深奥の中国」でも歌掛けとかあやつり人形劇とかを映像を用いて展示しておりますけれども、そうした分野は地元の研究者の協力が必要です。地元の研究者とどのように具体的に連携していくのかということ、先ほどは時間の関係で触れられなかったと思いますが、少し補足していただきたいと思います。

それと政府と専門家と住民の三者が、生態博物館の持続的な発展に対する役割を担っている。地元の人々が受け身じゃなくて、実質的に参加していくことは大変重要なことです。おそらく今日の議論でも、文化の保護をめぐる、政府や知識人、専門家、住民が、それぞれの立場でどのようにかかわっていくのが議論のかぎの1つになると思うんです。そのあたりも具体的にどのようなことをお考えなのか、ご紹介いただきたいと思います。

覃 時間の都合上全部には答えられませんが、簡単に答えたいと思います。

1つ目は、博物館の文化と現地の住民との関係です。私は対外開放された4つの博物館の開幕式に参加いたしました。そこで忘れられない光景を見ました。現地の住民が私たちの博物館に入りましたら、非常に驚いていました。彼らの表情、彼らの目を私は忘れることはできません。いろんな理由があると思うんですが、彼らはこういう博物館があることを全然知らなかったと思います。博物館が何なのかということもまったく知らなかったと思います。ですから、博物館の中に入って、非常に複雑な表情をしておりました。単純な表情もあるでしょう。瑶族の70歳の婦人が、彼女の写真を見たときに、その写真を触ろうとしました。これはいったい何なんだろうって。ですから、博物館と現地の住民との関係は、非常に密接なものがあると思います。

では、子どもはどうでしょう。博物館の中にいろんなものがあるわけですから、初めて見るものがたくさんあったと思います。1つ目の質問に対する答えは、ここまでになります。

2つ目は、政府と専門家と住民の三者の関係で、どのようにお互いに役割を果たすか

という問題ですが、率直に申し上げて、広西の生態博物館に特徴があるとするならば、貴州よりも少しいかなということですね。私たちは少し準備もできましたし。

中国の生態博物館は、80年代の終わりに導入されたものです。貴州の場合は、ノルウェーの基金の関係もあったでしょう。ですから、どのようにこの三者を結びつけるかということ、そして海外の博物館との関係、この結節点を探そうにも、少し時間が足りなかったと思います。私たちは6年間考えて、準備期間を経て、そしてつくってきたわけですね。中国は文化機構だけではだめなんです。貴州は文化面では非常に重要な役割を果たしたと思うのですが、政府の政策が、また現地の住民とのかかわりは、今はよくなったと思うんですが、最初は少しぎくしゃくしていたのではないかなと思います。

私たちはすでに2つの機構を持っています。1つは、塚田先生がおっしゃいましたように、私たちの政府は、文化庁とか文物事業部だけではなく、そのほかに改革発展委員会、国民経済に携わっているところですが、財政の部門、教育の部門、また中国の民族関係の委員会、6つ、7つの政府の機関が、このプロジェクトについていろいろな仕事をしているわけです。それぞれが自分たちの部門に則した方法で、いろいろな仕事をしているわけです。

旅游局（観光局）も、ここ5、6年、対外的なPRはたくさんおこなっています。広西の南丹、三江、靖西の生態博物館は、すべて観光とのリンクもうまくいっています。財政の面では、中国の政府が毎年一定の基金を生態博物館のために出しておりまして、そして文化部門が直接おこなうということですね。それぞれの業務が正常に運営できるように、政府も100%のバックアップをしています。

塚田先生がおっしゃる条件ですが、私たちが生態博物館を探す場合に、いくつかの経験をしています。交通が不便ということで、私たちも問題に直面しています。まず第一に、はっきりとした文化の特徴を持っているところを探さなければなりません。人文的な、自然的な環境に恵まれたところを選ばなければなりません。2つ目には、現地の住民、現地の政府が積極的であるということ。3つ目には、努力することによって交通の面が少しくなり、ほかとの距離が縮まるということ。この3つの条件を満たすところに、これから生態博物館をつくらうと、私たちは考えています。

また、生態博物館の周りに小さな店舗をつくりまして、そこで食事ができるとか、そこで何ができるとかという形も考えています。もともと南丹は交通の不便なところでした。しかし、今、政府が全面的にバックアップしておりますので、生態博物館ができることによって、水の問題、交通の問題が解決されました。60年間水道水がなかったところに水が引かれました。ですから、観光客はそこできれいなお水が飲めるようになりました。逆にこのような博物館ができることによって、その環境がよくなったわけですね。

三江県は皆さんもご存じだと思いますが、その飲料水も、以前に比べて条件がよくなりました。環境もよくなりました。私たちが観光客によりよい条件を提供したいと考

えています。

もう1つ、住民の参与という問題、そしてどのように観光客を導入してくるかという問題ですが、私たちは、現地の住民だけではなく、また専門家だけではなく、観光事業を発展させるという形で、PRをするという形でこの問題を解決したいと考えております。

広西の旅游局も、今、4つの生態博物館を開設しておりますが、そこを重要な観光地点として力を入れておりますので、確かに数も増えております。私たちがどのように観光客に働きかけるかということですが、2つあります。1つは、場所を提供して、そこでお互いに触れ合うということですね。もう1つ、村々に代表的な、文化的な手本となる家庭を見つけまして、そこと生態博物館との関係を密接にしていくということです。例えば観光客がじかに地元の少数民族の住宅に入っていったらいろんな経験をするというものもつくっております。

そのほかにたくさんお答えしなければならないことがあると思うんですが、とりあえずはここまでにします。



広島民族博物館の建物。2008年12月に竣工し、2009年4月に正式に对外开放された。主屋は銅鼓を型どっている。



広島民族博物館の展示、銅鼓の展示室。



広西民族博物館のジオラマ展示。広西の全ての民族のさまざまな情景を再現している。



同上



靖西県の旧州チワン族生態博物館の展示室。



東興市のキン族三島生態博物館の展示。

广西博物馆室外展示的特色和发展

吴伟峰

广西壮族自治区博物馆

广西民族文物苑是广西壮族自治区博物馆室内陈列的延伸和扩展，是广西博物馆的室外展示部分。在24000平方米的土地面积内，展示了广西壮族、瑶族、苗族、毛南族极富特色的民居，侗族的风雨桥和鼓楼，还有寨门、戏台、民族手工作坊，铜鼓群雕和铜马、铜镇塑像等。建筑周围配以石林、水池和奇花异树，民居内辅以生产工具、生活用具和民族工艺品原状陈列，手工作坊可进行制陶、造纸、榨油现场表演。逢年过节，壮族戏台上演民族歌舞，竹林深处有山歌对唱，在苗楼可品尝民族风味小吃。步入广西民族文物苑，壮乡瑶村苗寨，可游可居，民族历史文化，有声有色，有香有味。自1988年广西壮族自治区成立三十周年纪念日开放以来，广西民族文物苑以其新奇的构思，浓郁的民族风情和独创的展示内容，成为中外游客到自治区首府游览的必到之处。在长达十九年的开放过程中，广西民族文物苑以直观的形式向观众和游客介绍了广西各民族的相关情况，获得了观众的认可，塑造、诠释了新的民族文化，对今后的相同性质的景点建设产生了影响。成为广西博物馆陈列展示的最大特色。但随着广西文博事业的繁荣发展、广西民族博物馆的建立，广西博物馆的室外展示部分也应该有新的变化和发展。

1

广西民族文物苑的建设构思始于1980年，在此之前，1978年广西壮族自治区博物馆新馆建成。当时，文化厅文物处负责人与博物馆有关同志针对广西博物馆民族文物的陈列问题，想利用这块空地建“广西民族村”，或称“广西博物馆民族文物露天陈列场”。大家以为广西是个民族地区，各民族在漫长的历史长河中，遗留了许多的民族文化遗产，除著名的铜鼓和岩画外，还有民族建筑、民族生产工具、生活用具、民族工艺品、民族食品及丰富多彩的民族风情等。突出少数民族的独特风格、传统文化。设想“村”（民族村）与“馆”（博物馆）相结合，使观众不必旅游全广西就能在较短时间内对广西部分精华荟萃的民族文物、历史文物、民族风情能浏览无遗，并能品尝民族食品，购买民族工艺品。

广西民族文物苑的展示内容主要包括广西的民族建筑、民族民间技艺、民族风味食品、民族歌舞表演等。广西的民族建筑是民族文物苑的主题，在广西的民族建筑中，比较有风格、有特色、有技巧的有壮、瑶、苗、侗、毛南五个。壮族的建筑形式；根据不同的地理环境，因地制宜，因材施教，创造了以干栏吊楼为主导的建筑体系。苑内的壮族干栏，是广西龙胜各族自治县瓢里乡交州村廖姓住家的原物。建于二十世纪五十年代初期。这种房

屋朴素实用，美观大方，以舒适宽敞为特色，给人以明快开朗的感觉，也适应南方炎热潮湿的气候。壮族干栏高三层，一层圈养牲畜，堆放杂物，农具等。二层为居住层，有卧室火塘、作坊和晒排。三层是阁楼，用来贮存谷物和不常用的生活用具。内部的摆设完全按照壮族的生活习惯，陈布置。源于生活、忠于生活的陈列布置，使游客一见如故。干栏旁是梯田、鱼塘、水碓，一派农家景象。

戏台是广西壮、瑶、苗、侗等民族山村中常见的公共建筑，是表演民间歌舞、戏剧的地方。每逢喜庆节日，各村寨自己组织的剧团走村串寨，给节日增辉添色。民族文物苑内陈列的戏台，是一座带有壮族建筑特色的连体式戏台，实际上是一座矮式干栏，它不但是建筑艺术的陈列，还是表演艺术节目的好地方。

苗族住宅以吊脚木楼最具民族特色。苑内的苗楼根据融水苗族自治县安泰乡苗族民居式样，由当地苗族工匠亲手建造。楼分二层，底层架空无围护，二楼为居住层。每个柱头都雕刻花果，门窗装饰美丽的图案，檐柱上悬挂牛角。敞厅设在火塘间的前部，跨在水塘上，这是整个苗楼最具有特色的部分。当你在敞厅上休息，可观赏水光倒影、游鱼。吊楼前面的小平上，有一根五彩缤纷、顶立金鸡、侧申牛角的芦笙柱，它是苗族的吉祥物。苗族能歌善舞，每逢过苗年和坡节、新禾节，都要举行斗马、斗牛、赛芦笙活动，这根高耸的芦笙杆，就是芦笙赛会上载歌载舞的中心，也是苗族的象征和标志。

瑶族建筑多种多样，有竹楼、木楼、泥墙瓦房、砖木结构瓦房等。苑内按照金秀瑶族自治县十八家村的建筑，仿造了一座竹楼，作为瑶族建筑的代表。竹楼使用木构架，竹墙，竹地板和竹瓦。室内陈列瑶族生产生活用具和风情图片。竹楼建在坡顶，居高临下。坡下可以见到一座干栏式的圆形建筑物，这就是瑶族的一个支系——白裤瑶的高脚谷仓。谷仓建在由四根木柱支承的一块方木板上，四根柱子的上部安装四个倒装的陶罐，防老鼠偷食粮食。这与在广西合浦县汉墓出土的谷仓模型形状很相似。

风雨桥是侗族公共建筑的一大特色。进入侗乡，几乎每个村寨都有风雨桥。风雨桥又称廊桥和花桥，因能遮风避雨而得名。文物苑内的风雨桥，是根据侗族风雨桥的素材进行设计的，全桥均用杉木制成，集交通、休息功能于一身。它是民族文物苑的主体建筑。

侗族鼓楼是同寨的公共建筑，是侗族人民聚集活动的中心，在侗寨中，每个姓氏最少有一座鼓楼，平时商议村寨大事，“月也”、“多耶”、琵琶歌等民间节日活动都在这里举行。苑内的鼓楼是仿照三江侗族自治县马胖鼓楼建造，九层重檐，歇山顶，非常壮观。

民间作坊区主要陈列各种大型生产工具，有从边远山区搬运来的一套大型榨油工具，这套工具已有一百多年的历史，以水为动力运转，推动石滚在碾茶油果。作坊还展示了古老的石头榨糖机，全套土法造纸生产工具，观众在这里可领略到现代社会难得一见的古老生产方式。

民族风味餐厅设在苑内临水的苗族吊楼上，餐厅内可品尝到广西风味独特的小吃，有五色香糯饭、侗族香油茶、凉粽、蕉叶糍等。餐厅内还准备了令人过口难忘的民族风味菜肴。有香嫩的瑶族竹板鸡，酸辣可口的侗族竹串肉，色彩斑斓的苗族五彩银丝拌，形象逼

真的壮族蝴蝶过河、鸳鸯鱼合，京族的一帆风顺、绿荷苞等系列特色菜肴。

多姿多彩的民族歌舞表演更游客如置身于一个多民族的大家庭中。每逢广西各民族的重大节日——国际民歌节在首府南宁举办，文物苑便到处飘荡着优美动听的歌声，壮族的迎客歌、剪彩歌、酒歌、拦路歌、送客歌；汉族的敬茶歌、贺郎歌；侗族的同乐歌、油茶歌；仫佬族的问候歌；毛南族的送礼歌；京族的祝福歌，首首声情并茂，展示了广西各族人民重礼深情的人生礼仪和艺术天赋，也显示了“歌海”的无穷魅力。

民族文物苑也是各族人民的大“家”，在首府工作的少数民族同胞，每逢自己民族的节日，都要到民族文物苑欢聚，如侗族的“过冬”，苗族的“苗年”，瑶族的“盘王节”，仫佬族的“依饭节”，毛南族的“分龙节”等，少数民族自发地以自己的独特方式欢庆自己的节日，视民族文物苑为家，也给文物苑增添了光彩。

民族文物苑把艺术的境界和现实的生活融合为一体，形成了一种把社会生活、自然环境、民族文化与美的追求交织在一起的现实的物质空间，使观众身临其境，从而对广西的民族文化有一个直观的了解。这是民族文物苑的陈列构想。现在看来，民族文物苑所取得的社会效益和经济效益是建苑者当初所意想不到的。以下分别叙述。

民族文物苑以其独创的展示风格对今后的类似民族旅游景区有所启示。民族文物苑的构思筹建始于1982年，开放于1988年，虽然最早的构想为广西博物馆民族民俗展览的室外延伸，但其民族传统建筑+民族风情表演+自然景观的展示方式为国内首创，以后陆续筹建开放的深圳中国民俗文化村，桂林漓江民俗风情园，云南民族村的有关人员都曾到广西民族文物苑参观学习，其中中华民俗文化村还聘请原民族文物苑负责人到民俗文化村主持经营菜式为广西少数民族风味的民族餐厅，这为弘扬民族传统文化，探索民族传统文化与现代建设相结合所体现的新的文化观念，为文化事业的产业化作出了积极的贡献。

民族文物苑塑造了全新的民族文化。民族文物苑的展示内容是传统的，来自民间的文物、生产、生活和文化用具的陈列与创新的民族风情歌舞表演、饮食文化的完美结合。广西是壮族自治区，“三月三”是部分地区壮族的歌节，结合壮族“三月三”歌节，从1993年起，自治区已经连续6年举办了6届广西国际民歌节，与此同时，广西民俗礼仪歌表演也在文物苑举办了5次，国际民歌节之前的“三月三”壮族歌节，以民间传统的民族表演为主，歌手均为民间艺人。从1993年广西国际民歌节开始，由专业人员编导，专业演员演出的广西民俗礼仪歌表演成为广西民族文物苑的招牌项目，铜鼓雕塑群也成为广西国际民族歌节的标志。民族文物苑内的民俗礼仪歌表演是根源于广西各族民间的综合艺术，汇集歌唱、舞蹈、服饰为一体。编导们对节日进行了深入的加工和创造，使传统艺术发扬光大，更具观赏性和艺术性。广大游客在苑内即可饱览广西各族人民热情好客的礼仪，能歌善舞的风姿，加深了国内外游客对广西的了解。可以说，民族文物苑这种独到的展示方式塑造了全新的民族文化。

广西壮族自治区博物馆是一家省（自治区）级综合性地志博物馆，坐落在南宁市民族广场东侧。主体建筑陈列大楼，是一座具有壮族干栏式建筑特点的长方体大型建筑，集陈列展览和业务办公于一体。广西壮族自治区博物馆的前身是1934年在南宁创立的广西省立博物馆。当时已初具规模，有固定的馆舍，文物藏品达2万多件，还有大量的石刻拓片和各种新旧图书资料，并举办过各种展览。抗日战争爆发以后，广西省立博物馆几度搬迁，处于风雨飘摇、举步维艰之中，文物损失严重，馆名也多次更改。直到新中国成立，广西的文博事业才得到复苏。经过多年筹备，1956年5月1日，广西省博物馆大楼竣工，宣告重建工作完成。1958年3月，随着广西壮族自治区成立，广西省博物馆遂改为现名。

1978年新的陈列大楼建成以来，本馆先后举办了《广西历史文物陈列》、《广西革命文物陈列》、《广西民族民俗展览》、《太平天国革命在广西历史陈列》、《古代铜鼓陈列》、《文莱苏丹龙辇陈列》等基本陈列。此外，还经常举办临时性的专题展览。民族文物苑作为民族民俗展览向室外的延伸和扩展，建有铜鼓群雕，有壮、瑶、苗、侗等民族的民居和代表性建筑，辅以生产、生活用品原状陈列和民族风味小吃，节假日还组织传统工艺和民族民间文艺表演。除了在本馆举办陈列展览外，还多次赴国外以及国内的一些城市举办专题展览，或引进国外及国内的展览到本馆展出，以此促进文化交流。古代铜鼓陈列和广西民族民俗展览是广西博物馆目前的基本的陈列展示，广西是古代铜鼓的主要分布地区之一，铜鼓遗存丰富，种类齐全，是世界上收藏铜鼓最多的博物馆，铜鼓藏品达360多面。其中，一面北流型铜鼓面径达165厘米，重299公斤，被誉为“铜鼓之王”。因而铜鼓是广西博物馆的特色，陈列展览很吸引人。广西民族民俗展览包括室内的陈列展览和室外的民居展示、传统工艺表演等。室内的陈列于1987年完成，1998年又做了大的修改。展览以大量的民族文物和图片，反映了居住在广西的壮、瑶、苗、侗、仫佬、毛南、回、京、彝、水、仡佬等11个少数民族的生活习俗。壮族主要介绍了壮锦、三月三歌节、人生礼仪、制陶工艺等方面的内容。瑶族部分有服饰、渔猎、石碑、婚姻、盘王节和达努节等。苗族能歌善舞，尤其跳芦笙舞，妇女擅长蜡染、刺绣、织锦，这些内容都有反映。侗族传统建筑风格独特，工艺精湛；织锦典雅大方；“抢花炮”、“斗牛”等节日风情浓郁；昔日“款制”也可看到。仫佬族有服饰、地炉、煤研石陶器、依饭节等展示。毛南族有“毛南菜牛”、编织花竹帽、石雕、傩面具等。回族介绍了阿訇服装、桂林古清真大寺、古兰经书、洗礼工具等方面的情况。京族着重介绍“唱哈节”、渔业工具和特点鲜明的妇女服饰。水族部分展示了姑娘服装、马尾绣背带、豆浆画、水书、水历和“端节”这一宗教祭祀活动。彝族重点展示黑彝、红彝、白彝服饰和纪念祖先光辉业绩的“跳弓节”活动图片和实物。仡佬族有妇女服饰、“八音”乐器、“拜树节”等内容。

内外结合，动静相辅，是广西博物馆陈列展览的一大特点。民族文物与历史文物有所不同，民族文物和文化有很多是现在进行式，是少数民族正在使用的东西，与之相关的环

境也是感受得到的。民族文化中也包含了一些大型的、室内难以展出的、以及一些传统的技术等。传统的展览，展品相对来说处在一个静态的环境中，观众对展示的内容隔着一层东西，有可望而不可及的感觉。而广西博物馆民族民俗展览在考虑民族文化的特色时，将部分民族文化的实物如建筑、工具、手工艺、艺术等设计在一个自然、开放的空间，即民族文物苑这一室外展示里，使民族文化的内容处在一个相对真实、自然的环境当中，增加了展览的感染力。有声有色，有滋有味，这也是广西民族民俗展览最具特色的一个方面。民族文物苑当初的定位是室内展览的外部延伸。室外有相对广大的空间来容纳民族文化的展示内容，民族文化的展示内容就可以多方面地展示。民族文物苑内设置了民族风味餐厅，博物馆的工作人员根据广西民间少数民族的特色菜肴加以整理研究，创新推出了一批民族风味食品，受到社会各方面的欢迎，在首府南宁市成为民族菜走向市场的先驱，深圳的中国民俗文化村在建成后即邀请物馆的一批工作人员去负责经营民族风味餐厅。文物苑举办的少数民族歌舞表演、造纸、刺绣、酿酒、织锦等表演活动也使得民族文化的展示充满活力。与此同时，民族文化的展示内容就有别于传统的文物展览，不仅仅是过去式的东西，而体现了民族文化不断发展和延续的特点，也构成了民族文化全方位宣传的格局。以人为本，服务社会，是博物馆通过展示来服务社会的有效方法。民族文物苑建成后，即成为广西“三月三”民歌节、广西南宁国际民歌节的表演场所之一，少数民族演员在戏台、鼓楼坪、风雨桥上、梯田边表演了丰富多彩的民俗歌舞，成为民歌节的一个亮点。而广西有十一个少数民族，一些少数民族的节日都选择了以民族文物苑为家，举办庆祝活动。周边的社区街道、机关团体、学校等也时常在文物苑举办各种活动。据统计，文物苑从开放至今，先后接待拍摄了十余部电影、电视剧，产生了良好的社会效益。博物馆利用民族民俗展览的特点开展多种宣传教育活动，如民族文化“一日学”活动，主要组织学校的师生参加，活动包括参观民族民俗展览、参加民族知识竞答和民族风情表演活动中的壮族走板鞋、跳竹杠、多耶等，最后是品尝民族风味食品，学生在生动的感性之旅中学习了民族文化，产生了很好的效果。民族民俗展览在运作时与展示内容相结合，注重民族工艺品的开发项目，如通过壮族织锦表演和展示，与厂家联合设计制作了新的壮锦产品，在博物馆内销售，取得了比较好的效益，民族旅游工艺品的数量和样式增加了，市场更大，厂家由于产量增加，传统工艺也得到保护。博物馆内还开办了“广西传统工艺展示馆”，荟萃了广西传统工艺精品，既可展示，又可销售，丰富了博物馆的展示内容，也可带来好的经济效益，更重要的是，文化产品得到继承和发展，博物馆不但保护了物质文化遗产，而且也保护了非物质文化遗产。民族文物苑的展览还考虑了手工艺人的保护问题，原来建造文物苑木结构建筑的是广西三江侗族自治县的侗族民间工匠，有着精湛的传统工艺，在博物馆的帮助下，他们在首府居留下来，从事木工、维修、工艺表演等工作，近几年，他们所从事的侗族建筑设计制作、侗族建筑模型工艺品开发取得成功，成立了“杨家匠风雨桥有限责任公司”，先后在武汉、南京、南宁、玉林、桂林、三江等地中标兴建了风雨桥、鼓楼、苗楼、壮楼等民族风格的建筑，他们制做的“同心桥”1997年作为自治区人民政府的礼物送给香港特区，

设计制做的风雨桥、鼓楼工艺品模型参加全国民族旅游工艺品大赛的一等奖，现已成为高档的礼品，非常有效地弘扬了民族传统文化。广西博物馆的民族民俗展览特别是民族村的民族传统建筑十民族风情表演十自然景观的展示方式为国内首创，对今后的民族文化展示有很好的启示作用。

3

广西博物馆收藏有反映广西历史上各时代的代表性文物，如具有历史、科学价值的生产工具、日常生活用品、祭祀用具、碑碣、石刻、岩画、铜鼓、字画、照片、文献、典籍等，都有大量的遗存。在广西民族博物馆建立后，广西博物馆的拟设立“瓯骆遗粹”、“天国朝晖”、“南疆烽火”三个基本陈列。西瓯、骆越是战国至秦汉时期活动在今广西地区的两大百越支族。西瓯、骆越因其所处的自然环境和特定的生产方式，创造了独具特色的物质文化和精神文化。新中国成立以来，瓯骆故地多有考古发现，出土了数以万计的文物。“瓯骆遗粹”集中了近二百件瓯骆故地的文物精品，通过珍贵的文物，展示广西古代劳动人民的勤劳勇敢与聪明才智，为解读瓯骆民族的政治、经济和文化生活提供了最直接的实物资料。广西是太平天国运动的发源地，太平天国的领导人在广西经过六年的宣传、组织和发动群众的艰苦复杂斗争后，在桂平市金田村发动武装起义，然后挥师北上，起义烽火燃及18省，“天国朝晖”反映了当时广西的革命斗争的全貌，再现太平天国运动在广西的辉煌业绩。讴歌广西各族人民的革命精神，以此激励广西各族人民在建设有中国特色社会主义和建设小康社会中开拓进取，奋勇前进。广西各族人民富有爱国主义和革命斗争的精神，“烽火南疆”的主题就是宣扬广西各族人民在近现代革命斗争史中，在反帝反封建斗争中所表现的不屈不挠、前仆后继的斗争精神和英雄业绩。展览的目的是使该陈列成为我区爱国主义、革命传统教育的重要阵地，使广大青少年了解革命历史，增长革命斗争知识，学习革命斗争精神，培育新的时代精神；并且与我区丰富的红色旅游资源相结合，成为我区红色之旅的一大亮点。今后的广西博物馆展示的形式设计思想要继承过去的优良传统，继续考虑博物馆与文物苑的内外结合、动静相辅，有声有色、有滋有味，以人为本，服务社会，保护为主，科技领先的思路。重视广西的历史渊源和地方特色，给观众产生深刻而又独特的印象。

作为广西博物馆的室外展示内容，民族文物苑近30年来，一直承担着博物馆民族民俗文物展览、陈列的延伸和扩展。是一座集知识性、娱乐性和趣味性为一体的，具有广西地方性的独具特色的民族文物露天陈列馆，极具地方和民族特色。但今非昔比，现在的情况已经有所不同。

广西文化大省战略部署与文化产业发展的途径。发展文化产业，是建设广西文化大省的一个关键环节，是新的经济增长点，是一个具有带动意义、全局意义的重要突破口。如何更广泛、更开放地进行文化的传播与交流，如何将古老历史的与现代文明更好地交融，

如何开发文物资源，发展博物馆文化产业，是我们应该考虑的问题。

“中国—东盟博览会”永久性会址落户南宁，在给南宁带来巨大的人流、物流、信息流、资金流的同时也带动了旅游业的发展，促进了经济的飞跃。南宁在大旅游、泛北部湾经济发展格局下，区域性国际城市地位凸显。一个城市博物馆与人们对文物古文化资源的开发利用，是衡量一个地区文明程度的基本尺度，是时代赋予我们的使命，也是与时俱进的体现。文物苑亟待升级提高自身品质，打破原有的封闭的、单一的、静止的空间和格局，为城市提供更多的文化开放和交流；重构符合新城市形象的文化空间。

文物苑的设计不仅是一个项目的改建，它更是一个城市通过文化落点的开发改造，促进城市文化结构调整、完善城市功能结构、增强城市活力、提高城市文化品位、树立城市形象、全面复兴城市历史文化及城市功能等一系列城市发展宏观战略问题的综合研究性规划。

广西文物资源丰富，建设一个充分体现广西文物文化资源的文物苑，具有资源开发的战略意义，成为城市文化旅游发展的推动力。同时，文物苑将形成南宁城市文化一个强有力的文化核心，影响带动城市文化的传播发展，促进古城路、民族大道等周边地域经济文化资源的开发利用。更直接的原因是荟萃广西民族文化精华的广西民族博物馆将在今年建成，那里也将有类似的室外展示内容。我们今后所要做的，就是创造性地继续发挥广西文物苑的历史使命，把广西的历史文化贯穿在广西博物馆的室内和室外的陈列展示当中，建造一个更具历史深度的文化大舞台，一个更具广西地方文化色彩的现代与传统相结合的新天地。

拟改建后的民族文物苑，将保留其“文物苑”的概念，延续“苑”作为“文化荟萃”的理念。深度挖掘、再现广西各时期建筑、文化的辉煌节点：以汉陶屋为基础的汉文化建筑、以桂北地区村落为特色的民居建筑，以岭南韵味古老建筑为主的骑楼建筑。仍将是广西博物馆历史陈列的延伸和扩展，它不但是广西地方建筑艺术的陈列，更是广西宝贵的文化遗产。比以前的民族文物苑更具开创性、开放性、文化性，成为可持续发展的文博产业及品牌。

在设计理念上，文物苑以文物与旅游为主题，将产业溶入文物、文化的理念。结合博物馆的历史文物展示，文物苑苑与博物馆陈列的文物相依托，形成互补互动，动静结合的新格局，成为历史文物展示延伸的新理念。将形成新的文化品牌。文物苑作为广西第一个传承地方特色建筑文化文脉表达的景观，通过这个具有具有感染力的历史文化展示，让人们产生强烈的文化认知，从而营造出有影响力的城市文化品牌。文物苑将有地域性的文化特色。从体现汉代建筑人文、广西村落建筑文化，到海上丝绸之路的骑楼文化、以突出广西本土文化特色为核心。开放性是文物苑的突出特点。文物的经济价值在于能够提升城市文化品位、优化环境、吸引投资、招徕旅游。文物苑将打造成为适合新的时尚潮流，国际性文化旅游消费习惯的文化休闲性场所。文物苑的核心内容保留了“广西文物苑”的名称，是为了延续文物苑的历史使命，即其作为博物馆历史文化的延伸、补充、扩展，它曾经是，

未来还将是博物馆历史文化的室外展场。文物苑将融合广西地域文化特点，汲取广西不同时期的建筑特征，以汉仪寻幽、秀村竹影、古楼风清为核心内容，展现广西历史发展的轨迹。体现了广西历史文化的融合、开放、团结、发展的核心精髓。创意设计理念是以地方文化为主线。文物苑不同于一般意义上的苑区，它是一个集广西地方文化、建筑、雕塑等精华，结合现代时尚元素的综合性苑区；强调与博物馆文物、历史、文化的动静结合、古代文化与现代文化的融合。如具有地方特色的手工作坊、村落、街市等等；注意博物馆藏品开发与利用。如举办各种类型的文物展览，复制或仿制各类型的铜鼓、铜凤灯、铜面具或陶制品等古代工艺品，打造富有广西特色的旅游纪念品，既丰富人们的精神生活，又能增强人们的文物保护意识。总体布局根据不同的内容与功能，苑区内的地理状况及周边环境和谐，功能区分汉仪寻幽—采用汉代陶屋的建筑风格，提炼汉代岭南建筑、人文、雕塑等符号，作为连接博物馆，延展汉文化的城市停留点；秀村竹影—以明清时期，广西汉族有代表性的秀水村等状元村落为主体，突出村落文化与建筑特点；古楼风清—将源于海上丝绸之路所带来的文化艺术交流，到现在泛北部湾经济的交流与繁荣，通过古骑楼街这样一个开放的文化休闲空间进行诠释等三个大主题区域。从博物馆到汉仪寻幽、秀村竹影、古楼风清，从海上丝绸之路到泛北部湾，连接起古代与近现代文明。文物苑是一个开放性的街区，苑内由一条弯处曲折的环形主街道贯穿其中，具亚热带风情的植物景观，水榭楼台错落有致，庭院、戏台、阁楼，雕塑穿插点缀，青瓦错落有致，青石板路蜿蜒前行，让人恍若时空倒流。它不仅是人们怀旧寻梦的好去处，更具有深厚历史根基上营造出的文化休闲气氛，走进文物苑，仿佛与历史面对面；文物苑带着鲜明的地方文化节特征，富有特色的广西元宵灯会、小吃节、端午节、中秋节等等，加上配合博物馆进行的各种文物展示，真正体验地方文化的魅力。

我们预计，随着文物苑文化主体概念的创新、文化与旅游的有机结合，博物馆馆藏品资源的有效利用，将给广西文化产业的发展带来更大的经济推动，对旅游业也是很大的促进。文物苑作为广西丰富的历史文化资源转化为产业发展的巨大展示空间和平台，围绕地方文化开发相关的文化产业链，由此带来的直接和连锁经济效益十分可观。文物苑开发的重点是文化市场和旅游市场。其中文化市场结合博物馆的开发利用，有着明显的优势。文物苑将成为广西惟一的集文化、休闲、娱乐、品味等多功能的经济实体和综合场所。

広西博物館の室外展示の特色と発展

呉偉峰

訳：長沼さやか

広西民族文物苑は、広西チワン（壮）族自治区博物館の室内陳列展示の延長と拡張であり、広西博物館の室外展示部分である。24000㎡の敷地面積内に、広西のチワン族、ヤオ（瑶）族、ミャオ（苗）族、マオナン（毛南）族の極めて特色豊かな民家や、トン（侗）族の風雨橋、鼓楼、さらに寨門、舞台、民族の手づくり工房、銅鼓の彫刻群像、銅馬、銅鎮塑像などを展示している。周囲には石林や池、珍しい花や樹木を植え、民家の内部には生産工具や生活用具、民族工芸品を原状のまま陳列し、手づくり工房では陶器づくりや紙づくり、油しぼりの現場を示している。毎年、年中行事のたびに、舞台上でチワン族が民族歌舞を演じ、竹林の奥では「山歌」の掛け合いが行われ、ミャオ族の家・苗楼では民族の特色ある軽食を味わえる。広西民族文物苑に足を踏み入れると、チワン族、ヤオ族、ミャオ族の民家や建造物を遊覧することができるし、民族の歴史文化は生き生きと生きている味がある。

1988年、広西チワン族自治区の30周年記念日に公開されて以来、広西民族文物苑はその斬新な構想、色濃い民族風情と独創的な展示内容で、観光客が中国内外から区都に旅行に来た際には、かならず訪れる場所となった。19年にわたる公開の過程において、広西民族文物苑は観客に直接目にする形で広西の各民族の関連状況を紹介してきた。観客のお墨付きを得て、新たな民族文化の設計と解釈をおこない、共通した性質をもつ観光地の今後の建設に対して影響力を及ぼしてきた。それは、広西博物館の陳列展示の最大の特徴となっている。しかし、広西文博事業の繁栄と発展と広西民族博物館の建設にとともに、広西博物館の室外展示部分にも新たな変化と発展が生じている。

1

広西民族文物苑の設立の構想は1980年に始まった。これに先立ち1978年に広西チワン族自治区博物館の新館が建設された。当時、文化庁文物処の責任者と博物館関係者らは、広西博物館の民族文物の陳列の問題に焦点をあて、空いた敷地を利用して「広西民族村」、または「広西博物館民族文物露天陳列場」と称すべきものをつくろうと考えた。周知のように、広西は民族地域であり、各民族は長い歴史のなかで多くの民族文化遺産を残してきた。たとえば、有名な銅鼓や岩画のほかにも、民族建築、民族の生産工具、生活用具、民族工芸品、民族食品、豊富で多彩な民族風情などがある。少数民族の独特の気品

と伝統文化が傑出しているのである。「村」(民族村)と「館」(博物館)を結合させるという着想は、観客に、広西全体を観光せずとも、短時間内で広西の精髓が集まった民族文物や歴史文物、民族風情を余すところなく見学し、民族食品を味わい、民族工芸品を購入することを可能にした。

広西民族文物苑の展示内容は主に、広西の民族建築、民族民間技芸、民族食品、民族歌舞の上演などである。広西の民族建築は民族文物苑の主要テーマで、なかでも品格があり特色や技巧のあるチワン族、ヤオ族、ミャオ族、トン族、マオナン族の5つの民族建築がある。チワン族の建築様式は、異なった地理環境、土地の状況、資材の特性を利用しているため、高床式住居(「干欄吊樓」)が主となっている。苑内のチワン族の高床式住居は、広西龍勝各族自治県瓢里郷交州村の廖姓住宅のもので、1950年代初期に建てられたものである。このような家屋は素朴で実用的、美しく上品、快適でゆったりしている点が特色で、見る者に明るく広々とした印象を与え、南方の高温多湿な気候に適している。チワン族の高床式住居は3階建てで、1階は家畜を飼育し、小間物や農具などをおいている。2階は居住空間で、寝室やイロリ、仕事場やバルコニーがある。3階は屋根裏部屋となっており、穀物や普段使わない生活用具を収納している。内部の調度品はすべてチワン族の生活習慣に応じて配置されている。生活に端を発し、生活にもとづき、生活に忠実な陳列・配置をすることで、観光客は住居の本来の姿を見ることができ、高床式住居のまわりには柵田や養魚用の池、碾礮(水碓)があり、農家らしい情景となっている。

舞台は広西のチワン、ヤオ、ミャオ、トン族などの民族の山村によくみられる公共建築物で、民間の歌舞、芝居を上演する場所である。年中行事や祝いごとの際にはいつも、各村で自ら組織した劇団が村々を回り、行事に彩りを添える。民族文物苑内でも舞台を展示している。これは、チワン族の建築の特色をもつ連体式の舞台であるが、実際には1つの低い高床となっており、建築芸術の展示であるだけでなく、文芸演目を演じる格好の場となっている。

ミャオ族住宅は、懸造り式の「吊脚樓」に民族の特色がある。苑内の苗樓は、融水ミャオ族自治県安泰郷ミャオ族民家の様式にもとづき、現地のミャオ族の工匠が手ずから建築したものである。2層に分かれている。下の層は囲いがなく、2階は居住空間となっている。柱にはそれぞれ上部に花や果物の彫刻を施し、扉や窓にも美しい模様を装飾し、軒の柱の上には牛の角を掛けている。開放的な広間はイロリの部屋の前部につくられ、池の上に跨っている。これらはすべての苗樓の最も特色ある部分である。広間で休息をすれば、水に建物の姿が映り魚が泳ぐ様を楽しむことができる。吊脚樓の前の狭い平地には、色とりどりで美しく、頂上に金鶏が立ち、牛角の彫刻が施された蘆笙柱がある。これはミャオ族の縁起物である。ミャオ族は歌や舞いをよくするが、毎年、ミャオ族の正月「苗年」と「坡節」、「新禾節」には、闘馬、闘牛、蘆笙の競演会などの活動を

行っている。高くそびえる蘆笙杆は、蘆笙競演会で歌ったり踊ったりするときの中心となるだけでなく、ミャオ族の象徴と標識になっている。

ヤオ族の建築は多種多様で、竹楼、木楼、泥で壁をつくった瓦ぶきの家屋、レンガと木で組んだ瓦ぶきの家屋などがある。苑内では、金秀ヤオ族自治県十八家村の建築を参考に一棟の竹楼を模造し、ヤオ族建築を代表するものとしている。竹楼は木の組桁、竹の壁、竹の床板、竹の瓦を使っている。室内ではヤオ族の生産生活用具と風情ある写真を展示している。竹楼は小高くなっているところの頂に建てられ、高所から下を臨める。坂の下には高床式の円形建築物があるが、これはヤオ族の支系「白褲ヤオ」の高床式穀倉である。穀倉は四本の支柱で支えられた1枚の方形の板のうえに造られ、4本の柱の上部には4つのさかさまの陶器の甕が据え付けられ、ネズミが糧食を盗み食いするのを防いでいる。これは、広西合浦県漢墓から出土した穀倉模型の形状とたいへんよく似ている。

風雨橋はトン族の公共建築物の一大特色である。トン族の村では、ほとんどの場合、各村に風雨橋がある。風雨橋は「廊橋」、または「花橋」ともいうが、雨風を避けられることからこの名がついた。文物苑内の風雨橋は、トン族の風雨橋の素材に基づいて設計されたもので、すべてにスギ（広葉杉）材を使っており、交通や休息の場としての機能を一身に集めている。これは、民族文物苑の主たる建築物となっている。

トン族の鼓楼もやはり村の公共建築物で、トン族の人びとが集まり活動する中心となっている。トン族の村では、各姓が少なくとも1つの鼓楼を持っており、平時は村の大事を相談する場となるが、「月也」や「多耶」、琵琶歌などの民間行事活動もまたここでおこなわれる。苑内の鼓楼は三江トン族自治県馬胖鼓楼を参考に建てられ、9層の軒を重ね、入母屋造りの上部をもつものである。

民間の手づくり工房では、主に各種の大型生産工具を陳列している。辺境の山岳部から運んできた大型の搾油機は、100年以上の歴史がある。水力を動力とし、動く石輪が回転し茶の実を挽いて油をしぼる。このほか、古い石製の搾糖機や、民間技術を用いた製紙工具を展示しており、ここで観客は、現代社会では見ることが難しい古い生産方法を知ることができる。

民族の特色をそなえたレストランは、苑内では水際につくられたミャオ族の吊脚楼の上に設置されている。レストラン内では広西の独特の軽食、五色のオコワ、トン族の「油茶」、「涼粽」（チマキ）、「蕉葉糍」（芭蕉の葉で包んだモチ）などを味わうことができる。レストラン内には一口食べれば忘れることができないような特色ある民族料理が用意されている。香り高く柔らかいヤオ族の「竹板鶏」、酸味と辛さがおいしいトン族の「竹串肉」、色とりどりで鮮やかなミャオ族の「五彩銀絲拌」、まるで本物のようなチワン族の「蝴蝶過河」、「鴛鴦魚合」、キン（京）族の「一帆風順」、「緑荷苞」など特色ある料理がある。

また、多種多様な民族歌舞の上演は、観客にまるで多民族の大家族のなかにいるような気分にさせる。毎年、広西の民族の重大な行事「国際民歌節」は区都の南寧でおこなわれるが、このときに文物苑のあちこちに美しく耳に心地よい歌声が聞こえてくる。チワン族の「迎客歌」、「剪彩歌」、「酒歌」、「攔路歌」、「送客歌」や、漢族の「敬茶歌」、「賀郎歌」、トン族の「同樂歌」、「油茶歌」、ムーラオ（仡佬）族の「問候歌」、マオナン族の「送禮歌」、キン族の「祝福歌」など、歌声はみな情緒があり素晴らしく、広西の各民族の礼を重んじ情に厚い人生儀礼と、天賦の芸術的才能を表現しており、「歌の海」としての限らない魅力をも現している。

また、民族文物苑は、各民族のんびとの大きな「家」でもある。区都で働く少数民族同胞は、毎年自分たちの民族の年中行事の日に民族文物苑に集まってくる。たとえば、トン族の「過冬」や、ミャオ族の「苗年」（新年）、ヤオ族の「盤王節」、ムーラオ族の「依飯節」、マオナン族の「分龍節」などである。少数民族は自発的に、独自の方法で自分たちの年中行事を祝っている。民族文物苑を家と見なし、文物苑に彩りを添えている。

民族文物苑は芸術と現実的な生活を一体としたもので、社会生活、自然環境、民族文化と美の追求が織り成す現実的な物質空間を形成しており、観客にその場に身をおかせることで、広西の民族文化に対する直感的な理解をもたらす、というのが民族文物苑の展示構想であった。現在見るところ、民族文物苑が得ている社会的、経済的な効果と利益は、文物苑の創立者が当初は考え付かなかった。以下に分けて記述する。

民族文物苑は、その独創的な展示スタイルで、これからの類似した民族観光地に対して啓示すべき点を有している。民族文物苑の構想は1982年に計画、建設に着手し、1988年に公開した。広西博物館の民族民俗に関する展覧の室外延長部分として、最も早くに着想しただけでなく、国内でもはじめての民族伝統建築、民族情緒あるパフォーマンス、自然景観をあわせた展示様式であった。その後、続々と建設、公開された深圳の中華民俗文化村、桂林の灕江民俗風情園、雲南民族村の関係者が、かつて広西民族文物苑を訪れ参観した。そのなかの中華民俗文化村は、民族文物苑の元責任者を招き、料理のスタイルを受け継ぎ、広西の少数民族の特色を有した民族レストランをつくった。これは、民族伝統文化を広く発展させ、民族伝統文化と現代建築を互いに結合させることへの模索を体現した新しい文化観念となり、文化事業の産業化が積極的な貢献を生み出すことにもつながった。

民族文物苑はまったく新しい民族文化を描出した。民族文物苑の展示内容は伝統的で、民間に由来する文物、生産・生活・文化に関わる用品の陳列と、斬新で特色ある民族歌舞の上演、飲食文化が完璧に結合している。広西はチワン族の自治区で、「三月三」は一部の地域でチワン族の歌節（歌祭り）となっている。チワン族の「三月三」歌節と結び付け、自治区は1993年からの6年間、毎年、「広西国際民歌節」を開催してきた。これと同時に、広西民俗儀礼歌の公演も文物苑において5回開催している。国際民歌節の前に

おこなわれていた「三月三」チワン族歌節は、民間の伝統的民族パフォーマンスが主で、歌手はみな民間の芸人であった。1993年に広西国際民歌節が始まるや、専門家が演出し、専門の演技者が上演する広西民俗儀礼歌の公演は、広西民族文物苑の看板プロジェクトとなった。銅鼓彫塑群もまた、広西国際民歌節のシンボルとなった。民族文物苑内の民俗儀礼歌の公演は、広西の各民族の民間における総合芸術に根源があり、歌唱、舞踏、服飾を集め一体化している。演出家たちは、行事に念入りに手を入れ作り上げることで、伝統芸術を発揚させ、さらなる鑑賞性と芸術性を備えたものとした。多くの観光客は、苑内で広西の各民族の人びとの情熱的でサービスに優れた儀礼や、歌い踊る姿を十分に見ることができ、これにより国内外からの観光客の広西に対する理解が深まった。民族文物苑のこのような独特の展示方法はまったく新しい民族文化を描出してきたといえるだろう。

2

広西チワン族自治区博物館は、省（自治区）級の総合的な地誌博物館で、南寧市民族広場の東側に造られている。メインの建築物「陳列大樓」は、チワン族の高床式建築の特徴をもつ直方体の大型建築で、展示と展示事務とが一体となっている。広西チワン族自治区博物館の前身は、1934年に南寧に創立された広西省立博物館である。当時すでに規模が大きく、固定の建物を持ち、文物の所蔵は2万件以上に達していただけでなく、大量の石刻拓本図片と、各種の新旧図書資料を有し、さまざまな展覧をおこなってきた。抗日戦争が勃発して以降、広西省立博物館は移転を繰り返し、非常に不安定な情勢にあり、足を踏み出すのも困難であった。文物の損失もひどく、館名も何度も改められた。中華人民共和国が成立してから、広西の文博事業はようやく回復した。長年の計画・準備を経て、1956年5月1日、広西省博物館のメインビルが竣工し、再建事業の完成が宣言された。1958年3月、広西チワン族自治区の成立にともなって、広西省博物館から現在の名に改められた。

1978年に新たな展示棟が建設されて以来、当館では相次いで『広西歴史文物の陳列』、『広西革命文物の陳列』、『広西民族民俗展覧』、『広西の歴史における太平天国革命に関する陳列』、『古代銅鼓の展示』、『ブルネイ・スルタンの龍輦の展示』などの展覧を開催してきた。このほか、つねに短期で特別展を開催している。民族文物苑は、民族民俗の展覧を室外に伸張したものとして、銅鼓の彫刻群像をつくり、チワン、ヤオ、ミャオ、トンなどの民族の民家と代表的な建築物をそなえ、生産、生活用品の原状展示と民族の特色ある軽食を用意し、行事や休日には伝統工芸と民族の民間文芸の公演を行っている。当館にておこなう展覧のほかには、何度か国内外の都市に赴き特別展を開催したり、国

内外の展覧を当館でおこなったりして、文化交流を促進している。

古代銅鼓の展示と広西民族民俗展覧は、広西博物館の現在の主要な展示である（訳注）。広西は古代銅鼓が分布する主要な地域の1つで、豊富な銅鼓が残存し種類もすべてそろっている。当館は世界でも銅鼓を最も多く収蔵する博物館であり、その数は360面に達する。そのなかの北流型銅鼓の1つは、鼓面の直径が165cm、重さが299kgあり、「銅鼓の王」と讃えられている。それゆえ、銅鼓は広西博物館の特色であり、その展示が人びとを魅了している。

広西民族民俗展覧は、室内の陳列展示と室外の民家展示、伝統工芸の公演が含まれている。室内の陳列展示は1987年に完成し、1998年に大幅な改装を行った。展示は数々の民族文物や写真で、広西に居住するチワン族、ヤオ族、ミャオ族、トン族、ムーラオ族、マオナン族、回族、キン族、イ（彝）族、スイ（水）族、コーラオ（仡佬）族などの11の少数民族の生活習俗を紹介している。チワン族は主に、壮錦、三月三歌節、人礼儀礼、製陶工芸などの内容を展示している。ヤオ族は、服飾、漁撈と狩猟、「石牌」、婚姻、「盤王節」と「達努節」などである。ミャオ族は歌や舞をよくし、とりわけ蘆笙舞を好むほか、女性はろうけつ染めや刺繍、錦織を得意とするため、これらの内容をすべて展示している。トン族は伝統建築の風格が独特であり、工芸に熟達している。錦織は雅やかで洗練されている。「搶花炮」や「闘牛」などの行事には風情があり、昔の「款制」も観覧することができる。ムーラオ族は服飾、いろり、煤矸石（石炭採掘で出るくず石）の陶器、「依飯節」などの展示をしている。マオナン族は「毛南菜牛」、花編み竹帽、石刻、「儺劇」の面具などである。回族に関しては、聖職者アホンの衣装や、桂林の古く壮大なイスラム寺院、コーラン、洗礼の道具などの状況を紹介している。キン族は「唱哈節」、漁業用具、特徴的な女性の服装などに重点を置いている。水族の部分では、少女の服装、馬尾の刺繍付きの背負い帯、「豆漿画」、「水書」、「水暦」、および「端節」という宗教祭祀活動を展示している。イ族は、黒イ、紅イ、白イの服飾と祖先の輝かしい業績を記念する「跳弓節」の活動を写真や実物で重点的に展示している。コーラオ族は女性の服装や楽器「八音」、「拜樹節」などの内容である。

室内外が結合し、動静が互いに補いあっている点が、広西博物館の展覧の一大特色である。民族文物と文化の多くは現在進行形、すなわち少数民族がいままさに用いているものであり、関連する環境をも体感し得るものである点が、歴史文物との違いである。民族文化のなかには、大型で室内では展示しにくいものや、伝統の技術などもある。比較してみると従来の博物館の展覧は、展示品が静態的環境に置かれ、観客は展示から隔てられ、そこに入り込むことはできないという感覚があった。広西博物館の民族民俗展覧は、民族文化の特色を考えたうえで、一部の民族文化の建築、工具、手工芸、芸術などの実物を自然、開放的空間に配置することにした。つまり、民族文物苑の室外展示に

において、民族文化の内容を真実や自然に近い環境のなかに置き、展示の感化力を高めた。生き生きとして、味わいがあるというのが広西民族民俗展覧のもっとも大きな特徴なのである。

民族文物苑の当初の位置づけは、室内展示の外部延長部分であった。室外は比較的広い空間で民族文化を展示でき、内容も多方面にわたることが可能である。民族文物苑内には、民族レストランが設置され、博物館の職員は広西の少数民族の特色をそなえた民間料理にもとづいて整理、研究をおこない、風味ある民族食品を創作し世に送り出してきた。社会の各方面の評判もよく、区都・南寧市において市場向けの民族料理の先駆となった。深圳の中国民俗文化村は、建設後に当館の職員数名を招き、民族レストランの経営を請け負わせた。文物苑が行っている少数民族の歌舞上演や造紙、刺繍、造酒、錦織などの上演活動もまた、民族文化の展示にあふれる活力を与えている。これと同時に、民族文化の展示内容は従来の文物展覧とは異なり、ただ過去のものとしてではなく、民族文化の不断の発展と継続という特色を体現し、また民族文化を全面的に宣伝する仕組みともなっている。

人を基本とし、社会に奉仕するというのは、博物館が展示を通して行う有効的な社会還元の方法である。民族文物苑は建設後、広西の「三月三」民歌節、広西南寧国際民歌節の舞台の1つとなった。少数民族の演技者が、舞台や鼓楼坪（鼓楼の前の広場）、風雨橋の上、棚田の周囲で、豊かで多彩な民俗歌舞を上演するというのが、民歌節の1つのハイライトとなっている。広西には11の少数民族が存在するが、そのうちのいくつかの少数民族は、その民族の行事にさいして民族文物苑を家とし、祝賀活動を行っている。周辺の町の人々、役所の団体、学校などもよく文物苑で各種の活動を行っている。統計によれば、文物苑は公開から現在まで十数回にわたり、映画やテレビドラマの撮影に使われ、良質な社会利益を生み出している。また、博物館は民族民俗展覧の特徴を利用して、多くの宣伝教育活動を展開している。たとえば、民族文化「一日体験」活動などがある。主に学校の教師や生徒に、民族民俗展覧の参観、民族知識の追究、民族公演活動のなかでチワン族の「走板鞋」、「跳竹槓」、「多耶」などに参加し、最後に民族食品を味わうといった活動から、学生たちが生き生きとした感性の旅路で民族文化を学ぶという、素晴らしい効果を生み出している。

また、民族民俗展覧は運営の時間と展示内容を結びつけ、民族工芸品を開発するという項目を重視している。たとえば、チワン族の錦織の実演と展示を通して、製造業者が連合で新たな壮錦製品をデザイン・製造したものを博物館内で販売し、比較的良い効果と利益を上げている。民族観光工芸品の数や様式が増え、市場が拡大したことで、製造業者の側は生産量が増加し、伝統工芸もまた保護の機会を得ることとなった。博物館内ではさらに「広西伝統工芸展示館」を公開しており、広西伝統工芸のすばらしい品々を一所に集め、展示するだけでなく販売もしている。博物館の展示内容を豊かにするのみ

ならず、良い経済効果をもたらしている。

さらに重要なのは、文化産品の継承と発展が得られたことである。博物館は有形文化遺産を保護するだけでなく、無形文化遺産をも保護している。民族文物苑の展覧はさらに手工芸職人の保護の問題を考慮している。もともと、文物苑の木造建築を建造したのは広西三江トン族自治県のトン族の民間の工匠であった。彼らは熟達した伝統工芸技術を有し、博物館の支援のもとで区都・南寧にとどまり、木工、修理、工芸の実演などをおこなってきた。ここ数年では、彼らが従事するトン族建築の設計制作、トン族建築の模型工芸品の開発が成功をおさめ、「楊家匠風雨橋有限責任公司」という会社を設立した。その前後には、武漢、南京、南寧、玉林、桂林、三江などで、風雨橋、鼓楼、苗楼、壮楼など民族建築の新築事業を落札した。彼らが制作した「同心橋」は、1997年に自治区人民政府から香港に贈られた。設計・制作した風雨橋、鼓楼などの工芸品模型は、全国民族観光工芸品コンクールで一等賞を受賞し、現在では高級な贈答品となっており、民族伝統文化の高揚に非常に効果的である。広西博物館の民族民俗展覧はとくに、民族村の民族伝統建築、民族情緒あるパフォーマンス、自然景観の展示方式を国内でもはじめて合わせたもので、今後の民族文化展示にも良い啓示を与えている。

3

広西博物館は、広西の歴史の各時代の象徴的な文物を収蔵している。たとえば、歴史的、科学的価値のある生産工具や、日用品、祭祀用品、石碑、石刻、岩画、銅鼓、書画、写真、文献、書籍などが大量に残存している。広西民族博物館を建設した後、広西博物館が新設する予定とするのは、「瓠駱遺粹」、「天国朝暉」、「南疆烽火」の3つの主要展示である。西瓠・駱越とは、戦国時代から秦漢時代にかけて、現在の広西地域で活動していた二大百越支族である。西瓠・駱越は、生活する場所の自然環境と特定の生産方式によって、独特の物質文化と精神文化をはぐくんできた。中華人民共和国成立以来、瓠駱の故地に関する考古学的な発見が数多くなされ、数万点もの文物が出土した。「瓠駱遺粹」は、200件近くの瓠駱遺跡に関する秀逸な文物にしほり、貴重な文物を通して、広西の古代の労働者の勤労で勇敢、聡明で才智ある姿を展示し、瓠駱民族の政治、経済、文化生活を解明するための、もっとも直接的な実物資料を提供するものである。

また、広西は太平天国運動が起こった土地で、太平天国の指導者は広西で6年間の宣伝、組織活動をおこない、群衆に働きかけるといって苦しく複雑な闘争の後、桂平市金田村にて武装蜂起を起こし、軍を指揮して北上した。武装蜂起の戦火は18の省にまで及んだ。「天国朝暉」は、当時の広西の革命闘争の全貌を表しており、広西における太平天国運動の輝かしい業績を再現している。広西各民族人民の革命精神を褒めたたえ、特色ある中国社会主義の建設と、「小康」(中流)社会建設における広西各民族人民の開拓と向

上、勇気と前進を激励している。広西各民族人民は、愛国主義と革命闘争の精神に富んでおり、「烽火南疆」のテーマは、近現代の革命闘争史、反帝国主義、反封建主義闘争における広西各民族人民の不撓不屈、犠牲を恐れぬ勇敢な闘争精神と、英雄的な行政を広く知らしめるものである。展示の目的は、これら展示を我われ自治区の愛国主義、革命伝統教育の重要拠点とし、革命の歴史に対する青少年の理解を広め、革命闘争の知識を増やさせ、革命闘争の精神を学ばせ、新時代の活力を育成することである。あわせて、我われ自治区の豊かな革命観光資源と結合させ、我われ自治区における革命観光の一大スポットとする。今後の広西博物館の展示形式の設計思想は、過去の優秀な伝統を継承し、博物館と文物苑という室内外の結合、動と静の相補、生き生きとして味わいある、人を基本に社会に奉仕する、保護を主体とした科学技術がリードする思考の道筋を継続して考えて行かなければならない。広西の歴史の淵源と地方の特色を重視し、観衆に深く独特の印象を与えてゆくものである。

民族文物苑はここ30年来、広西博物館の室外展示として、博物館の民族民俗文物展覧・展示の伸展と拡張を担ってきた。教養性、娯楽性、趣味性を一体とした、広西地方独特の民族文物に関する屋外展示館であり、地方と民族の特色をそなえてきた。しかし、現在の状況は昔の比ではないほど変化している。

広西文化大省プロジェクトは文化産業の発展の途上にある。文化産業の発展は、広西文化大省建設の1つのキーポイントで、新たな経済成長点であり、率先して行ってゆく意義、全体的な意義を備えた重要な突破口である。いかに、より広く開放的な文化の伝播と交流をおこない、古い歴史と現代文明を融合させ、文物資源を開発し、博物館の文化産業を発展させるかという点は、我われが考えてゆかなければならない問題である。

「中国—東盟（アセアン）博覧会」は恒久的な開催地を南寧としている。それは南寧に巨大な人の流れ、物流、情報、資金の流れをもたらすと同時に、観光業の発展をももたらし、経済の飛躍を促した。南寧は大観光・汎北部湾経済発展構造のもと、地域性をおびた国際都市としての地位が突出している。ある都市において、博物館と人びとの文物・古文化資源の開発利用というのは、その地域の文化程度をはかる基準であり、時代が我われに与えた使命であるとともに、時代とともに進むということの体現でもある。文物苑は早急に品質を高め、従来の閉鎖的で単一的、静止した空間と仕組みを打破しなければならない。都市にさらに多くの文化の開放と交流を提供するため、新たな都市イメージに調和するような文化空間をつくらねばならない。

文物苑の設計は、一種のプロジェクトの改造というだけでなく、文化の着地点として

の開発と改造を通して、都市文化の構造を調整し、都市機能の構造を完全なものとし、都市の活力を増強し、都市文化の品位を高め、都市イメージを樹立し、都市の歴史と文化、および都市機能などを全面的に復興させるといった、一連の都市発展に関するマクロな戦略問題の総合的な研究企画でもある。

広西は文物資源が豊富で、広西の文物文化資源を具体的に示す文物苑の建設は、資源開発の戦略的な意義を持ち、都市の文化観光発展の推進力となる。また、文物苑を南寧の都市文化の有力な文化拠点とし、都市文化の伝播、発展の推進に影響を与え、古城路や民族大道など周辺地域の経済文化資源の開発利用を促進する。さらに直接的な影響力としては、今年、広西民族文化の精髓が集まる広西民族博物館が設立されようとしている。この博物館もまた、類似した室外展示を有している。我われが今後行ってゆかなければならないのは、創造性をもって広西文物苑の歴史的な使命を引き続き発揮しながら、広西の歴史文化を広西博物館の室内と室外の展示のなかに首尾一貫させ、歴史の深さをさらにそなえた文化の大舞台、広西の地方文化の色彩をよりいっそう帯び、現代と伝統が結合しあった新天地を造り上げることである。

改築後の民族文物苑の構想は、その「文物苑」の概念をとどめながら、引き続き「苑」を「文物の粋を集める」ことを理念とする。広西の各時代の建築や、きらめく文化の結節点を深く掘り下げ、再現する。たとえば、漢代陶屋を基礎とする漢文化建築、桂北地区の村落を特色とする民家建築、嶺南の情緒ある古い建築を主体とする騎楼建築である。広西博物館の歴史展示の伸展と拡張は、広西地方の建築芸術の展示のみならず、広西の貴重な文化遺産ともなりうる。以前の民族文物苑と比べてさらに創造性、開放性、文化性をそなえ、持続発展する文博産業、およびブランドとなる。

設計理念のうえで、文物苑は文物と観光を主題としており、産業が文物・文化の理念に溶け込んでいる。総合博物館の歴史文物展示は、文物苑と博物館展示において文物が互いに依存し、相互に補助し作用しあうことで、動と静を結合する新しい構造であり、歴史文物展示伸展の新しい理念となっている。新たな文化のブランド形成にもなりうるだろう。文物苑は広西ではじめて、地方の特色のある建築文化とその周辺環境を表した景観を伝承しており、このような感化力のある歴史文化の展示を通して、人びとに鮮やかな文化認知をうながし、そこから影響力ある都市文化ブランドを造りだす。文物苑は将来、地域性をもった文化特色を有することになるだろう。漢代の建築や人文、広西の村落建築文化の具体的な表現から海のシルクロードの騎楼文化に至るまで、突出した広西の地方文化の特色を核心とする。

また、開放性は、文物苑のきわだった特徴である。文物の経済価値は、都市文化の品位の向上や環境改善、投資の吸引、観光誘致が可能かどうかにある。文物苑は、新しい

時代の潮流に適合し、国際的な文化観光の消費習慣においてゆとりをもった文化的な場所になりうるだろう。文物苑の主要な内容に、「広西文物苑」の名称を残しているのは、文物苑の歴史的な使命を引き続き担い、博物館の歴史文化の伸展、補充、拡張とするためである。それは過去、そして未来においても博物館の歴史文化の室外展示場となりうる。文物苑は広西地域文化の特徴を融合し、広西の異なる時代の建築の特徴をくみとり、「漢儀尋幽」、「秀村竹影」、「古樓風清」を中心とし、広西の歴史発展の足跡を展示・表現する。広西の歴史文化の融合、開放、団結、発展の真髄を体現する。設計理念の創意工夫は、地方文化を主要な筋としている。

文物苑の苑は一般の意味における苑区とは異なる。それは、広西の地方文化、建築、彫塑などの真髄を集めたものであり、現代の流行要素と結合させた総合的な苑区である。博物館の文物、歴史、文化の動静の結合、古代文化と現代文化の融合を強調している。たとえば、地方の特色ある手づくり工房、村落、市街地などをつくり、博物館の収蔵品の開発と利用に注意を払っている。また、各種類型の文物展覧を開催し、各類型の銅鼓、銅鳳灯、銅面、陶製品などの古代工芸品を複製、または模造し、広西の特色豊かな旅行記念品を製造し、人びとの精神生活を豊かにしつつ、文物保護意識を高めている。根拠の異なる内容と機能を全体的に組み立てて、苑内の地理状況と周辺環境を調和させる。その機能のうち、「漢儀尋幽」とは、漢代の陶屋の建築スタイルを採用し、漢代の嶺南建築と人文、彫塑などの記号を抽出し、博物館と接続して都市における漢文化の滞在地点の伸展とすることである。「秀村竹影」とは、明清時代の広西漢族の典型である秀水村などの秀逸な村落を主体とし、村落文化と建築の特徴を傑出させることである。「古樓風清」とは、海のシルクロードがもたらした文化芸術交流を源とし、現在の汎北部湾に至る交流と繁栄を、古い騎樓街のような開放的な文化休息空間を通して解釈するなどであり、以上が三大主題区域である。博物館から「漢儀尋幽」、「秀村竹影」、「古樓風清」に至り、海のシルクロードから汎北部湾に至るまで、古代と近代文明を接続させる。

文物苑は1つの開放的な街であり、苑内には一本の湾曲した環状のメインストリートが通っている。亜熱帯の情緒ある植物のある景観、水辺のあずまやの建物が重なり合っており、庭園、戯台、閣樓、彫塑などが混在して引き立っている。青瓦も趣があり、青い石板の道は曲がりくねって伸び、訪れる人にまるで時空をさかのぼっているかの感覚を起こさせる。これは人びとにとって、往時をしのび、夢の世界を訪れるような素晴らしい場所であるだけでなく、深厚な歴史の基礎のうえに作り出された文化休息の雰囲気をもかもし出すものである。文物苑にくと、まるで歴史と対面しているかに感じられる。また、文物苑は明らかに地方文化祭の特徴をそなえている。特色豊かな広西元宵灯会、小吃節、端午節、中秋節などである。博物館がおこなっている各種の文物展示と融合し、地方文化の魅力を実に体験することができる。

我われは、文物苑の文化主体の概念の創造や、文化と観光の有機的な結合、博物館が

収蔵する資源の有効利用にともなって、広西の文化産業の発展にさらに大きな経済推進がともない、観光業にとっても大きな促進力となることを予測する。文物苑を、広西の豊かな歴史文化資源を産業発展へと向かわせる巨大な展示空間とプラットフォーム、地方文化開発をめぐる文化産業の鎖とみなすと、これがもたらす直接的、連鎖的な経済効果はかなりのものである。文物苑開発の重要点は、文化市場と観光市場である。そのうちの文化市場は、博物館の開発利用と結合して明らかな優位にたっている。文物苑は文化、休息、娯楽、賞味など多くの機能をあつめた広西で唯一の経済実体、総合の場となるだろう。

訳注：2008年12月に広西民族博物館が竣工したのを機に、銅鼓や民族文化に関する展示品は移管された。

コメント&リプライ

兼重 呉先生、ご発表ありがとうございます。今日のご発表で、広西博物館の室外の展示のことについて、よく理解できました。今日のご発表のキーワードは、室外の展示、あとは民族、文物、観光、それと都市文化と結びついた博物館といったことだと思いますが、もう1つ印象に残りましたのは、民族文物という1つの概念。これは歴史文物とは全く異なったものとして、それを軸に展示を進めていこうとされていることが、よくわかり、勉強になりました。

私個人は、1989年と1999年の2回ほど、民族文物苑を参観させていただきました。最近ちょっと足が遠のいておりますので、また行ってみたいと思っています。

それでは、質問をいくつかさせていただきたく思います。時間があまりありませんので、簡単に申し上げます。

広西博物館、民族文物苑というのは、広西自治区クラスの権威を持った博物館です。民間のいろんな民族文化村とは違った、非常にオフィシャルな権威を持つと思います。その意味で民族文物苑の参観者に与える、あるいは社会に影響は非常に大きいものだと思います。

その場合に、参観に来た人々に、広西壮族自治区に住んでいる、さまざまな民族の民族文化をどのように見せるかということは、非常にオフィシャルな影響力を持って、ほうほうに影響を与えようと思わなくても、その結果、広西の少数民族文化に関する言説とかイメージをつくっていく作用を果たしていく。それが今後とも続いてゆくと思います。

博物館の役割は、すでに存在するものを収集・展示して紹介するというのが一般的な印象ですけども、今日のご発表でおっしゃりましたように、広西民族文物苑の場合は、新たな民族文化をつくっていく。そして現代文化と融合させるという点で、従来の博物館の役割を超えた意欲的な取り組みをされている。しかもそれを文化産業の一端ととらえて、積極的な取り組みをしていこうという点で、ますます各方面に影響を与えていかれることだと思います。

そこで、私の方で4つほど質問があるんですが、まず最初は、民族文物苑の方針というのは、広西の少数民族文化のいろんなもののうちのよいもの、すばらしいものを集中して集めるという1つの戦略があると思うんですが、そうした戦略をあまりに強調しすぎると、次のような問題が出てくるのではないかという気がいたします。それは少数民族の方々の方々の生活の実態とかけ離れたイメージ、すなわち、実際農村に住んで生活している少数民族の方々の方々の生活と乖離したイメージを参観者に与えてしまう恐れはないのかという懸念です。

ただし、この点は先ほど紹介がありました、民族生態博物館が各地にあるので、それに任せておいて、南寧の民族文物苑ではそれとは違った路線でいこうということかもしれませんが、少数民族文化の忠実な再現については、どのように考えておられるのかということが、最初の質問です。

2番目は、広西民族文物苑では、私の研究しておりますトン族の建築物、鼓楼と風雨橋の非常に立派なものが建っております、トン族を研究している者としては非常にうれしく思いました。トン族の対外的な宣伝に非常に役に立っていると思いますが、しかし、その一方で、建築文化にあまり特色のないと思われるムーラオ族とかキン族（広西に住んでいるベトナム人）、そういった民族の方々の展示は室内にはおそらくあると思いますが、室外の民族文物苑の展示から全くはずれてしまっているという印象を持ちました。

そういった場合に、はずれてしまった民族の民族文化は見るべきものがないのかという誤った印象を観客に与えてしまうことにならないだろうか。あるいは、見るべきものがないという印象以上に、その民族自体があたかも存在しないような印象を与えてしまうようなことはないのかという懸念があります。文化にあまり際立った特色がないと思われるような民族の方々の展示ということに関して、将来的にどのように考えておられるのかというのが2つ目の質問です。

あと、観光を意識した展示ということでしたが、その点について2つお聞きしたいんですが。広西文化大省ということで、民族文物苑を使って文化を売り込む、文化を観光資源として使うという戦略、その場合は少数民族の文化を使うということなんですけれども、雲南省とか貴州省のような、近隣の少数民族が多い省との競合関係が出てくると思います。

紹介されましたように、広西文物苑は、実は先駆的な、先駆けとして展示を行ってきたということですが、最近各地でさまざまな施設ができてきて、競争は厳しくなっていると思うんです。私は広西の少数民族を研究しているんですが、日本では広西といっても実は知らない人が多くて、「雲南だろう」とか「貴州だろう」とよくいわれるんですね。ということは、民族の数においても、インパクトにおいても、広西というのは対外的なイメージが少し弱いと思われるところがあるんです。そういった中で、広西が民族文化大省として売り出す、勝負をすればしたら、どのような戦略を持っておられるのかというのが3番目の質問です。

最後の4番目の質問ですが、今日のご発表で、文物と観光と少数民族という3つの柱で、今までやってこられたし、これからやっていかれるということなんです、例えば観光に関しては旅遊局（観光局）、民族に関しては民族宗教事務委員会と、政府機関としては分かれているわけです。文化財に関しては博物館が専門の部署なんですけれども、今後、その3つの柱を中心にやっていかれる時に、3つの政府の部門、旅遊局と民族宗

教事務委員会と、いわゆる文物関係の役所の3つの部門が互いに協力しあって進めているとされているのか、それとも博物館が、文物関係の役所が、民族と観光の方を独自の路線でやっているとされているのか。もし独自の路線でいこうとされている場合は、民族宗教事務委員会とか、観光局とは違ったどのようなアイデアを持っておられるのかをお聞きしたいと思います。

呉 非常にすばらしい質問をしてくださいました。簡単に答えたいと思います。

時間の関係で、報告ではそれほど詳しく説明できませんでした。論文の中には、もう少しわかりやすく書いてありますので。

広西博物館、民族文化には広西の歴史が含まれています。石器時代から新中国ができるまでの歴史、これが私たちの展示の主な内容です。私たちのこの博物館は、先ほどもご紹介いたしましたように、このような内容のものを展示していきたいと考えています。

今コメントと質問をくださいました。私たちの方針は何かということですが、文物苑の方針は地域文化の特徴を展示していきたい。広西の異なった時代の、異なった特徴を紹介したい、広西のそれぞれの歴史の発展の軌跡、足跡を紹介したい。また団結、発展を紹介していきたいと考えています。つまり都市の文化、地方の建築などを紹介していきたいと考えています。

ここで強調したいのは、歴史文物、歴史文化を静と動の形で展示していきたいと考えます。例えば、建築を、彫像を、その実物を展示していきたいというのが私たちの考え方です。地方の特徴のある手工芸品、製品の開発利用、活用ですね。歴史文物の複製品をつくる。観光、旅行の記念品にする。これらも私たちのこれからの活動の内容の1つです。これからの運営、改革を歴史的に考えてみたいと思います。

2つ目の質問については、もういいですね。

3つ目の質問、広西の文化は雲南や貴州に比べて、あまりにも印象が薄いということですね。皆さん、あまりご存じないということです。昨日も、私たち、世間話の中で、雲南や貴州についてはよく知っているけれども、広西についてはあまりよくわからないといわれました。広西のさまざまな資源は雲南や貴州に劣るものではありません。「山水は天下の甲」といわれる桂林も広西にあるわけですね。あと、少数民族で漢民族を入れると12の民族、つまり広西は中国でも少数民族の種類と数が多いところです。民族文化の特徴もたくさん持っています。

また中国の西部では、広西にしか海はありません。ですから、私たちは海洋文化も持っているのです。さらに貴州と違って国境もあります。山水の文化、歴史の文化、民族文化、海洋文化、国境文化、非常に特徴があります。しかし、今までは多分宣伝が足りなかったんでしょう。十分に文化や民族について、観光として紹介するのが少なかったと思います。これから力を入れていきたいと思っています。

4つ目の質問、観光と文化をどう結びつけるかですが、博物館と観光の関係。広西の伝統的な従来の博物館は、集めて、展示して、研究して、教育してというのがこれまでの博物館の概念ですが、私はこれからは少し変えなければならないと思います。当然観光とも結びつけていかなければならないと思います。

例えば憩い、娯楽も博物館の中に取り入れていきたいと思います。特徴のあるもの、ほかと違うもの、そういう博物館をつくりたいと思います。中国の博物館、建築です。建物です。私たち広西にはその建物もあります。室内もあります。屋外もあります。憩いもできます。レジャーもできます。観光客が来たら地元の人たちと一緒に、博物館の室内の展示を見るだけでなく、屋外の部分もたくさんの空き地がありますので、そこでいろんな活動に参加してもらうことができます。

中国は今年の3月から小クラスの博物館、来年から全国の博物館で、文化部の系統が運営しているところは無料で開放されるようになります。ですから、いろんな方が来られるわけです。昔は学校や地域社会や旅行者が組織して博物館に来ていた、そういう状態でしたが、これから観光客は20倍になると考えています。来年から無料になります。つまりチケットは買わなくて自由に来ていいわけです。室内に来ることも屋外で見ることもできます。私たちは民衆のために奉仕するという意味で、これからも門戸を開放したいと思います。以上です。ありがとうございました。



民族文物苑入り口の巨大な銅鼓のレプリカ。中は茶室になっている。



トン族の風雨橋。内部はレストランとなっている。



チワン族の高床式住居。



ミャオ楼。中はレストランになっている。

〈第二セッション〉

文化多样性的保护

—— 云南的探索与实践 ——

谢沫华

云南民族博物馆

- | | |
|--------------------------------|------------------------------|
| 1 多元共生的云南文化 | 2.4 保护与开发的矛盾日益突出 |
| 1.1 多民族多元性 | 2.5 传统文化的保护与开发缺乏与时俱进的精神 |
| 1.2 多地区多流域性 | 3 近二十多年来云南在文化多样性保护方面所作的探索与实践 |
| 1.3 多文化板块性 | 3.1 各级各类传统型博物馆的广泛建立 |
| 1.4 多样汇融吸收兼容性 | 3.2 民族民俗文化材的建设 |
| 2 云南文化多样性面临的问题 | 3.3 民间民族文化传习馆的建撤 |
| 2.1 经济社会发展的严重滞后阻碍了传统文化的保护与开发 | 3.4 民族文化生态材的建设 |
| 2.2 传统文化资源消失蜕变严重 | 3.5 民族文化活态博物馆的建设 |
| 2.3 一些弱小民族的传统文化难以抵御外来主流文化的强大冲击 | |

由于历史、地理等多种因素的综合影响，云南成为文化多样性富集的地区。近二十多年来，随着社会经济、文化的发展，云南文化多样性面临许多问题，多元共生的云南文化面对现实表现出了脆弱性，保护云南的文化多样性成为了人们共同的呼声。为此，云南各级政府、相关的机构及组织、许多有识之士为保护云南的文化多样性进行了积极的探索和实践。本文拟从多元共生的云南文化及面临的问题、近二十多年来云南在保护文化多样性方面所作的探索与实践、文化多样性保护的若干思考等几方面进行一些粗浅的探讨。

1 多元共生的云南文化

云南是文化多样性的富集地区，云南文化具有以下几个特征：

1.1 多民族多元性

云南民族众多，多种文化都具有特定的民族个性，即“多民族性”，这是中原地区所缺少的文化现象。从各民族的历史渊源来看，彝族、哈尼族、傈僳族、拉祜族、纳西族等民族源于古代西北的氏羌族族群，带来了草原游牧文化和高原农耕文化；壮族、傣族等民族源于古代南方的百越族群，带来了水区稻作文化和热区种植文明；苗族、瑶族等民族源于古代江汉地区的三苗九黎，带来了一种游耕文化，既有中原文明，也有迁徙中博采来的友

邻民族的文化；至于佯族、布朗族等民族是古代孟高棉的后裔，代表着一种全新的孟高棉文化；元明清时期，从各地大量进入云南的汉族、回族、蒙古族则带来了汉文化、伊斯兰文化和蒙古文化；文化的多重来源，成就了云南民族文化的多样性。

1.2 多地区多流域性

云南文化中各种典型文化相对集中为一片区域，表现为“多地区性”、云南的文化区域至少有5个：一个是以昆明为中心的滇池文化区；一个是以大理为中心的洱海文化区；一个是以保山为中心的永昌文化区；一个是以曲靖为中心的滇东文化区；一个是以通海为中心的滇南文化区。另一方面又有流域性，青藏高原和横断山留给云南的河流大多是南北纵流，重要的主要有珠江流域、南盘江流域、红河流域、澜沧江流域、怒江流域，加上自西向东、横卧川滇的金沙江流域，形成了西南著名的六江流域。这是自然赋予云南文化的生态特征，这些山谷与河流便是人类早期的民族走廊与文化走廊，不同流域和走廊都具有相对的文化特征。从某种意义上说，六江流域沉淀着整个云南的文化与历史，塑造了整个云南的民族与文化。

1.3 多文化板块性

云南的文化就历史而言，西汉的西南夷文化是一个板块，两晋的爨文化是一个板块，唐宋的南诏大理文化是一个板块，明清的土司制度是一个板块；与此同时，在历史进程中，云南汇聚和沉积了东亚南部的多种文化：中原文化从北边来此沉积，东南亚文化从南边来此沉积，江汉楚越文化从东边来此沉积，云南便因此成为亚洲古代文化的一个锅底，一个聚宝盆。

1.4 多样汇融吸收兼容性

云南文化的多样汇融吸收兼容性是多元的云南文化长期交流的自然结果，汇融往往打破了民族的个体界线，组成了新的社会经济文化心态，如草原型文化，不止属于藏族；游耕型文化，不止属于苗族、瑶族；高山型文化，不止属于景颇族；坝子定居农耕文化，不止属于傣族，等等。同时，世界民族学历史表明，封闭的文化比比皆是，开放的文化却难寻找；文化逆反、文化冲突往往多于文化适应与文化兼容；云南文化具有跨国性、跨境性、跨文化性，它是一个开放的系统，表明了云南文化的兼容性；白族、纳西族的文化发展，印证了“海纳百川，有容乃大”的哲言；傣族得到了南传上座部佛教的精髓，接纳了巴利文系统的印度和南亚文化，铸就了博大精深的“贝叶文化”；其他如“毕摩文化”、“贝玛文化”都是具有代表性的兼容文化。

2 云南文化多样性面临的问题

云南文化在二十世纪八十年代以后，随着云南社会经济以及全球经济一体化的发展，面临如下一些问题：

2.1 经济社会发展的严重滞后阻碍了传统文化的保护与开发

毋庸讳言，新中国建立以后云南各民族的生产生活发生了翻天覆地的变化，然而由于基础条件的制约，长期得不到解决的贫困问题严重阻碍了传统文化的保护与开发。云南目前还有400多万贫困人口，占全省总人口的十分之一，这些贫困人口大多集中在边远的少数民族地区，在物质与精神对立统一的过程中，精神只能退而求其次。

2.2 传统文化资源消失蜕变严重

近二十余年来，云南与内地、甚至世界缩短了距离，大量现代商品以其绚丽多彩、高档奇巧使许多民族文化黯然失色，许多人特别是年轻人很快不同程度地接受了外来生活方式与文化娱乐方式，盲目崇拜外来文化，而轻视本地区、本民族文化。云南传统文化资源正面临如下问题：一是民族古籍保护不力，许多民族古籍因能识读的人去世，成为无人能读懂的天书；二是民族文物大量流失；三是民族文物保护单位管理设备手段落后，未能对已征集到手的文物进行科学的保管保养，一直无法正常发挥其作用；四是许多民族民间传统工艺由于后继无人而正在失传；五是许多固有的习俗因商品经济的冲击，正悄然变味。

2.3 一些弱小民族的传统文化难以抵御外来主流文化的强大冲击

由于经济与社会发展形成的巨大差异，许多经济社会发展落后的边疆少数民族在文化上处于相对的弱势和非主流的地位，面对外来文化、主流文化的冲击和挑战，常常表现出软弱无力，甚至一触即溃，从而严重影响了传统文化的保护。

2.4 保护与开发的矛盾日益突出

轻保护、重开发正日益成为传统文化保护与开发令人头痛的问题，专家之言可以倾听，决策还得领导拍板；专家注重人文关怀，政府着眼任期目标，则往往成为传统文化保护与开发中一组亟待解决的矛盾。在开发问题上，普遍存在一部分少数民族群众因缺乏教育而导致科学文化知识贫乏，无能力，也不能自觉地进行传统文化的保护与开发，即使有些开发也只停留在表层文化的开发上，没有在挖掘更深层次的文化内涵上做文章。另外，大多数都在强调重视有形文化的保护，而少有人去关注民间音乐、舞蹈、口头传说、语言、礼仪、技艺等无形文化的抢救。

2.5 传统文化的保护与开发缺乏与时俱进的精神

如何增强传统文化的时代内涵，学习、借鉴外来文化，摒弃传统文化中的糟粕，与时俱进，依然未引起足够的重视，就连少数民族本身也未能充分认识到这一点的重要性，出现了重传承轻发展的弊端，导致了民族传统文化缺乏活力与生命力。

3 近二十多年来云南在文化多样性保护方面所作的探索与实践

二十世纪八十年代以来，云南在文化多样性保护方面进行了广泛的探索与实践。

3.1 各级各类传统型博物馆的广泛建立

二十世纪八十年代以来，除已建成的云南省博物馆（1958年）外，云南各地各级各类博物馆广泛建立，如地州一级的大理白族自治州博物馆、文山壮族苗族自治州博物馆、楚雄彝族自治州博物馆、迪庆藏族自治州博物馆等；县（市）一级的大理市博物馆、勐腊县博物馆等；高等院校内的云南民族大学博物馆、云南大学人类学博物馆等。除以上这些综合类、教学性博物馆外，1995年一座专门性的博物馆——云南民族博物馆建成开馆，将以传统型博物馆的形式保护云南文化多样性的工作推向了高潮。

在多元文化并存的云南，各种文化之间经常存在着相互不信任，甚至彼此厌恶的现象，这里有以往的偏见、误解等因素，但更多是因为相互不了解、无知所引起的。在云南建立各级各类博物馆，通过向公众介绍各民族的文化生活极其自身价值；在消除人们之间的误解与偏见，鼓励人们保持自己独有的传统文化、生活方式、社会习俗，鼓励人们广泛发扬和鉴别自己的传统文化，以继承那些属于民族文化遗产中的优秀部分，引导人们对自身传统文化中存在的问题进行实事求是的讨论，从中找出具有建设性的办法，并努力去解决它等方面发挥了重要的作用。

3.2 民族民俗文化村的建设

除占主体部分的传统型博物馆的不断兴起，充分展示各民族的传统外，二十世纪八十年代以来，为突破传统的静态展示方式，加强展示的形象直观效果，以1992年云南民族村的建成为标志，云南各地兴建了一批民族民俗文化村。民族民俗文化村是以民族或民间生活为主题，展示恢复或保存于现代正面临消失的传统生活方式；是在改革开放时代，少数民族需要走出自己狭小的天地，走进都市，向人们展示自己丰富的传统文化，让外界了解之际，增进与外界交流，促进本民族本地区的开放发展以及日益现代化的大中城市的人们对古朴、粗犷的原生文化的调剂来丰富自己生活的需要共同促成的。民族民俗文化村的出现，使中外观众在大饱眼福的同时领略到云南各民族多姿多彩的文化。但是，大多数的民族民俗文化村的建设与发展着眼于发展旅游的需要，以满足旅游者猎奇等低层次的文化需求为主，在正面、真实反映各民族传统文化方面具有一定的局限性。

3.3 民间民族文化传习馆的建撤

1993年来自中国中央乐团的国家一级作曲家田丰先生自筹资金，带领一批来自云南边远山村的少数民族民间艺人，在云南昆明附近的安宁市螳螂川创办了中国第一个民族民间文化传习馆。他们试图以此来保护保存面临经济大开发而濒临灭绝的少数民族非物质文化遗产。传习馆的经济来源向社会集资，在苦苦支撑数年后，2000年引入陷入经济困难和经济纠纷而被迫解散。

民族民间文化传习馆的出现，大大突破了传统博物馆只注重有形文化遗产——文物的保护，开始注重无形文化遗产的保护与传承。但是由于主创者过于理想主义和不合时宜的运作方式而夭折，传习馆的夭折也告诉世人：异地进行民族传统文化的保护与传承是不可能长久的。

3.4 民族文化生态村的建设

云南民族文化生态村的建设，酝酿、策划于1997年，立项、启动于1998年，先后建设了腾冲县和顺汉族文化生态村、景洪市巴卡基诺族文化生态村、石林县月湖彝族文化生态村、邱北县仙人洞彝族文化生态村、新平县南碱傣族文化生态村等五个试点村寨。

云南民族文化生态村的建设，向我们展示了一种全新的文化保护与开发的理念和方式，其具有以下几个特点：一是文化生态村不是人工建设的博物馆，而是文化、生态典型的社区或村寨；二是文化生态村的建设不仅要发掘、整理、继承优秀的传统文化，而且要吸收优秀的现代文明；三是文化生态村的管理，强调当地民众的参与，并最终实现由当地民众进行管理和依赖自身力量进行发展；四是文化生态村的建设，必须寻求经济发展途径，只有民众富裕了才会有文化的进一步繁荣和昌盛。云南民族文化生态村的出现，标志着一种对文化进行原地整体保护理念和方式在云南的出现。

3.5 民族文化活态博物馆的建设

云南有着独特而无与伦比的民族文化资源。但是，当前云南各民族文化，尤其是七个人口较少民族文化遗产的消亡、流失触目惊心。因此，抢救、收藏、保护、传承濒临消失的云南七个人口较少民族的物质与非物质文化遗产，就显得非常重要和十分迫切。

近日由云南民族博物馆提出的项目已通过初步论证，拟定在云南着力开展七个人口较少民族文化遗产活态博物馆（试点）建设工作，在民族聚居村落选点，每个民族建一个活态博物馆。树立民族信心和自豪感，促进民族文化多样性共存、实现民族文化多样性共享。

文化多样性的存在和保护是每一个有忧患意识和责任感的学人必须面对和加以认真研究的问题。我认为要做好这项工作，首先在观念上必须明确人类文化是由多种文化构成的，各种文化是各地区各民族的人们在长期历史发展中创造和传承的、我们应该加以珍视的宝贵财富。其次世界是多元的，多元化发展是世界文化发展的必然趋势，只有尊重各种文化的存在价值和发展需要，才能实现世界文化发展的多元化。第三，要积极、充分地帮

助弱势群体发展良好的文化，通过各种途径和方式帮助他们挖掘、整理、传承自己优秀的传统文化，并通过帮助他们发展经济等方式来促进其自己保护和发展自己文化意识的觉醒，促进文化多样性的发展。第四，要加强各相关机构和人员在文化多样性保护方面的联系与合作，共同探索保护文化多样性的新途径和新方法。文化多样性的保护是一个长期的、世界性的问题，世界上许多国家和地区多在进行积极的探索和实践，创造了很多理论和经验，值得彼此借鉴和参考。我相信只要我们携起手来，必将会在保护文化多样性方面有更大的作为。

文化多様性の保護

— 雲南の探求と実践 —

謝 沫 華

訳：長沼さやか

- | | |
|--|--------------------------------------|
| 1 多元共生の雲南文化 | 2.4 保護と開発の矛盾が日に日に突出してきている点 |
| 1.1 多民族多元性 | 2.5 伝統文化の保護と開発に時代とともに皆で進む精神が足りないという点 |
| 1.2 多地区、多流域性 | 3 この20数年間の雲南における文化多様性の保護分野での探求と実践 |
| 1.3 文化の多層性 | 3.1 各級、各級の伝統型博物館の幅広い建設 |
| 1.4 多様に融合・吸収した包括性 | 3.2 民族民俗文化村の建設 |
| 2 雲南文化の多様性が直面する問題 | 3.3 民間の民族文化伝習館の建設と撤廃 |
| 2.1 経済社会発展の著しい遅れが伝統文化の保護と開発の妨げになっている点 | 3.4 民族文化生態村の建設 |
| 2.2 伝統文化資源の消失・変化が著しい点 | 3.5 民族文化生態博物館の建設 |
| 2.3 いくつかの弱小民族の伝統文化は外来の主流文化の強大な衝撃を防御し難いという点 | |

歴史、地理など多くの要素が総合的に影響しあうことで、雲南は多様な文化が豊富な地域となった。ここ20数年において、社会経済・文化の発展にともない、雲南の文化多様性は多くの問題に直面し、多元共生的な雲南文化は現実に表れてきた脆弱性に向き合うこととなり、雲南の文化多様性の保護は人びとの共通の呼び声となってきた。このため、雲南の各級政府、関連機構および組織、多くの有識者は、雲南の文化多様性の保護のために、積極的な探求と実践を行ってきた。本論文は多元共生的な雲南文化、および直面する問題、20数年来の雲南における文化多様性の保護の分野における探求と実践、文化多様性の保護についての若干の考察といったいくつかの方面から、大まかな検討を行ってゆきたい。

1 多元共生の雲南文化

雲南は文化多様性の豊かな地域である。雲南文化のもついくつかの特徴は以下のとおりである。

1.1 多民族多元性

雲南には多くの民族があり、多種の文化がそれぞれ特定の民族の個性を持つという、いわゆる「多民族性」を有する。これは中原地域には見られない文化現象である。各民族の歴史の根源からみるに、イ族、ハニ族、リス族、ラフ族、ナシ族などは古代西北の氐や羌などの部族を起源とし、草原の牧畜・農耕文化と高原の農耕文化をもたらした。チワン族やタイ族などは、古代南方の百越を起源とし、水田稲作文化と熱帯栽培文明をもたらした。ミャオ族、ヤオ族などは古代江漢（長江および漢水）地域の三苗九黎を起源としており、一種の移動農耕（焼畑）文化をもたらした。ミャオ族、ヤオ族などは中原文明をもたらしたばかりでなく、移住の過程で近隣の民族の文化をも広く吸収してきた。ワ族やプーラン族などに至っては古代モン・クメールの末裔であり、一種のまったく新しいモン・クメール文化を担っている。元明清時代、各地から雲南にやってきた多くの漢族、回族、モンゴル族は漢文化やイスラム文化、モンゴル文化をもたらした。このような文化の多重的な起源は、雲南の民族文化の多様性を成り立たせている。

1.2 多地区、多流域性

雲南文化のなかには、各種の典型的な文化が相対的に集中し1つの区域を形成し、「多地区性」を現している。雲南の文化区域は少なくとも5つある。昆明を中心とした滇池文化区、大理を中心とした洱海文化区、保山を中心とした永昌文化区、曲靖を中心とした滇東文化区、通海を中心とした滇南文化区である。一方で、流域性をもっており、青藏高原と横断する山脈により雲南の河流のほとんどは南北を縦に流れている。重要なのは、主として珠江流域、南盤江流域、紅河流域、瀾滄江流域、怒江流域、西から東に流れるものを加えると、四川と雲南にまたがる金沙江流域があり、西南で著名な六江流域を形成している。これが、自然が与えた雲南文化の生態的特徴である。これら山河は人類初期の民族と文化の回廊であり、異なる流域と回廊はそれぞれ相対的な文化的特徴を持っている。ある意味で、六江流域には全雲南の文化と歴史が沈殿しており、雲南全体の民族と文化を体現している。

1.3 文化の多層性

歴史で言うならば雲南の文化は、前漢時代の西南夷文化、東晋・西晋時代の爨文化、唐宋時代の南詔大理文化、明清時代の土司制度がそれぞれ1つの層を形成している。そして、歴史の過程において、雲南は東アジア南部の多種の文化を集め蓄積してきた。北から中原文化、南から東南アジア文化、東から江漢楚越文化が到来し、これにより雲南はアジア古代文化の1つの基層となり、あたかも宝のたまる鉢ようになったのである。

1.4 多様に融合・吸収した包括性

さまざまなものが集まって融合・吸収した雲南文化の包括性は、多元的な雲南文化が長期にわたって交流した自然の結果である。融合は次第に個々の民族の境界を打ち破り、新しい社会、経済、文化の形態を作り上げてきた。たとえば草原型文化はチベット族にとどまらないし、移動農耕（焼畑）型文化はミャオ族・ヤオ族、高山型文化はジンポー族、壩子（盆地）定住農耕文化はタイ族のそれぞれにとどまらない。また、世界の民族学の歴史は、閉鎖的な文化はどこにでも見られるが、開放的な文化は逆に探すことが難しいこと、文化の反発と衝突は往々にして文化の適応と融合よりも多く起こりうるということを示している。雲南文化は「跨国性」（トランスナショナル）、「跨境性」（トランスボーダー）、「跨文化性」（クロスカルチュラル）の要素を含んでいる。これは開放的な文化のタイプの1つであり、雲南文化の包括性を表している。パー族やナシ族の文化の発展は「海納百川、有容乃大（海は百の川を納め、融合して大きくなる）」という言い方の通りである。タイ族は南伝上座部仏教の真髄を得て、パーリ語系のインド・南アジア文化を受け入れ、豊かで深い「貝葉文化」を作り上げた。そのほか、「畢摩（ピモ）文化」や「貝瑪（バイマー）文化」なども、代表的な包括的文化である。

2 雲南文化の多様性が直面する問題

雲南文化は1980年代以降、雲南社会経済および世界経済の一体化をともなった発展により、以下のようないくつかの問題に直面している。

2.1 経済社会発展の著しい遅れが伝統文化の保護と開発の妨げになっている点

実のところ、中華人民共和国が成立して以後、雲南の各民族の生産生活には非常に大きな変化が生じた。しかし、基礎的条件の制約から、長い間解決することができなかった貧困の問題が、伝統文化の保護と開発を著しく阻んできた。雲南の貧困層は目下400万人以上を数え、省の全人口の一割を占める。こうした貧困層の多くは周縁部の少数民族地区に集中しており、物質と精神が対立、あるいは両立する過程において、後者がおろそかにされたり二の次にされたりしている。

2.2 伝統文化資源の消失・変化が著しい点

ここ20年来において、雲南や中国国内、はては世界に至るまで地理的距離が短縮された。大量の現代商品はその美しさや多彩さ、高級さや精巧さで、多くの民族の文化を色褪せさせた。多くの人、とりわけ若者は、度合いは異なるもののすぐに外来の生活様式と文化娯楽のやり方を受け入れてしまい、盲目的に外来文化を崇拜し、自分たちの地域

や自分たちの民族文化を軽視している。雲南の伝統的な文化資源はまさに、以下のような問題に直面している。1. 民族の古籍の保護に力を入れておらず、それを読める人が世を去ってしまったことにより、多くの民族の古籍が誰も解読できない難解な書物のようになってしまっている点。2. 民族文化財が大量に流失している点。3. 民族文化財の保護管理のための設備・手段が遅れており、すでに収集・入手した文化財に対して科学的な保管保存が実行されておらず、これまでその正常な働きを発揮できていない点。4. 多くの民族の民間伝統工芸が、後継者不足によりまさに伝承できなくなっている点、5. 多くの固有の習俗が商品経済の影響から、悄然として変容してしまっている点、である。

2.3 いくつかの弱小民族の伝統文化は外来の主流文化の強大な衝撃を防御し難いという点

経済と社会の発展により大きな格差が生まれ、経済社会の発展が遅れた周縁の少数民族の多くは、文化のうえで相対的に劣勢であり主流ではない地位に置かれている。それらは、外来文化や主流文化の衝撃と挑戦に直面した際には、いつもその脆弱さと無力さを露呈してきた。即座に壊滅させられてしまう場合すらある。そのため、伝統文化の保護に重大な影響を及ぼしている。

2.4 保護と開発の矛盾が日に日に突出してきている点

保護を軽んじて開発を重んじるというやり方は、伝統文化の保護と開発にとってますます頭を悩ませる問題になっている。専門家の言葉に耳を傾けることはできるが、政策を決定するにはやはり政治指導者が判断を下さねばならない。専門家は人文的関心を重んじるが、政府は任期における目標に着眼している。すなわち往々にして伝統文化の保護と開発には、早期解決が必要な矛盾が存在している。開発の問題上、一部の少数民族の大衆には、教育の不足により科学的、文化的知識が乏しいため、能力に欠け、自発的に伝統文化の保護と開発を進めることができない状況が広く見られる。たとえ、開発が進められたとしても、それは表層文化の開発の段階で滞ってしまい、さらに深い層まで掘り下げた文化の内面にまで立ち入らない。また、有形文化の保護を強調して重視する場合は多くても、民間音楽、舞踊、口頭伝承、言語、儀礼、芸芸などの無形文化の緊急の救助に注意を払う人は少ない。

2.5 伝統文化の保護と開発に時代とともに皆で進む精神が足りないという点

どのように伝統文化の内容を増強し、外来文化に学びこれを手本とし、伝統文化の中のいらぬものを取り除き、時代とともに皆で進むかは、依然として十分に注目されて

おらず、また少数民族自身もいまだ十分にこのことの重要性を認識していない。伝承を重んじ発展を軽んじる弊害も生じ、民族の伝統文化の活力と生命力の不足をもたらしている。

3 この20数年間の雲南における文化多様性の保護分野での探求と実践

1980年代以降、雲南では、文化多様性の保護の分野において、幅広い探求と実践が行われてきた。

3.1 各級、各類の伝統型博物館の幅広い建設

1980年代以降、すでに設立されていた雲南省博物館（1958年設立）のほか、雲南各地に各級、各類の博物館が幅広く建設された。「地」級では大理ペー族自治州博物館、文山チワン族ミャオ族自治州博物館、楚雄イ族自治州博物館、迪慶チベット族自治州博物館など、「県」級では大理市博物館、勐腊県博物館など、高等教育機関内では雲南民族大学博物館、雲南大学人類学博物館などである。これら総合的で教育学習型の博物館のほかに、1995年には専門性のある博物館——雲南民族博物館が設立、開館し、伝統型博物館の形式で雲南文化の多様性を保護する作業は盛り上がりへと向かった。

多元文化が併存する雲南では、各種の文化の間にはつねに、互いに信用しなかったり、ひどい場合は嫌悪したりする現象が存在しており、これが偏見や誤解などの要因となっている。しかし、もっと多いのは相互の不理解や無知が引き起こす出来事である。雲南では各級・各類の博物館を建設し、人びとに各民族の文化生活を紹介することを通して、自らの価値を極め相互の誤解や偏見を払拭させ、人びとに自分たちの固有の伝統文化や生活様式、社会習俗を保持してゆくこと、人びとが自分たちの伝統文化を広く発揚し認識することを後押ししている。民族の文化遺産のなかの秀でた部分を継承することで、自らの伝統文化のなかに存在する問題に対して事実在即した討論を行い、そこから建設的な方法を模索するよう導き、あわせて努めてそれらを解決することなどの面で重要な作用を発揮しているのである。

3.2 民族民俗文化村の建設

主体となる伝統型博物館は絶え間ない奮起によって、各民族の伝統文化を十分に展示している。くわえて、1980年代以降、伝統的な静態的展示方法を打破し、展示の形として直接観察する効果を強めるべく、1992年の雲南民族村の設立を機に、雲南各地で民族民俗文化村が建設された。民族民俗文化村は民族、または民間の生活をテーマとし、現代にまさに消滅に瀕している伝統的な生活様式を復元、または保存し展示している。改

革開放期を迎えて少数民族は自分たちの狭小な世界から都市へと出なければならなかった。自分たちの豊かな伝統文化を展示することは、外界を理解する機会や外界との交流を増やし、自民族や地域の開放発展をうながす一方で、日に日に現代化してゆく大中市の人びとに、古風で素朴、飾りのない「原生文化」を調合し、自らの生活を豊かにするために必要なものを共同で作出すことをも促進した。民族民俗文化村の出現は、中国内外の観客の目を楽しませると同時に、雲南各民族の多様多彩な文化に対する理解度を高めてきた。しかし、多くの民族民俗文化村の建設と発展は、観光業としての需要に着眼点を置いており、観光客を満足させる奇抜なものなど、低レベルな文化の需要が主である。その点でそれらは各民族の伝統文化を直接に、そして真正に反映することに一定の限界を持っている。

3.3 民間の民族文化伝習館の建設と撤廃

1993年以降、中国中央楽団の国家級の作曲家である田豊氏が自ら資金を工面し、雲南辺境の山村出身の少数民族の民間芸人を指揮して、雲南昆明に近い安寧市螳螂川にて中国で初めての民族民間文化伝習館を創立した。これにより彼らは、経済の大開発に直面して消滅に瀕した少数民族の無形文化遺産を保護・保存することを計画した。伝習館の収入源は、社会からの資金集めに頼っていたが、苦しみながら数年を持ちこたえた後、2000年に経済的な困窮と紛糾に見舞われ解散を余儀なくされた。

民族民間文化伝習館の出現は、伝統的な博物館が有形文化遺産のみを重視することを打破した。すなわち文化財の保護、無形文化遺産の保護と伝承を重要視することを始めたのである。しかし、創立者の過度の理想主義と時勢に合わない運営方式により頓挫した。伝習館の頓挫は、世の人びとに対して、異地、その民族の居住地以外で伝統文化の保護と伝承をしようとしても長くは続かないことを示した。

3.4 民族文化生態村の建設

雲南民族文化生態村の建設は、1997年に準備と計画がなされ、1998年に立項され始動した。そして騰衝県和順漢族文化生態村、景洪市巴卡ジノ一族文化生態村、石林県月湖イ族文化生態村、邱北県仙人洞イ族文化生態村、新平県南碱タイ族文化生態村など五カ所のモデル村が相次いで建設された。

雲南民族文化生態村の建設は、我々に一種の全く新しい文化保護と開発の理念とやり方を示した。それには以下のようないくつかの特色がある。1. 文化生態村は人工的に建設された博物館ではなく、文化、生態の典型的なコミュニティまたは村落である。2. 文化生態村の建設は発掘、整理、優秀な伝統文化の継承にとどまらず、優秀な現代文明の吸収をも必要とする。3. 文化生態村の管理は、当該地域の住民の参加を強調し、最終的には地元住民による管理と自分たちの力による発展によって実現する。4. 文化生

態村の建設は、経済発展の手段の探求が必須であり、人びとが富むことによってはじめてさらなる文化の繁栄がある。雲南民族文化生態村の出現は、現地で文化を総体として保護する理念と方法が雲南でも行われはじめたことを示している。

3.5 民族文化活態博物館の建設

雲南には独特で比類ない民族文化資源がある。しかし、今のところ雲南の各民族文化は、とりわけ人口が比較的少ない7つの民族の文化遺産の消滅や流失が大変ひどい状況にある。このため、消失の危機に瀕している7つの少数民族民族の有形無形文化遺産の救済、収蔵、保護、伝承は、非常に重要かつ、差し迫った問題である。

昨今、雲南民族博物館が提議した項目はすでに初歩段階の論証を終え、雲南において人口が比較的少ない7つの民族の文化遺産活態博物館（モデル）の建設事業に力を入れて展開することを定め、民族の集住村落の中から選ばれた地点において、各民族につき1つの活態博物館を建設している。民族の自信と誇りを確立し、民族文化の多様性の共存と、民族文化の多様性の共有の実現を促進する。

文化の多様性の存在と保護は、そのことを憂える意識と責任感のある学者それぞれが向かい合って、真剣に探究せねばならない問題である。私はこの事業を成功させるためには、以下のことを明確にしなければならいと考えている。第一に、人類文化が多くの文化によって構成されていること、各種の文化は各地域、各民族の人々が長い歴史の発展過程において創造し伝承してきたものであり、大切にしなければならない財産であるということを明確に意識せねばならない。第二に、世界は多元的であり、多元化の発展は世界の文化の発展の必然的な趨勢であり、各種の文化の存在価値と発展需要を尊重することによって、はじめて世界の文化発展の多元化が実現する。第三に、積極的かつ十分に弱勢の人びとの文化の発展と好転を助け、さまざまな過程や方法を通じて、彼らが自分たちの優秀な伝統文化を発掘、整理、伝承することを援助する。あわせて彼らの経済発展などの方式を支援することで、自らが自らの文化を保護し発展させることへの意識の目覚めを促し、文化の多様性の発展を促進する必要がある。第四に、それぞれの関連機関と人員が、文化多様性の保護の分野で連携協力し、文化多様性の保護の新たな道程と方策を共同で探求する必要がある。文化の多様性の保護は長期的かつ世界的な問題であり、世界の多くの国家や地域が積極的に探求と実践をおこない、多くの理論と経験を生み出しており、相互に手本とし参照する価値がある。我われが手を携えれば、必ず文化多様性の保護の分野において、さらなる偉業をおこなうと信じている。

コメント&リプライ

長谷 今、ご発表を大変おもしろくうかがいました。まず、雲南省の文化多様性の保護の現状について、マクロな観点からわかりやすい概要を教えていただいたと思います。ご発表をうかがってまず思ったのは、文化を語ることの難しさということです。謝先生のおっしゃるとおり、文化にはそれぞれに多様な個性があって、一方ではある程度のブロックや系統に分けられる面もあるけれども、一方では開放的でもあり混交的でもあります。

実は日本文化についても、ある程度同じことが起こります。例えば、ある時は「私たち日本人はさまざまな宗教に寛容だ」と言ってみたり、「外国のよい文化を柔軟に取り入れるのが得意だ」などと言います。また、ある場合には、手のひらを返すように、「島国だから私たちの文化は閉鎖的だ」と言ってみたり、「日本文化は日本人にしか理解できないぐらい独特だ」と言ってみたりします。要するに文化というのは、語られる時の状況に応じて何とでも語られる面を持っていると思います。ということは、もう少し具体的なレベルに話題を限定しなければ、文化について建設的な議論は難しいのではないかと感じました。

その意味で、私がかかなり重要な問題の1つだと思っているのは、農耕や牧畜など、直接その民族の生活や生存の基盤にかかわっている生業文化です。先生もご指摘なさったとおり、雲南の文化的多元性を根底から揺るがしているのは、社会経済の変化とか経済のグローバル化、商品経済と言われるものが、かつてない規模で浸透していることだと思います。

例えば、私がか主な調査地としていた徳宏州というところで、こういうことがありました。私は、イネの収穫の時にあるタイ族の家を訪問したのですが、その時に彼らは、ヘットガンということをしていました。ヘットガンとは、労働交換のことです。例えばある人が自分の田んぼの稲刈りをする時、お金を使って人手を雇うのではなくて、親戚に手伝ってもらいます。手伝ってもらったお礼は、夕御飯でもてなす程度で、今度は別の日に、その人の田んぼの稲刈りを自分が手伝いに行きます。このようにすると、金銭の授受は必要ありません。その家のタイ族のおじさんは、「このような労働交換はタイ族のうるわしい伝統なのだ」と私に語りました。

しかし現在、山地区域に住んでいるより貧しい人々を安く雇って収穫を済ませるというのが、そのタイ族の村ではより一般的です。そのような変化が起こっているからこそ、おじさんは、そういう風潮に抗議して、本当のタイ族はこうなんだ、本当の生活文化はこうなんだと主張せずにはいられなかったのだと思われます。

私の目から見ても、この助け合いの精神に基づく労働交換は、確かによい伝統文化だ

と思いますし、社会主義精神文明にもかなう行為であると思います。しかし、彼らがすでに他人を雇えるぐらい現金収入を得ていて、山地に住むより貧しい人が、さらにそこから現金収入を得られるという状況もあるわけで、これを一概に否定することもできません。

これは、とても難しい問題です。つまり、文化の多様性を保護することと伝統的な生業文化を近代化することをどう折り合いをつけるのかという問題です。この意味で、私たちは、一体何のために、どの程度まで、どのように文化の多様性を保護するのか、また現実的に保護できるのかどうかということを考えなければならないと思います。

ここで私なりに問題を整理します。研究者や博物館の関係者として私たちが今論じようとしている問題は、他者の文化をいかに保護するかという問題です。保護の方法としては、2つ考えられます。1つは、生きられている状態のまま残すこと。もう1つは、もう生きられないけれども、標本や記録として残すことです。標本や記録として残す場合については、可能な限り残す努力をすればいいわけで、その意味では問題はさほど大きくないと思います。

問題は、他者の文化を生きたままで残そうとする場合です。私たち自身が彼らに代わってその文化を学んで実践するというなら別ですけれども、そうでないのなら、どうしても他者を動かして、彼らにその文化を残させることになります。そこから私たちと他者との人間関係や権力関係からむろんな問題が派生することが考えられます。強制的に文化を守らせるというのではなく、自発的にしてもらうにはどうすればいいのか。文化の多様性の保護の重要性をどうやって本人たちに理解してもらうか。また、私たちとしては、文化保護のために資金がいるとしたら、それをどう確保するかといった問題です。

こういう問題意識に基づいて、いくつか具体的な問題について質問したいと思います。

まず1つ目は、民族文化生態村について。この村の伝統的な生業文化は、どのように保護され、維持される計画になっているのでしょうか。この村の人々は主に農業をしているように見受けられますが、これはどのような農業なのでしょう。自給自足的なのでしょう。昔ながらの稲作をすることになっているのか、それとも稲作をやめて商品作物に切り換えてもいいのでしょうか。農薬やトラクターを使っているのでしょうか。

これは確認ですが、生態村というのは、入場料をやはり払うんですね。そのような形で現金収入が増えたら、よその村から人手を雇ってきて農業をやってもらうということもできるのでしょうか。彼らの手にする現金収入は、農業によるものと観光によるものどちらが多いのか、どちらを主とするように計画されているのでしょうか。

次に、活態博物館のことですが、これは生態村とどの点が違うのかについて、できれば少し具体的にその方針についておうかがいしたいと思います。具体的にその村の人々はどのような生活をするようになる計画なのかについて、おうかがいしたいと思います。

もう1つは、民族文化伝習館についてですが、これは無形文化保護に着目し尽力した組織であるということで、これがつぶれてしまったのは非常に残念だと思います。理想主義的に過ぎたと批判されていましたが、それは具体的にどういうことだったのでしょうか。経済的に運営が困難になったということですが、研究機関や国が経済的に支援するという話はなかったのでしょうか。また、その後、具体的にこの伝習館の志を継ぐような構想はないのでしょうか。

最後に、少し抽象的ですが、貧困という概念についてどう考えていけばいいのか、質問したいと思います。

貧困は伝統文化の保護と開発を阻害しているとレジュメでも書いてあったと思うんですが、伝統文化というのは、そもそも今のように商品経済が発達する以前の金銭的には貧しい社会状況の中で、それに適応して作りあげられたものではないのかなと思うわけです。もともとそんなにお金のいらぬ状況なのではないか。現在の都市住民の視点から見れば、伝統的な生活様式のほとんどが貧しいと見えるのは、ある意味、当然のことのように思われます。

そもそも私たちが伝統的な生活様式の中に見出す美徳の1つは、まさにその貧しさと表裏一体の部分もあるのではないのでしょうか。つまり、私たちが「貧困」の一言で片づけてしまう生活様式の中には、近代文明のように資源を大量消費しない、質素な伝統文化と言えるようなものもあるかもしれません。近代文明とその文化の中にどっぷりつかった私たちは、そういう面での文化の多様性をちゃんと認め切れずに、「貧困」と言って済ませてしまっているだけなのかもしれません。私たちは、一体そういう生活様式を残したいと思っているのでしょうか。それとも本当は残したくないのでしょうか。

このような点については、私自身考えがまとまっておりませんし、この議論が非常に抽象的すぎるということも自覚しております。しかし、伝統文化と貧困の関係について、謝先生が何か思うことがあれば教えていただきたいと思ひますし、また中国の民族学会の中でこういう問題について論じられていることがあれば、教えていただければと思います。以上です。

謝 長谷さんからご質問の1つ目について、活態博物館は、私たちが考えたものです。これと生態博物館との関係は、ほとんど同じです。生態博物館は、その村に因習的な倫理的なものをつくる。そして、その村全体を守るということですね。

活態博物館というのは、雲南の民族の人数の比較的少ないところ、例えば今年は徳昂族。まず、その村に代表性がなければならない。彼らは、電気や現代的なエネルギーを意識的に使うことができます。機械機とか伝統的なものは、彼らが保存できるように私たちはサポートします。政府は、彼らに一定の資金援助を行います。今までのものを保存させていくわけですね。それを私たちは「記憶」と言いますが、昔ながらの生活ができ

るような資金の援助をいたします。例えば村の住宅を改築する場合、できるだけ雲南のもの形を残しながら、中では近代的な生活ができるようにしていくという考え方です。

また、長谷さんからご質問がありました伝習館ですが、伝習館は大切なものだと思います。しかし、なぜ理想化しすぎていると言ったかといいますと、伝習館は、北京から雲南までの民間の最も優秀な歌舞団の人たちを、都市や郊外の閉鎖的なところへ連れてきて、そこで伝習しようとした。文化を選んで、みんなにそれを直接リクエストしてもらおう。そして歌う、踊る。しかし、これはあくまでもカンパによるものです。政府の資金援助もありません。魚は水を離れてほかへ行くと、なかなか生き残ることはできません。歴史的な文化の背景を離れて活動することは大変です。

非常に優秀な人たちですが、資金がないということと、最初は非常に新鮮に思うのですが、時間が長くなるとホームシックにかかり、家族に会いたくなり、家に帰りたくなる。100パーセント閉鎖的なところでそういう活動を続けるということは、私は無理だと思います。ですから、結局、流産してしまいました。

民族民間伝習館を設立した田豊さんの業績は、いろんな意味で貢献は大きかったと思います。今、雲南省の民族文化が世界に出ている。そのPRは田さんがたくさんなされたわけです。例えば楊麗萍という舞踊家ですが、彼女もやはり雲南の印象をつくられました。非常に有名な民間の芸能です。それも田さんが選ばれたものです。ですから、彼は雲南に対して非常に大きな貢献をしてくださったと思います。しかし、彼の背景を離れて雲南にやってきて、閉鎖的なところで生活をなさり、文芸活動をなさったということは、やはり難しいのではないかと思います。

さらにもう1つ、貧困という概念ですが、少し狭いものから見てください。私の言う「貧困」、これはお金だけではありません。大切なことは、経済あるいは教育を受けるという意味での条件です。雲南省は、いろんな気候があります。例えば山の少数民族の生存条件は、非常に厳しいものがあります。彼らは、経済的な条件のよいところに住んでいる人たちに比べたら、物質的に貧しいと言わざるを得ません。でも、彼らは、自分たちの心の文明、精神の文明を持っています。そういう意味で心の豊かな人たちです。ですから、こういう面から見れば、先ほど長谷さんもおっしゃいましたように、徳宏州のタイ族の労働交換、お互いに助け合う、今の雇用の問題、これらが密接にかかわると私も思います。

経済的には貧しい。あるいは生存条件が厳しい。社会も国も支援をしなければなりません。彼らに物質的な生活を提供し、彼らの生活を改善しなければなりません。しかし、彼らが自分たちの文化、自分たちの文明を守るという意味では、彼らの文化、文明を尊重しなければなりません。強制的に彼らに「ああしろ」「こうしろ」ということは言えません。こう言うのは矛盾があるとは思いますが、要するにバランスをとらなければならないと思います。

苗族银饰的文化赏析

李 黔 滨
贵州省博物馆

苗族是一个在历史上自北而南不断迁徙的民族。在时间上这是一次自蚩尤兵败涿鹿后历时数千年的迁徙，在空间上这是一次自黄河流域至中国南疆延伸到东南亚途经万里的迁徙。由此，形成了苗族迄今以长江水系、珠江水系、湄公河水系、红河水系为主要聚居地的分布格局，同时也因山地环境的封闭制约所导致的分散发展，形成了苗族内部林立的支系。据不完全统计，苗族支系达两百余。由于苗族素有“认衣服开亲”的习俗，即实行以相同服饰为界定姻亲集团的支族内婚制，苗族服饰因此而丰富多彩，而作为服饰的构成元素苗族银饰也因此以品种众多，流行面积广、单身饰银件数多体量重，成为中华众少数民族中的饰银大族。

综合文献及考古资料的显示，可以断定，苗族银饰始於明代：其一，明代以前的文献史籍中没有关于苗侬民族佩戴银饰的记载；其二，唐宋时苗族已大量迁居贵州，但迄今境内尚无苗族银饰的出土发现；其三，在记载五溪蛮及苗侬习俗的史籍中，惟宋代朱辅《溪蛮丛笑》有载：“山侬婚娶聘物以铜与盐”，足见明代以前，居住在五溪一带的苗族尚视铜为贵重金属。随着明代贵州建省（1413年），白银以货币形式流进苗疆，改变了苗族社会以货易货的传统贸易方式，苗族以银为饰的记录开始见载史籍，如明郭子章《黔记》“富者以金银耳珥，多者至五六如连环”，以及明嘉靖《贵州通志》等重要的贵州地方文献的相关记载。清代史籍记载渐多。应该说，清代是苗族银饰普及和流行的时期，奠定了苗族银饰迅猛发展的重要基础。当代特别是二十世纪八十年代，苗族银饰发展至巅峰时期，代为苗族标志性的文化符号。

苗族银饰主要分布在长江水系的清水江流域、澧阳河流域、沅江流域及珠江水系的都柳江流域。其他地区虽有零星分布，但数量不大。分布区域内饰银的多寡受区域物产经济的影响，愈是富庶之地饰银之风愈盛。

苗族银饰种类多，品种齐，从头到脚，皆有专门饰品。其可分为头饰、胸颈饰、背饰、腰饰、衣饰、手饰六大类。个别地方有脚饰。头饰的品种有银角、银扇、银帽、银冠、银围帕、银飘头排、银发簪、银顶花、银网链、银花梳、银耳环、银童帽饰；胸颈饰的品种有银项圈、银排圈、银压领、银胸牌、银胸吊饰、银围腰链；背饰的品种有银背吊、银背牌；腰饰的品种有银腰带、银腰吊饰；衣饰的品种有银衣片、银泡、银响铃、银衣扣；手饰的品种有银手镯、银手链、银戒指；个别地方儿童还有戴脚镯的习俗。

自明代进入苗族社会的银饰，经历了一个民族化同时又是取舍和创新的过程。在这一过程中，群体的需求是艺术创作的准则和动力，群体的认同是艺术创作能否实现的至高裁

决。特别是清末时期苗族内部出现银匠之后，为使银饰符合民族审美，满足银饰作为民族文化载体的需求，苗族银匠在构图上向妇女的刺绣纹样学习，如苗族刺绣中的“求子图”、“官人骑马纹”、“蝶纹”、“鱼纹”等被大量引为银饰构图。这些构图或纹样，实际上是苗族妇女通过针线在服饰上表述的关于生育、宗教等方面的祈愿，更能迎合穿戴者的需要，也更能代表民族整体的文化诉求。苗族银饰的民族化进程因此获得了极大的加速因素。

苗族很早便有“以钱为饰”的习俗，这一习俗在银饰出现后也仍然保留着并同银饰的流行并行不悖。更重要的是，通过“以钱为饰”所流变的夸富心理，自始至终都影响着苗族银饰的价值取向，在表象层面上催生了苗族银饰的三大艺术特征，即以大为美，以多为美，以重为美。

西江式银角是苗族银饰追求以大为美的典型之作。苗族银角分为三种类型，即西江式、施洞式、排调式。西江式最大，西江式银角两角分叉，宽约85厘米，高约80厘米，银角无论宽度或高度均达到佩戴者身高的一半。姑娘们佩戴时还要在银角的顶端插上鸡羽，鸡羽随风摇曳，银角更显高耸。其实，堆大为山，呈现出巍峨之美，水大为海，呈现出浩渺之美。由此可见，夸富心理反映在苗族银饰的以大为美的审美取向是符合造型艺术规律的。流行于都柳江苗族地区的银排圈，是苗族银饰中以重为美的代表之作，黎平苗族鍍花排圈讲究愈重愈好，最重的由十三支组成，银排圈由小至大，环环相扣，重愈8斤。苗族银饰以多为美的艺术特征也是十分惊人的，耳环多者三四只，叠垂及肩；手镯六七对，几近至肘；胸前项圈十余，尤嫌不足，有些地方还要加戴胸牌之类饰品。清水江流域的银衣，组合部件多达数百，重叠繁复。苗族以多为美的艺术取向，构筑了苗族银饰最动人心弦的特殊魅力，即一种极具个性的繁缛之美。

苗族银饰在其民族化过程中，对中原文化传统元素进行了合理的选择及保留，从而使苗族银饰在呈现出鲜明个性的同时，又展示出中原银饰艺术的古典色彩。流行于黄平县的谷陇式银铃多坠项链，在构成银链坠的兵器造型中，有些是苗族地区不见使用兵器，显然是沿袭他族之作。以兵器为饰的“五兵佩”流行于汉代，是当时中原地区的避邪之物。苗族银饰一方面对这一形制进行保留，另一方面又对其进行改造，增加了牙签、挖耳勺、镊子等实用性坠物，因此“五兵佩”吊饰在苗族地区通常被称为“牙签吊”。又如黄平县谷陇式银帽，其设计充分吸收了古代“步摇”之长。步摇出现于战国早期，《释名·释首饰》：“步摇，上有垂珠，步则摇动也”。呈半球状的谷陇式银帽，其上凡银花、银雀、银虫均用簧状银丝同帽体相连，进行颤枝处理。戴帽人举手投足，则银花摇曳、满头颤动。再如汉族地区的长命锁，它的原型体量不大，造型简单，正面篆刻上“长命百岁”的字样，原本的主要意图的祈愿子女平安成长，避邪纳吉。长命锁流入苗族社会后，首先体量膨胀到令人瞩目的地步，变成流行于清水江流域、沅江流域的银压领；其次造型趋于复杂，其上雕龙凤、饰麒麟，迭层镂空，如施洞式银压领及西江式银压领。第三，佩戴对象也由儿童变成了进入青春期的少女。饰物原先的祈愿意图萎缩，夸耀及装饰的意图跃登主宰地位，致使饰件所具有的文化内涵发生了本质的变化。苗族银饰对中原文化元素的保留众多，举不

胜数。正是因为如此，苗族银饰才得以跨越族际，得到中华各民族的欣赏与青睐，成为能够呼唤起人们对古代首饰的历史情结的当代饰品。

环境对苗族银饰的造型也有着很重要的作用，苗族银饰的纹样和造型，很多都同特定山地环境的动植物有关。台江施洞苗族的编丝手镯仿形小米穗编制而成，俗称“小米镯”，其不仅造型逼真，而且利用编丝手法把小米穗那种毛茸茸的肌理效果也表现出来。流行於剑河县柳富式三角折叠银片项圈，俗称“千叶项圈”，造型上采用化繁为简的手法，在环状银片上，利用压痕，营造出叶片相连的装饰效果。山区多雀鸟，鸟纹是苗族银饰的主题材之一。流行於清水江流域的各类银花簪、银花梳、银花帽，很多都是以雀鸟为主要造型的。流行於都柳江流域丹寨县的雅灰式银角，对角的处理则更多是以鸟羽为仿形来完成艺术造型的。总而言之，取材生活，师从自然是苗族银饰艺术造型的一大特性。

愈是没有文字的少数民族，由於表达形式相对受到限制，其发生在生活中的艺术造型及纹样绘形，作为民族文化心理的对应性就愈强。苗族银饰毫不例外，它具有记录和叙事的功能，以拥有丰富内涵而成为无字文明的物化载体。

苗族是一个奉行原始宗教的民族。苗族服饰中龙纹极多，有牛龙、鱼龙、羊龙、蜈蚣龙、蚕龙、马龙等，反映银饰上则有蛇龙、鱼锹龙、牛鼻龙等。任何动植物的“龙化”，都源自苗族奉行万物有灵的宗教观。苗族银饰中出现龙纹多为腾飞跃状，同主流社会的“汉龙”在绘形上有着明显的承继关系，或系抄袭而来。但就其文化内涵而言，同汉族龙却大相径庭。戴在台江县施洞镇每一位苗族女性头上的施洞式龙头银簪，就源自当地一个生动的传说，传说中的龙是一条为祸清水江两岸的恶龙，是一条曾因作孽而丧命於凡人之手的恶龙，但又是一条死后翻然悔悟造福人类的龙，于是，当地苗族化恨为爱，用每年一度的龙船节和女性服饰中的龙纹来纪念它。这同汉族观念中毫无瑕疵不得亵渎的龙是截然不同的。

银饰在苗族社会中的巫教功能是清晰可见的。在宗教设施极度缺乏的苗族地区，服饰中的纹样或造型往往弥补性的成为巫教意识的表达，而且，由於终日穿戴於身，无疑也体现为一种日常活动中的巫教行为。苗族笃信凡是锋利的物体诸如荆棘、铍口都具有驱邪的作用，因此，流行在丹寨县的雅灰式银雕花木梳，正是以其梳背上的圆锥造型来，以此庇佑佩戴者驱邪纳吉。流行於丹寨县一带的银胸牌为当地女性的嫁妆之一，是当地妇女出嫁后须终生佩戴的饰物。装饰仅为佩戴银胸牌的一方面用意，企望银胸牌上的菩萨保佑自己一生平安才是更为重要的另一方面的用意。流行於当地的银菩萨花梳也表达了同样的企望。榕江、丹寨同处月亮山地区，居住在当地的苗族亦属同一分支，由於所居环境山高地陡，鬼神文化相对发达，在银饰上反映出更多的巫教意识也是自然而然的。展品中的谷陇式银腰带、舟溪式银背牌也无一不是以众多的菩萨造型来表达了这一祝愿。

清水江流域的苗族银装是令苗族银饰声名鹊起的代表性服饰，共计两百件以上的银饰完成了这一令人惊叹的组合。如此银光熠熠、雍容华贵的银装设计首先出自於夸富心理的支配，再就是服从了当地婚恋习俗的需求。清水江流域多数苗族地区设有芦笙堂，节日时，男性吹笙於前，姑娘们跳舞於后。按习俗规定，只有那些进入青春期及尚未婚嫁的姑娘才

有资格参加，这实际是姑娘步入青春期讯息的第一次社会公告，是未嫁姑娘在围观的众后生前的第一次求偶性的亮相，是姑娘走向新的人生之旅的起点。一身炫目的银装，不仅是为姑娘增美添色的靓妆，更是姑娘走进芦笙堂的入场券。按习俗规定，没有银装穿束的姑娘，无论模样多么俊俏，都没有入场资格。而银饰的多少则是姑娘家富庶程度的展示，无疑将成为姑娘谈婚论嫁的重要筹码。正因为如此，清水江流域芦笙堂的一身银装最重的达二十余斤，如此令人瞩目的重量完全是服从婚恋习俗的需求，也正是社会功能对苗族银饰的影响和作用的反映。如今的芦笙，不少银妆女童也欢然入内，但这同带有成人礼性质的进入是有着根本区别的，它仅仅是反映出苗族银饰夸富功能的增强。

苗族银饰同时又是姑娘的嫁妆之一。苗族家庭的银饰首先会集中使用，供家庭内的女儿依次进入芦笙堂，完成求偶性的成人亮相。待所有女儿都已出阁后，母亲除留下少数必需的手镯、耳环、插簪外，其余平均分配给众女儿。业已成为妇人的众女儿则根据自己家庭的经济情况，在此基础上再行添置，完成孙女进入青春期的银饰要求，循环反复，世代沿袭。苗族有这样一种说法：女儿分不得房子，分不得地，得一个银角也算牵得一头牛走。

当代的苗族银饰皆出自苗族银匠之手。由於对银饰的大量需求，苗族地区出现不少“银匠村”，即村寨中多数人家以银饰加工为业，且代代相传。长江水系的沅江、清水江流域、澧阳河流域的苗族银饰以制作精湛细腻见长，珠江水系的都柳江、融江流域的苗族银饰则造型笨拙，风格粗犷，两者在风格上区别十分明显。由於贵州并非白银产地，苗族银饰在民国前主要取材银锭。进入民国时期后，长江水系以大洋（袁大头）为主材，珠江水系则以广东贰毫为主材。银饰的含银度因取材银币的原因，长江水系银饰的纯度稍高，加工制作也因此相对精细。

苗族内部最初的银匠多由铁匠改行，即挟铁匠技艺拜汉族银匠为师，如云雾山地区的银饰加工村迄今还沿用“打铁寨”的老地名。历史上，苗族银匠业的传授有传子不传女，传内不传外的规定，或无子嗣者，则择侄辈为徒。现在对外授徒的逐渐增多。

银饰的加工，完全以家庭作坊内的手工制作完成。根据需要，银匠先把白银制成银片、银条、银丝，利用模压、精刻及錾镂、编织、焊接等工艺，制成精美制品。然后要“洗银”，即给制品塗硼砂水，用木炭火烧去附垢，再放入紫铜锅内，用明矾水煮沸，清水净洗，铜刷清理，一件银饰才告完成。“洗银”不仅针对新产品，也适用於年久氧化变色的老饰品，每隔几年，苗族都会把自家的银饰送去银匠处“洗银”，便之焕然一新，熠熠生光。

迄今，苗族银饰在三个方面存在变异现象。其一，多数苗族地区的饰品材质已非白银，而系白铜制品。白铜因其颜色似银且价廉而颇为流行，加上苗族银匠在技术上解决了过去白铜不能精细加工及不能镀银的难题，白铜饰品大有取代之势。其二，银饰在造型和纹样上出现变化。一部份新款银饰如施洞地区的龙头耳环，已经得到群体认可，成为当地苗族妇女的垂戴物，这是苗族银饰的发展与创新；还有大量的银饰从而迎合市场的需要出发，造型夸张怪异，虽然打着苗族银饰的旗号，但充其量也只是白铜工艺品而已。其三，银匠村的解体。黔东南境内过去有不少“银匠村”，著名的银匠村如控拜，寨中202户人家，263

人以银饰加工为副业，农闲时节，寨中叮噓之声不绝於耳，炭火炉烟荡然於户，一派繁忙景象。但现在村寨中的银匠为追逐市场，几乎悉数迁居中心城市区。这实在是文化遗产的一大损失，同时，也不利於苗族银饰民族个性的保真和发展。

苗族银饰是人类服饰文化宝库中一朵个性鲜明，魅力十足的奇葩，是多元文化中一笔重要的文化遗产，值得人们去关注它，解读它，保护它。

参考书目：

1. 潘空智《苗族古歌》贵州人民出版社，1997年。
2. 贵州省博物馆考古组《贵州清镇平坝石棺葬》，原载《考古与文物》1982年第3期。
3. 贵州省博物馆《贵州清镇宋墓清理简报》，原载《文物》1960年第6期。
4. 《苗族简史》贵州人民出版社，1985年。
5. 明郭子章《黔记》卷59(诸夷)第35册，贵州省图书馆藏复制油印本。
6. 明嘉靖《贵州通志》卷3(风俗)，第3册，上海图书馆藏影印抄本。
7. 清陆次方《峒溪纤志》、清方亨咸《苗俗纪闻》、清檀萃《说蛮》，《小方壶斋輿地丛钞》第11帙。
8. 拙著《苗族银饰·概述》文物出版社，2000年。
9. 拙文《中国贵州民族民间美术全集·银饰卷前言》，贵州人民出版社2007年。

ミャオ族銀飾りの文化賞析

李 黔 濱

訳：岡 晋

ミャオ族は歴史上、絶え間なく北から南へ移動した民族である。時間的には、蚩尤（中国神話に登場する神）が涿鹿（現、河北省涿鹿県一帯）で敗れてからの数千年にわたる移動、空間的には黄河流域から中国南方辺境、さらには東南アジアへと至る長大な道のりの移動である。ミャオ族は現在に至るまでに長江、珠江、湄公（メコン）河、紅河の各水系を主要な居住地とする分布域を形成し、同時に山地の閉鎖的環境という制約によって分散して発展した。そのため、ミャオ族は内部に多数の支系（サブ・グループ）を形成することになった。完全な統計ではないが、ミャオ族の支系は200余にも及ぶ。

ミャオ族はもともと「認衣服開親」の習俗があった。すなわち、同じ衣装を姻戚関係の目印として支族内での婚姻を進めてきた。そのため、ミャオ族の衣装は豊富かつ多彩で、衣装の構成要素としての銀飾りも非常に種類が多く、広まった地域も広い。また、1人分に用いられる銀飾りの数と重さがかなりある。そのため、中国少数民族の中でも、ミャオ族は銀飾りを用いる屈指の民族となった。

文献と考古資料から明らかな点を総合すると、ミャオ族の銀飾りは明代にはじまったと断定することができる。その根拠として、第一に、明代以前の文献史籍の中には「苗僑民族（ミャオ・ヤオ諸族）」が銀飾りを身に着けていたという記載がない。第二に、唐・宋代には既に多くのミャオ族が貴州に移住しているが、現在までその地域からミャオ族の銀飾りの出土報告が無い。第三に、「五溪蛮」と「苗僑（ミャオ・ヤオ）」の習俗を記載した史籍の中では、宋代の朱輔による『溪蛮叢笑』にのみ、「山僑婚娶聘物以銅與鹽（山僑の結納の品は銅と塩である）」の記載があり、明代以前の五溪一帯に居住していたミャオ族がまだ銅を貴重な金属と考えていたことは明らかである。明代の1413年に貴州に省（承宣布政使司）が置かれると、銀を貨幣とする経済様式がミャオ族地区に入り、物々交換からなるミャオ族社会の伝統的な貿易形態を大きく変えた。ミャオ族が銀を飾りとする記録もこの時期の史籍から現れはじめる。例えば、明代の郭子章が著した『黔記』の「富者以金銀耳珥，多者至五六如連環（金持ちは金銀で耳飾りを作り、多いものでは5つ6つに至り、連なって環のようであった）」や、明代の嘉靖『貴州通志』など、貴州の重要な地方文献にも関係する記載がある。

清代の史籍には更に多くの記載が見える。清代は、ミャオ族の銀飾りが普及した時期で、ミャオ族の銀飾りが猛烈に発展する重要な基礎を築いた時期と言える。現代、とくに20世紀80年代に、ミャオ族の銀飾りは発展のピークに達し、ミャオ族を表わす文化的

な記号となった。

ミャオ族の銀飾りは主に長江水系の清水江、澗陽河、沅江の各流域と、珠江水系の都柳江流域に分布する。その他の地区では疎らな分布がみられるものの、その数は多くない。分布区域内で銀飾りを用いるその多寡は、物産経済の影響を受けており、豊かな土地であればあるほど銀で飾る風習は盛んである。

ミャオ族の銀飾りは種類が多く、製品がそろっており、頭から足までみな特徴ある装飾品である。それは大きく頭飾り、首・胸飾り、背飾り、腰飾り、衣飾り、腕飾りの6つに分類することができる。まれに脚飾りがある地域もある。

頭飾りには銀角（角や羽を模した頭飾り）、銀扇（扇状の頭飾り）、銀帽（帽子状の頭飾り）、銀冠（冠状の頭飾り）、銀圍帕（頭巾状の頭飾り）、銀飄頭排（筏状の形をした頭飾り）、銀髮簪（簪状の頭飾り）、銀頂花（先端に花の付いた頭飾り）、銀網鏈（鎖状の頭飾り。簪の一種）、銀花梳（模様が施された櫛状の頭飾り）、銀耳環（イヤリング）、銀童帽飾（子どもが被る頭飾り）がある。また、首・胸飾りには銀項圈（ネックレス）、銀排圈（硬い輪で造られたネックレス）、銀圧領（首から下げるやや大きめの半円状の装飾品）、銀胸牌（長方形あるいは半円形のネックレス）、銀胸吊飾（胸部の吊し飾り）、銀圍腰鏈（帯状の鎖の胸飾り）がある。さらに、背飾りには銀背吊（吊す形状の背飾り）、銀背牌（銀片を繋ぎ合わせた背飾り）があり、腰飾りには銀腰帶（ベルト）、銀腰吊飾（腰用の吊し飾り）がある。衣飾りには銀衣片（凹凸で模様を描いた大小様々な銀片）、銀泡（銀板に泡状の飾りがほどこされたもの）、銀響鈴（鈴）、銀衣扣（ボタン）があり、腕飾りには銀手鐲（腕輪）、銀手鏈（鎖状の腕輪）、銀戒指（指輪）がある。また、まれに子供が脚輪を身に着ける習俗もある。

明代にミャオ族社会に入った銀飾りは、民族化すると同時に取捨と創造の過程を経験した。この過程において、共同体の人々の需要は芸術作品の基準と原動力であり、人々のアイデンティティは芸術作品が実現できるかどうかの重要な指標であった。とりわけ清代末期にミャオ族内部で銀細工職人が出現してからは、銀飾りの使用は民族の審美感と合致し、民族文化としての銀飾りは身に着ける人の需要を満たした。また、ミャオ族の銀細工職人は構図から見れば、婦女の刺繍文様から学んだ。例えば、ミャオ族の刺繍の中の「求子図」、「官人騎馬紋」、「蝶紋」、「魚紋」などは銀飾りの構図として大量に引用された。これらの構図や文様は、実質的には、ミャオ族婦女が生育や宗教的な祈願を衣装の上に針と糸で表現したものであり、身に着ける人の需要に合わせることも、民族全体の文化的要求を表すこともできた。ミャオ族の銀飾りは民族化の過程で、極めて大きく歩みを速める条件を得た。

ミャオ族は古くから「以錢為飾（錢を飾りとする）」の習俗があり、この習俗は銀飾りの出現後もそのまま残り、銀飾りの流行にも矛盾しなかった。さらに重要なのは、「以錢為飾」を通じて、移り行く富を誇る心理がミャオ族の銀飾りの価値の方向性に終始影響

しつづけ、表象レベルでは、銀飾りに対する「大きいものは美しい」「多いものは美しい」「重いものは美しい」という3つの芸術的特徴を生み出したことである。

西江式の銀角はミャオ族の銀飾りの「大きい」ことで美しさを追求した典型的なものである。ミャオ族の銀角は3種類にわけることができる。即ち西江式、施洞式、排調式である。西江式は最も大きく、2つの角状の幅は約85cm、高さは約80cmで、広さや高さを問わず、平均すると、身に着ける人の身長に達する。未婚女性たちは身に着ける際に、銀角の天辺にさらに鶏の羽を挿す。この鶏の羽は風で揺らめき銀角をさらに高く見せる。実際、大きく積みあがれば山になり、高くそびえる美しさを表し、水が大きく広がれば海になり、茫洋たる美しさを表す。このことからわかるのは、銀飾りに対する「大きいものは美しい」という審美的傾向が反映された富を誇示する心理と、造形美術の法則が一致することである。

都柳江流域のミャオ族地区で流行している銀排圈は、ミャオ族の銀飾りの中でも「重いものは美しい」とする代表的なものである。黎平(県)ミャオ族の鑿花排圈(模様彫られた環状のネックレス)は重ければ重いほど良いと言われており、最も重いものは13個から構成されている。銀排圈は小さいものから大きいものまで輪が重なり合い、その重さは4kgを超える。

ミャオ族の銀飾りの「多いものは美しい」とする芸術的特徴はとても驚異的である。耳輪(イヤリング)の多いものは3、4個が連なって肩まで垂れさがり、腕輪は6、7対あって肘付近まである。また、胸の部分を装飾する項圈(ネックレス)は10余あって、それでも足りずに、いくつかの地方ではさらに胸牌(メダルの類)を飾りつける。清水江流域の銀衣は、数百にも及ぶ部品を組み合わせ、その重なりは複雑である。ミャオ族の「多いものが美しい」とする芸術的傾向は、ミャオ族の銀飾りの最も人の心を打つ特殊な魅力を構築している。それは、極めて個人的で、手が込んだ美しさである。

ミャオ族の銀飾りはその民族化の過程で、中原文化の伝統的な要素を合理的に選択、保持してきた。それにより、ミャオ族の銀飾りは鮮明な個性を呈すると同時に、中原地域の銀飾り芸術の古典的色彩も明らかに示している。黄平県でみられる谷隴式の銀鈴多墜項鏈(銀鈴を多く下げたネックレス)では、銀鏈墜(鎖状の下げ飾り)を構成する武器を模ったものの中に、いくつかミャオ族地区で用いられていない武器が見て取れる。これは明らかに他の民族のものを踏襲している。武器を飾りとする「五兵佩」は漢代に流行した、当時の中原地域の魔除けであった。ミャオ族の銀飾りは一方ではその形と構造を保ち、他方ではそこに改良がなされて、銀の爪楊枝と耳搔き、毛抜き等の実用的な下げ飾りが加えられた。そのため「五兵佩」の吊し飾りは、ミャオ族地区では通常「牙籤吊(爪楊枝吊し)」と呼ばれている。

また、黄平県の谷隴式の銀帽は、そのデザインに古代の「步搖(婦人の頭飾り)」の長所が充分に受け入れられている。步搖は、戦国時代早期の『釋名・釋首飾』に「步搖、上

有垂珠、歩則搖動也（歩搖とは、上から珠が垂れており、歩くと揺動する）」として現れる。谷隴式の銀帽は半球状を呈し、その上には一般的に、銀花、銀雀、銀虫が均一にリード状の銀の糸を用いて帽子本体と繋がり、その枝が揺れるようになっている。帽子を被る人が体を動かせば、銀花は揺らめき、頭全体が小刻みに揺れうごく。

このほか漢族地区の長命鎖（小児が付ける錠前形の首飾り）は、その原型は重くもなく簡単な形で、正面に「長命百歳」の字が彫刻されており、もともと子女の平安な成長を祈願し、魔を除けて吉を授かる意図がある。長命鎖がミャオ族社会に流入してから、まず重量が増え、人を驚かせるほどまでに達し、清水江や沅江流域で流行している銀圧鎖に変化した。次に、形は複雑になり、龍や鳳凰が彫られ、麒麟が飾られ、しばしば透かし彫りも重ねられた。例えば、施洞式や西江式の銀圧鎖がそうである。そして最後に、飾りを身に着けるのも、子供から思春期の少女へと変化した。飾り物のもとの祈願の意図は薄くなり、人びとに見せるための装飾の意図が中心的な位置を占めるようになり、結果的に飾り金具がもつ文化内容に本質的な変化が発生した。ミャオ族の銀飾りは中原文化の要素を非常に多く留めており、そのことは枚挙にいとまがない。だからこそミャオ族の銀飾りは、民族の境を越えて、中国の各民族から鑑賞と親しみが得られ、人びとを古代の首飾りの歴史の情緒へと誘うことのできる現代の装飾品になったのである。

周囲の環境も、ミャオ族の銀飾りの形に重要な影響を及ぼしている。ミャオ族の銀飾りの紋様と形は、特定の山地環境の動植物と関係がある。台江（県）施洞（鎮）のミャオ族の糸で編まれた腕輪は、粟の穂を模して編んであり、俗に「小米鐲（粟の腕輪）」と呼ばれている。それは形が本物そっくりであるばかりか、糸で編む手法を利用して粟の穂のあの細かい毛のきめの細かさまで表現している。剣河県で流行の柳富式の三角折疊銀片項圈（折り畳み式のカード状のネックレス）は、俗に「千葉項圈（葉が連なったネックレス）」と称されている。形の上では複雑なモノを簡単に表す手法を取り入れ、環状の銀片に圧力痕を用いて、葉の連なり合う装飾効果を造りだしている。山区には小鳥が多く、鳥の紋様はミャオ族の銀飾りの中で主要な題材の1つである。清水江流域で流行の銀花簪、銀花梳、銀花帽といった頭飾りには、小鳥を主要な形とするものが多い。都柳江流域の丹寨県でみられる雅灰式の銀角は、角にさらに鳥の羽を付けて芸術的な形を作っている。要するに、生活の様々を取り入れ、自然を師とすることは、ミャオ族の銀飾りの芸術的造型の1つの大きな特徴といえる。

文字の無い少数民族であればあるほど、表現様式が受ける相対的な制限によって、生活の中から発生する芸術的な造型や飾りの紋様制作が、民族文化の心理的対応としますます強くなる。ミャオ族の銀飾りはほとんど例外なしに、記録と叙述の機能を持ち、豊富に抱え持つ内容によって、無文字文化における重要な伝達者となっている。

ミャオ族は原始宗教を奉じる民族である。ミャオ族の服装の中で、龍紋は極めて多く、牛龍、魚龍、羊龍、ムカデ龍、蚕龍、馬龍等がある。銀飾りには蛇龍、魚鯨龍、牛鼻龍

等が反映されている。いかなる動植物の「龍化」も、全てがミャオ族の信じるアニミズム的な宗教観に由来する。ミャオ族の銀飾りの中に出現する龍紋の多くは飛び翔る形状で、これは中心地域の「漢龍（漢族の龍）」と図柄上では明らかな継承関係があるか、あるいは関連するモノを踏襲してきた。しかし、その文化の内容について言えば、漢族の龍とは大きな距りがある。

台江県施洞鎮のミャオ族女性が頭の上に被る施洞式の龍頭銀簪（龍頭模様が施された簪）は、現地の生き活きとした伝説に由来する。伝説中の龍は清水江兩岸に禍をもたらす悪龍で、かつて罪業をなしたために人々の手で殺された。しかしその死後、にわかには悔い改めて人類に幸福をもたらす龍となった。そこで当地のミャオ族は恨みを愛情に変えて、毎年一度の龍舟節と、女性の服装の中の龍紋で龍を記念した。これは漢族の観念上にある少しも欠点のない冒瀆の許されない龍とは明らかに異なるものである。

ミャオ族社会では、銀飾りの呪術的機能が明らかに見て取れる。宗教施設の極めて乏しいミャオ族地区では、服装の紋様や形が往々にして呪術的な意識の表現を補っている。その上、一日中身に着けることで、間違いなく日常生活の中の呪術的行為を表している。ミャオ族の篤い信仰はおおよそ、茨や鋤の刃のように鋭利なモノが邪気を払う役割を備えており、そのため、丹寨県でみられる雅灰式の銀雕花木梳（銀で模様が彫られた木櫛）は、まさに櫛の裏にある円錐の形でもって、身に着けた人の邪気を払い、吉を授ける加護がある。丹寨県一帯でみられる銀胸牌は現地の女性の嫁入り道具の1つで、婦女が嫁に行ってから終世身に着けなければならない装飾品である。銀胸牌を身に着けて装飾することはこの装飾品の1つの意味でしかなく、銀胸牌の菩薩に、身に着ける人の一生の平安を期待することこそ、この装飾品のより重要な意味である。当地で流行の銀菩薩花梳（菩薩が彫られた櫛状の頭飾り）にも同様の願いが表現されている。榕江県や丹寨県はともに月亮山地区にあって、そこに居住するミャオ族もまた同系統に属している。彼らは、険しい山地の住環境のため鬼神（神霊）文化が比較的発達しており、銀飾りにも更に多くの呪術的な意識が反映しているのは自然である。谷隴式の銀腰帶（ベルト）や舟溪式の銀背牌（背飾り）もそうだが、多くの菩薩を模ることでもってこの期待を表現していないものは1つとしてない。

清水江流域のミャオ族の銀衣装は、ミャオ族の銀飾りの名声を世に知らしめる代表的な衣装で、合計200以上の銀飾りは、人を驚愕させる組み合わせを作り上げた。このような、銀がきらきらと輝くゆったりと豪華な銀装の設計は、はじめは富を誇る心理から生じ、そして当地の結婚と恋愛の習俗の需要に従っていった。清水江流域の多くのミャオ族地区には蘆笙堂があって、節句の時、男性が前で伝統的な楽器の蘆笙を吹き、娘たちが後ろで踊る。習俗の規定によれば、青春期に入ってまだ結婚していない娘たちにだけ、参加する資格がある。実際にこれは娘が青春期に入ったという知らせをはじめて社会的に公告するものであり、未婚女性が大勢の観衆の前で、生まれてはじめて公然と結婚相

手探しをするものであり、娘たちが新しい人生の旅に出向く起点でもある。全身が眩い銀装は、ただ未婚女性の美しさを増幅させる衣装であるのみならず、未婚女性が蘆笙堂に行く際の入場券でもある。習俗の規定によれば、銀装を身につけていない娘は、身なりがどんなに素晴らしくても入場資格はない。そして、銀飾りの多さは、未婚女性の家の財力の程度を表し、疑いなく女性が嫁ぐ際の重要な手形となる。まさにこうしたことから、清水江流域の蘆笙堂における女性の全身の銀装は、最も重いもので10kg余もある。この驚くべき重さは、結婚と恋愛の習俗の要求に応じたものであり、まさしくミャオ族の銀飾りの影響と作用に対する社会的機能の反映でもある。現在の蘆笙堂には、多くの銀装した女兒も喜んで入るものの、これは成人儀式的性格をもった入場とは根本的に区別があり、ただ単に富を誇るミャオ族の銀飾りの機能の強さを反映しているにすぎない。

ミャオ族の銀飾りは、同時に未婚女性の嫁入り道具でもある。家庭の銀飾りは、はじめはまとめて使用し、順番に蘆笙堂に入る自分の娘たちに提供して、結婚相手を探している成人であることを公表させる。すべての娘が嫁に行くのを待って、母親は数少ない必需品である腕輪、イヤリング（耳輪）、簪を除いた全ての銀飾りを娘たちに均等に分ける。すでに婦人となった娘たちは、自分の家の経済状況に応じてその基礎の上にさらに買い足して、自分の娘が青春期の時に必要な銀飾りを準備し、繰り返し引き継いでいく。ミャオ族には「娘は、家を分けることができず、土地を分けることができないが、1つの銀角があれば一頭の牛を引いて行くことができるに等しい」という諺がある。

現代のミャオ族の銀飾りはみなミャオ族の銀細工職人の手によるものである。銀飾りに対する大量の需要によって、ミャオ族地区では、村中の多くの家庭が銀飾りの加工を職業とし、代々それを引き継ぐ「銀匠（銀細工職人）村」が数多く出現した。長江水系の沅江や清水江流域と、滎陽河流域のミャオ族の銀飾りはきめが細かく巧みに造ることに長けており、珠江水系の都柳江や融江流域のミャオ族の銀飾りは無器用な形で荒々しい特徴があり、両者の特徴の違いは明らかである。貴州は銀の産地ではないため、中華民国以前のミャオ族の銀飾りは主に馬蹄銀から採取していた。

中華民国時代に入ってから、長江水系では袁世凱の横顔が入った一圓銀貨を主な材料とし、珠江水系では「廣東貳毫」（二角銀貨）を主な材料とした。銀飾りに含まれる銀の量は、材料である銀貨が原因で、長江水系の銀飾りの純度はやや高く、加工製品もそのために比較的精細なものになっている。

ミャオ族の最初の銀細工職人は、多くが鉄細工職人からの転業であったため、鉄細工職人の技巧を身につけており、漢族の銀細工職人を師と仰いでいた。雲霧山地区の銀飾りの加工村のように、現在でも「打鉄寨」という古地名はまだ用いられている。歴史上、ミャオ族の銀細工職人の技の伝授は、男子に伝えて女子には伝えず（内に伝えて外に伝えない）という決まりがあり、跡取りがいないものは、父方の甥を弟子とした。現在では外部に伝授する人が徐々に増えている。

銀飾りの加工は、全てが家庭を仕事場として、手作業でなされる。需要に応じて銀細工職人は、はじめに銀を銀片、銀条(棒状)、銀糸に加工し、鑄型や、精密な彫刻、編み、溶接などの技術を用いて精巧で美しい製品をつくる。その後、「洗銀」即ち、製品に硼砂水を塗って、木炭であぶって汚れをとり、さらに純度の高い銅の鍋の中に入れ、明礬水で煮て清水で洗い、銅を徹底的に擦り落として、1つの銀飾りがようやく完成する。「洗銀」は、新しい製品に対してだけではなく、時間が経って酸化して変色した古い製品に対しても行われる。数年ごとに、ミャオ族はみな自分の銀を銀細工職人に届け、「洗銀」によって銀を一新し輝かせる。

これまでに、ミャオ族の銀飾りは3つの方面において変化があった。第一に、多くのミャオ族地区の飾りは既に銀ではなく、白銅系統のものになっている。白銅は色が銀に似ており、また廉価であるため頗る普及した。さらに、ミャオ族の銀細工職人たちが、かつては出来なかった白銅の精巧な加工や銀メッキ処理の難題を技術的に解決させたため、白銅の装飾品が大いに勢い付いた。第二に、銀飾りの形と模様に変化があった。一部の新しい形の銀飾りは施洞地区の龍頭耳輪のように、既に共同体の人々の間で認可され、当地のミャオ族女性が身につけるものとなっている。これはミャオ族の銀飾りにおける発展と創造である。その上、大量の銀飾りは市場の需要に準じて作られるため、形は奇怪さが誇張されており、ミャオ族の銀飾りの看板を掲げていても、白銅の工芸品にすぎない。第三に、銀細工職人の村の解体である。黔(貴州省)東南部では、かつて銀匠村が少なくなかった。控拜村のような著名な銀細工職人の村では、村に202戸の家庭があって、263人が銀飾りを副業としていた。農閑期には、村の中で金属音が絶えず聞こえ、炭火の煙が家を覆い隠すほど立ちこめ、繁忙な様子であった。しかし、現在は村落の中の銀細工職人たちは市場を追い求めるようになり、ほとんどが中心的な町に転居した。このことは、文化遺産の大きな損失であり、同時に銀飾民族としてのミャオ族の個性の保持と発展に不利となっている。

ミャオ族の銀飾りは、人類の服飾文化の宝庫の中で、個性際だつ魅力十分な傑作である。また、多元的な文化の中で1つの重要な文化遺産であり、人びとがこれに関心を持ち、理解し、保護するにふさわしいものである。

参考文献：

1. 潘空智『苗族古歌』貴州人民出版社, 1997年。
2. 貴州省博物館考古組「貴州清鎮平壩石棺葬」, 『考古与文物』1982年第3期。
3. 貴州省博物館「貴州清鎮宋墓清理簡報」, 『文物』1960年第6期。
4. 『苗族簡史』貴州人民出版社, 1985年。
5. 郭子章『黔記』卷59(諸夷)第35册, 貴州省図書館蔵複製油印本。

6. 嘉靖『貴州通志』卷3(風俗), 第3册, 上海圖書館藏影印抄本。
7. 陸次方『峒溪織志』、方亨咸『苗俗紀聞』、檀萃『說蛮』, 『小方壺齋輿地叢鈔』第11帙。
8. 拙著『苗族銀飾·概述』文物出版社, 2000年。
9. 拙文『中国貴州民族民間美術全集·銀飾卷前言』, 貴州人民出版社, 2007年。

コメント

曾士才氏によるコメント 私自身は、1981年に初めて貴州省を訪ねました。そして94年からは、特にミャオ族の3つの方面、民族観光、民族教育、民族宗教を研究してきました。特に観光資源としてのミャオ族の歌や踊り、慣習、景観などに注目してきました。物質文化そのものについては深く研究してこなかったのが、李館長のご発表は、私にとって大変勉強になりました。

このミャオ族の文化資源としての銀飾りについて、李館長は3つのことを述べておられます。1つは、銀飾りの誕生、形成について。2つ目は、銀飾りの文様、造形について。3つ目は、銀飾りを取り巻く現状あるいは変化です。

第1点ですが、李館長は、ミャオ族の銀飾りの誕生時期について、文献と考古資料から明代に始まったと断定しておられます。また、その分布地域については、物産の豊かな貴州省東南部の長江水系の上流である清水江、澧陽河、あるいは沅江の流域、あるいは珠江水系の上流である都柳江流域であると紹介しておられます。そして、重要な指摘をしておられます。ミャオ族の銀細工職人が出現するのは清代であるという点です。一般に銀飾りというのはミャオ族文化を象徴するものなので、私たちはとかくミャオ族独自のもののように思いがちですが、これは本来は外来文化であった可能性があります。

私の友人で、故郷が李館長の論文にも出てきました清水江上流の台江县施洞鎮出身のミャオ族がいます。彼から聞いた話では、故郷にいるおじさんは銀の商いをしています。毎年、湖南省に行って銀の塊や銀の棒を仕入れてきて、それを地元なり周囲のミャオ族の銀細工職人に売っているそうです。このように銀飾りの原料は、今でも他の地から仕入れている構造が続いていることがわかります。李館長も指摘しておられますように、銀飾りの文様や形状についても、中原文化の伝統的な要素が選択されており、ミャオ族の文化資源としての銀飾りの形成は、ミャオ族文化と中原文化との接触、融合を抜きにしては語れないと思います。

第2点の文様、造形については、私自身はまったく不勉強で、李館長が具体的に事例をあげながら紹介しておられますので、私から特に述べることはありません。昨日開幕した特別展「深奥的中国」に合わせてつくられた図録の何ページでしょうか、雷山県のミャオ族の女性が銀製の頭飾りをしているのは私が撮ってきた写真ですが、あの写真は、12年に1回行われる大祖先祭であるところの「鼓社節」の時に撮ったもので、李館長が紹介されているように、普段のお祭り以外に、そういう大規模なお祭りにおいても欠かすことのできないものになっています。

本当はいろいろ李館長におうかがいしたいところなのですが、むしろ少し私のほうから補足してお話しするようなこともあるのかなと思って、ちょっと述べたいのですが、

清朝の時代にはミャオ族にとって銀は非常に重要な意味がありまして、銀飾り以外では、例えばお墓に遺体を埋葬する時に、「買水銭」あるいは「買水銀」でもいいですが、水を買うお金として銀を遺体のそば、あるいは髪の毛に入れて埋葬するという習慣があったようです。それだけ清代以降というのは、ミャオ族にとって銀は生活の中でなくてはならないものであるということがうかがえるわけです。

李館長が述べている3点目に入ります。ミャオ族の文化資源としての銀飾りの現状と変化について、李館長は、材質の変化、造形・文様の変化、それから銀細工職人の村の解体、あるいは技術継承者を取り巻く環境の変化をあげています。この3つの変化のうち最初の2つ、材質の変化と造形・文様の変化については、あまり驚くには当たらないかと思います。午前中のセッションの中でもどなたかが述べられたかと思いますが、イギリスの歴史学者エリック・ホブズボームが指摘しているように、伝統とは創造されるものである。むしろ変化するものなわけですね。ですから、そのことに関してはあまり心配しなくてもよいと言っていいでしょうか。むしろ伝統にとっては必然的なものかなと思っています。

3つ目の変化である銀細工職人の村の解体についてですが、李館長の論文からは、いま1つ実態がよくわからないので、本来ならおうかがいすべきことだと思っていますが、これが単に職人村が分散していったというだけの話なのか、あるいは銀細工の技術の伝承が途絶える危険性があるということをおっしゃられるのか、ここがよくわかりません。技術の伝承に関して、広西ではどうなのか、雲南についてはどうなのかということをおうかがいしたいと思います。

ちょっと話題を戻しますが、1番目の材質の変化についてです。よく外部の者は、銀が本物で白銅は偽物であると言われる。例えばミャオ族の銀飾りとか織物を売る商売人なんかは、よくそう言うわけですが、村人レベルではどうなのかがむしろ大事なのではないかと思っています。もちろんその家の財力に応じて、銀を使うのか、あるいは白銅を使うのかという違いは出てきていると思いますけれども、村人自身が本物、偽物という概念では必ずしもとらえてはいないのではないかと私には思えます。これは文化の真正性というか、何が文化の本物なのかという議論ともかかわると思います。

話を先へ進めます。銀細工職人の技術の伝承の問題です。私が本来言うべきことではないのかもしれませんが、広西の方も雲南の方も生態博物館構想は最初は貴州から始まっているとよく指摘されていますので、その点に関して補足しながら、私の疑問を申し上げます。

民族文化の保護、発展に貴州省ではいち早く着手したわけですが、1980年代に1つ重要な構想が打ち出されました。それは、「露天博物館（野外博物館）」という構想です。ご存じの方もおいでかと思いますが、かつて貴州省博物館館長も務められた呉正光という人が提唱したものです。この構想を提唱したのは、彼がまだ貴州省文化庁においてに

なった時です。彼は、近代に入り、特に1949年の解放後の大きな社会変化、政治的な変動の中で、貴州の各民族あるいは貴州の地方文化が急速に衰退し、このままでは消滅する危険性もあるという危機感を持ちました。それを積極的に保護する必要を唱えて、この露天博物館という構想を打ち出したわけです。

これは、従来の「重点文物保護単位」という文化財保護の概念とは明らかに異なっています。それは、今はやりの言葉で言うと、非物質文化の保護の可能性が出てきたということです。具体的に言うと、村まるごとを保護しますので、建物や景観だけではなく、そこでの人々の営み、あるいは歌や踊りも保護の対象になるわけです。しかし、この時点でも、非物質文化の保護という意味では、まだ完全なものではなかったと思います。

その後、ここで幾度となく話題が出てますが、90年代の終わりごろからスタートしました生態博物館という構想が一方であり、また一方ではユネスコの世界遺産という概念が中国にももたらされたために、非物質文化の概念が広く浸透しました。私が実際に行っている台江県、あるいは錦屏県といったところでは、小学校や中学校の体育の時間あるいは音楽の時間に、ミャオ族の歌や踊り、あるいは明代に移住してきた漢族のお芝居「漢戯」が子どもたちに伝承されています。このように非物質文化、日本で言うところの無形文化財が次の世代に継承される1つの仕組み、システムが生まれています。

ここで皆さんにおうかがいしたいのですが、こういう段階になってもまだ、例えば先ほどの銀細工職人の技術の伝承とか、機織りの技術の伝承とかいったものを、組織的な取り組みとして保護する動きがあまり見られない。もちろん先ほどの伝習館の動きもありますし、貴州省東南部でもさまざまな民間の動きはあります。しかし、それは個別のボランティアがやったもの、あるいは営利目的にやっているものであり、必ずしも小中学校の体育の時間に学ぶ時間を設けるというような組織的な取り組みではありません。この点について、例えば広西での取り組みはどうなのか、あるいは雲南での取り組みはどうなのか。何かお考えがあるか、現在実際に取り組みをやっているということがあれば、教えていただきたいと思います。

中国は、どんどん無形文化財（非物質文化）に対する手厚い保護を始めていると思いますが、技術の伝承、工芸細工の技術の伝承という面で、まだ私の中ではよくわからないので教えていただければと思います。以上です。ありがとうございました。



「西江式」の銀製頭飾（銀角）。銀製項圈（ネックレス）、圧領（首から下げる装飾品）を付けている。（於：凱里市三棵樹鎮）



台江県施洞鎮の盛装。頭飾、幾重にも下げた首飾りなど、銀製装身具を多くまとう。

〈第三セッション〉

総合コメント・討論

塚田（座長） 本日の最終セッションであります総合コメントと討論に移らせていただきます。国立民族学博物館の塚田が司会を務めさせていただきます。

まず、3名の先生にコメントをいただきます。尹紹亭先生、周星先生、武内房司先生の順でお願いいたします。

尹 このようなシンポジウムに参加できまして、大変うれしく思います。朝から広西、雲南の専門家が、またこのコメントに参加する先生方もご発表なさいました。私もたくさん学ぶことができました。

最初にお話ししたいのは、今日皆さんとこのように議論していますが、みな中国の専門家です。例えば周星さんと私はすでにお互いに知り合いですし、中国の状況もよく知っておりますが、参加なさっている皆さんも中国の西南少数民族についての専門家です。ですから、私たちは対話の基盤があるということです。中国から来られた3名は、それぞれ異なったところでいかに博物館を建設し、それを改修し、文化を守っているかということについてお話しくださいました。そこで感じたことは、創造性が高いということです。なぜ創造性が高いかと言えば、最初にあげるべきは、中国の現在の文化の状況です。それを理解して初めて、今、なぜ彼らが日本の博物館と違うことができるのかがおわかりいただけると思います。

すでに博物館は、今までの範囲を超えたいろいろな新しい模索をしています。今朝、塚田先生は、資源としての文化など3つの面についてお話しくださいました。資源としての文化を語ることは、今、非常に重要だと思えます。まさにタイムリーな話題だと思います。

中国の状況を見てみましょう。皆さんも、すでにご承知でしょう。建国後、文化大革命を経て、改革開放に至る前、政府の文化についての認識にはいくつかの特徴がありました。文化は封建的な「四旧」のうちの1つとされ、例えば宗教文化など排除されなければならないものが多いと言われていました。

1970年代、80年代に入りまして、市場経済の発展が始まり、社会の文化に対する認識に変化が生じました。過去に、遅れているとか、封建迷信と見なされた文化の多くが一躍資源になりました。すなわち文化は商品経済の中での資源になりました。そこでの1つの顕著な特徴は、資源として民族文化の保護と活用することに他ならなかったことです。

伝統文化、民族文化をつくるにしろ、保護するにしろ、文化の創造者であるそれぞれの民族が欠かせません。文化資源の保護には、政府、学者、企業の参加が必要です、と

りわけ現地の住民の参加が必要です。文化を保護し利用するさまざまな役割をする人たちの中で、学者は往々にして比較的受け身であるように見受けられます。政府が主導し、権利があります。企業や商人は力を持っています。それに対して学者は権利も経済力もありません。発言も軟弱で無力です。とはいえ、学者の意見と批評はやはりとても重要です。他の人にはまねのできない価値と意義を持っています。

2つ目は、現在の文化資源が市場経済と結びついているということです。簡単に申しますと、数年前に「文化が舞台を組み、その上で経済が芝居をする」という言葉がありました。それは文化を利用して利益を求めたり、経済の発展を促進することです。今はこの言葉はあまり使われなくなりました。というのは多くの学者が批判をしたからです。最近流行している言い方は、「文化産業を發展させること」です。現在は経済だけではなく、文化も産業になってきたのです。文化と経済との結合はますます密接になる傾向にあります。

さらに、文化資源の開発と活用に加えて、イメージを作り大々的に宣伝をすることが重視されています。文化が市場経済の下で価値を持つものと見なすがゆえに、独創的な構想や方法で大いに実行に移しているのです。例えば知名度を高めるために雲南の中旬はシャングリラと改名しました。プーアル茶は、もともとは名声が大きくなく生産規模の小さいもので、雲南の国境地域でつくられる普通の茶葉に過ぎませんでした。しかし、今は違います。プーアル茶は大いに宣伝され、イメージが作られ、名声が高まり、すでに世界でも著名な歴史のある文化的な名茶になりました。

3つ目は、文化の創造の真実性の問題です。なぜ真実性を強調するかと言えば、偽物が多すぎるからです。商品の取引には劣悪な偽物が最も嫌われます。商品文化、パフォーマンス文化もまた大衆の愛顧を得るため力を尽くしてその真実性を宣伝し標榜します。商人や企業家はこの面で私たち学者よりも敏感で聡明です。例えば麗江の納西族の古楽は、人生経験の豊富な、長いひげをたくわえた老人たちが意を尽くして演奏します。彼らの演奏自体は若者の演奏よりも上手ではありませんが、老人たちの姿勢が「真実」のように見えるのでそれに感動するのです。先ほどふれたプーアル茶と同じ理屈です。さらに、雲南の楊麗萍が最近東京で「雲南印象」の公演をしました。彼女はそれを「原生態の文化」として宣伝しました。「原生態」はその公演の最大の売り物だったのです。

4つ目は、現代の科学技術を文化に大量に応用したパフォーマンスです。現代の科学技術を応用し、音・光・電気を応用して舞台における演出効果を高め、現代の観衆たちの審美意識に適合した文化を創造しています。例えば桂林の「印象劉三姐」や麗江の「印象麗江」は、各種の舞台表現の科学技術や芸術を十分に動員して、盛大で美しく光輝いた舞台を演出しており、見る人々に文化と芸術の大きな享受を与えます。

これまで述べて来ましたように、今の中国の社会と文化には大きな変化が発生しています。この状況において、中国の人類学の学者は、ただ伝統的な記録、研究を昔のよう

にするだけではだめになりました。それでは新しい時代のニーズにこたえることができないのは明らかです。学者も熟考をして、時代のニーズに追いつき、時代の求めるさまざまな新たな問題や挑戦に答えていかねばなりません。

さて、広西の事業ですが、広西壮族自治区の博物館は、中国の博物館の中で2つの大きな貢献があると思います。広西壮族自治区の博物館は、まず全国に先駆けて文物苑をつくって、動と静の両方の展示方法を取り入れました。もちろん問題はありますが、そのような動と静を結びつけた展示は中国のテーマパークとして初めてです。ですから、雲南の民族村、深圳の中華民俗文化村も、すべて広西の文物苑の影響を受けていると思います。

また、時間の関係で詳しく申し上げることはできませんが、覃溥局長がなされた貢献は、生態博物館の新しい道を示されました。「1+10」の博物館のシステムです。これは大変苦しい時に打ち出されました。これは、貴州の博物館にとっても非常に大きな助けになりました。貴州の生態博物館のシステムにはいろいろな問題があったのですが、広西の取り組みのおかげで随分楽になりました。広西では自治区の民族博物館が全体的に生態博物館を管理するという方式です。

生態博物館の問題は、中国の国家博物館の蘇東海さんたちが、彼らの視点で提案されたものです。ノルウェーと共同で活動されました。彼らの問題点はどこにあったのでしょうか。それは、彼らが博物館の専門家だったということです。ですから、生態博物館にとっては非常に微妙な問題があるということをよくご存じでした。人類学、民族学の方面、また地域社会で仕事をするという意味では、ちょっと足りなかったわけです。しかし、博物館の専門家としましては、非常にたくさんの経験をお持ちでした。海外の理論、理念を中国に持ってきた。

貴州の生態博物館については、2つの評価があります。1つは失敗したという評価、もう1つは成功したという評価です。私は、2つとも適切ではなく、偏っていると思います。彼らが中国でこのような文化の保護のための一筋の道を切り開いたこと、前人がなしえなかった事業をしたことはたいへん大きな功績だと思います。では、成功したのかと言いましたら、評価はまた別の問題です。もし貴州の生態博物館に対する評価が高すぎたら、それは事実にあわないだけでなくマイナスの作用も生みだします。このような複雑な事業に対しては、ある意味では成功か失敗かはさほど重要ではありません。参与や過程、探求を重んじ、不断に積み重ね、不断に努力をしていくことこそが重要なのだと思います。およそ物事の発展には複雑な過程がつきものです。ごく短い期間で軽率に成功か失敗かの評価を下すことは適切とは言えません。

貴州が生態博物館を導入し建設を開始する時に中国の専門家とノルウェーの専門家が共同で「六枝原則」を制定しました。この原則の核心は「文化の創造者が自分で文化を管理する」ということでした。しかし、この原則は実現せず、「政府の主導」に変わりが

した。村民は受動的な地位に置かれました。政府が主導し、専門の人員が管理をし、村民はただ「傍観者」として主体的に参与しませんでした。こうした方式は都市の博物館とどこが違いますか？こうした方式を「生態博物館」と称することができますか？このような結果になったことについて、蘇東海さんもいかんともすることができませんでした。中国で生態博物館を建設することの困難さを知って、蘇さんは理念を変えました。直接西方の国家の方式を移植するのではなく、中国の国情にもとづいて現地化するべきであると。このため、生態博物館を「移植」するときには、まず中国の「土壌」が適しているか考慮し、また移植の操作能力や条件をも考慮せねばなりません。これが貴州の生態博物館が人々に残した経験・教訓であったということができます。

各方面からの批評に対して蘇東海さんは「中国の国情」と「現地化」を弁明の理由として強調されました。胡朝相さんは「コミュニティの住民の民族の民間文化の価値に対する認識は蒙昧な段階にある」と見なしました。彼らはコミュニティの住民が今のところまだ完全に文化の参与者・主人になることができないことを強調しています。このような見方は、彼らが実践を通じて制定した「六枝原則」に対する熟考と修正と見ることができます。この認識の変化は啓発すべき意義に富んでいます。そのことは次のことを人々に問いかけるものです。すなわち、生態博物館が西方の発達した国家の「土壌」と「気候」がはぐくんだ非伝統的な新しい博物館文化であって、これを移植するときに果たして被移植地の文化「土壌」がふさわしいもので外来文化の「接ぎ木」をすることに対して十分な認識があったのでしょうか。また、自身、「移植」の操作能力を備えていて、移植に際しての諸条件の十分な準備があったのでしょうか。このことは注意せねばならない基本的な前提です。現地の住民は一種の見知らぬ外来文化を拒絶するか受け入れ難かったのであって、簡単に「蒙昧無知」という一言で括ることはできません。また、グローバル化と市場経済の影響下にあって、現地の住民も実際にはつとに想像するような理想的な状態ではなく、各種の欲望を受け入れる共同体に変化していたのです。このことに対して多くの専門家・学者は基本的知識や必要な準備が欠乏していたのです。まさしくこのために文化の操作と方向性は往々専門家・学者の意志によっては変えることができなかったのです。私たちも含む専門家や学者たちは時に熟考する必要があるかもしれません。良心や情熱だけで事をなすことはできません。立ち向かう対象は複雑で、都市の博物館については全く想像することができないものなのです。

貴州の生態博物館の評価につきましては2つの点に注意する必要があると思います。提唱者や建設者に対して言いますと、いかなる高すぎる宣伝や賛美も無益で有害です。実情に即してその創設と探求の経験と教訓を正しく深く考えて総括をし、十分に前人の失敗を教訓にする作用を発揮することが、いかなる評価よりも貴重で他人の尊敬を受けるでしょう。学界に対して言いますと、関心と批評は必要です。しかし簡単に否定することは妥当ではありません。この事業は私たちの民族文化生態村の建設に従事した者と

同様、その困難と複雑さは部外者には想像もつきません。私たちは知るべきです。他者に対する批評は実際には他者の実践から啓発と検証を得る点でプラスになることを。これゆえに「最初に蟹を食べた人」は敬服するに値します。要するに、生態博物館は新しく生まれた事物ですので、その「移植」の実験は短期間には完成しないのです。暫時の成功や失敗はあまり重要ではなく、失敗さえもある程度の成功よりは意義があることもあります。参与や過程、探求を重んじ、不断に積み重ね、不断に努力をしていくことこそが重要なのだと思います。こうした態度をとることで事業の発展の保証がはじめて得られるでしょう。

広西の生態博物館は、貴州での教訓をもとにして、六枝特区でのやり方を変えたわけですね。実際には地域社会での博物館とし、1つのテーマを持った博物館としました。これは、やはり博物館の形式をとっています。なぜそれを生態博物館というのかというと、住民を主人公にしなければならないという原則に沿ってやっているからです。しかし、住民が主人公になるのにはまだまだ時間がかかると思います。

雲南はどうでしょう。私たちは、人類学という学問的背景を持っています。地域社会での困難さも知っています。ですから、生態博物館とは呼びません。民族文化生態村と呼んでいます。地域社会で博物館をつくるということは、地元の人にもなかなか理解できないことです。私たちの動機と目標の1つは、文化を守る、文化を伝承させるということ、そしてまた学者の立場から文化の変遷についての研究をも行うということです。

さらに、民族文化生態村をつくる場合、まずみんなに意見を出してほしい。文化を守るにはどうしたらいいか、若者の衣装はどうすればいいのかということを経験の人たちと話し合う中で、いろんな新しい発見があると思います。地元の人たちに、自分から進んで私たちに話しかけてほしい。そして、彼らの提案、希望に私たちもかかわっていく。そういうことが大事だと思います。

民族文化生態村の場所の選択は間違っていないと思います。それをこれからどうしていくかということについて、もし皆さん、希望とか質問がありましたらお出しいただきたいと思いますが、今、とりあえず私たちの民族文化生態村のプロジェクトは終わりました。

私は、広西の生態博物館のモデルは創造性がある重視するに値すると思います。ただ、あまり自分たちの仕事を増やすのはよくないと思います。では、どこまで作業をするのかということを考える際には、やはり現実をよく見つめなければなりません。大きな声で大きなことばかり言わないで、自分たちのできることを1つひとつ着実にやっていくことが求められていると思います。

雲南の民族博物館では、特徴のある良い展示をしました。服飾もすばらしいもので、創造性のあるものです。今、問題があるとすれば「活態博物館」ですが、広西が「1+10」プロジェクトを提起したのは非常に独自性のあるものだと思います。では、私たち

がまたこれをするということになれば、それほど意味のあることではないと思います。広西の博物館と同じことをしたのでは、意味がないんですね。今、中国の文化資源の保護には多くの問題があります。しかし皆が主体的にかかわっていく必要があります。学者として、博物館として、自分たちの陣地を守らなければならない、自分たちの独自性をしっかり守る必要があると思います。

先ほどの雲南民族博物館の展示はすばらしいと思います。ほかの人にはできません。自分たちにしかできないものです。では、活態博物館はどうでしょう。文化庁の文化遺産を保護する部署がそれに主体的に取り組んでいくことだと思います。

もう1つ、貴州の博物館の李黔濱さんの報告にふれますと、たいへんすばらしい内容だと思いました。異なる角度から私が強調したいことが検討されていました。実際のところ、私たちの博物館は、物質文化に対する調査研究がまだまだ足りません。李さんのこの報告は、貴州の学者がミャオ族について研究しているということ、そして見る人に対してミャオ族の服装の特徴は何なのか、飾りは何なのかを非常にわかりやすく説明しているという点で重要だと思います。このように物質文化について徹底的な紹介をするということがまだまだ足りないと思います。これをやるべきだと私は思います。博物館は、それが本来の役割だと思います。

貴州のこの報告には、曾さんがコメントをされました。確かに曾さんが提起された問題もあります。ここでは繰り返しません。曾さんが提起された問題について私が1つ説明するならば、貴州の学者は、服飾について大変詳細な調査をされている。しかし、学者とその研究対象のミャオ族の服飾のみの関係になっていて、それらをとりまく他者に対する説明、他者への認識が薄いように私は思いました。

もう1つ、貴州の特徴ですが、貴州の服飾のアイデンティティと発展方向について言いますと、昔、銀は貨幣だったんですね。ですから、ミャオ族が銀を求めることは道理にかなったことだと思います。しかし、ある時期から銀は白銅になった。銀は、自分たちの豊かさを誇示するものであった。しかし、白銅にかわった。白銅にかわってからは、それは富を誇示するものではなくなったわけです。この変化に関する説明をもう少ししてほしいように思いました。

貴州では、少数民族のミャオ族がその服飾を販売するようになりました。彼ら自身のミャオ族の資料に対する研究は、ある意味では私たち学者以上のものです。例えばインターネットを通じて、世界中に自分たちの服飾を紹介し、受注生産したりしております。これによって貴州の服飾が発展してきました。彼らが生産するものの中には伝統的なものとか離れた、極論すれば偽物も含まれていることからしますと、それは、本物と偽物の両方を発展させてしまったわけです。

さらにミャオ族は、雲南の至る所に居住しています。雲南のミャオ族は、私たちがこれから研究していくべきものだと思います。ミャオ族は、文化を資源として非常に活用

しています。全世界でこのような前例があるのかどうかわかりませんが、ミャオ族は、物を背負って、どういうわけか私のそばに来ます。私が北京にいと、彼らもいる。私が武漢に行くとき、彼らもいる。非常に機動性があると思います。これから私たちも、ミャオ族を十分に研究しなければなりません。

今日は、このシンポジウムで資源としての文化について議論していますが、いいシンポジウムだと思います。私たちもこれからぜひ頑張っていきたいと思います。先生たちの報告は非常に貴重なものでした。コメントもすばらしいものでした。時間も過ぎてしまいました。申し訳ありません。

塚田 どうもありがとうございました。尹先生が提示されました観点は多岐にわたっておりますが、午前中からのご発表とそれに対するコメントとも重なる部分があって、また尹先生ご自身のご経験をも織りまぜながら、大変奥行き深いお話だったと思います。具体的には文化資源の特徴としまして何点かの観点を述べておられました。資源としてどのように文化を保護し活用するのか。その主体はだれなのか。特に政府が主導し企業が参与することが多いのですが、しかし、そこで学者はどうあるべきなのかということにふれられました。また、午前中から提示されておりますけれども、文化資源と市場経済との結びつき、文化の産業化という問題にもふれられました。文化の創造の真実性ということにも言及されました。

ほかに、今日の3名の先生方や李先生の報告に関してもコメントをいただきました。広西の生態博物館の取り組みについて、ご自身が指導的な役割を果たされた雲南民族文化生態村での経験をもとに、地域社会の博物館として、新たな道を切り開いた点で高く評価をするとともに、新たな事業ゆえに短期間で簡単に賛否を下すことのできない複雑な問題があることも挙げられました。李先生の報告につきましては、徹底した物質文化研究の成果を評価するとともに若干の問題点を提示されました。それらのコメントへの答えはまた後ほどに回しまして、続きまして周星先生にコメントをお願いします。

周 周星と申します。愛知大学からまいりました。皆様方の報告、コメントを聞く機会に恵まれ、うれしく思います。

少し尹先生が提起された点に対する補足も含めてコメントを行いたいと思います。そこで、3つの点についてお話をしたいと思います。

まず、最近の中国の文化概念の変化をみると、革命的で、改革開放が始まったころと同じように、現在まさに180度の転換点にあるということを申し上げたいと思います。1919年の五四運動から、中国は文化を革命の対象とするようになりました。つまり、中国の伝統文化は現代化を阻害するものとして大変重要視されてきました。どうして中国は弱いのか、それは、中国は伝統的かつ封建的で文化が遅れているから、と考えられて

きました。ですから、伝統文化を打倒しなければならない、文化を変えなければならない、という方向になりました。

文化大革命の中で、少数民族もある程度の影響を受けました。しかし、中国には少数民族を優遇する民族政策もあり、民族の文化を守るという面では、確かにその時偏見や破壊のあった時代ではありますけれども、漢民族に比べれば、少数民族の伝統文化は比較的守られてきたと思います。

全国的に見ればこの10年間の最も大きな変化は、中国全体の文化に対する概念とか理念が変わってきたことです。政府の考え方や認識も少しずつ変わってきました。その変化の過程ですが、例えば風水は迷信ではないか、ここにどうして学校ではなくて、お寺とか廟を建てたのか、そういうイデオロギー的な認識や理屈など、まだまだありますけれども、全体的に言えば文化を資源と考える見方が、以前とは180度違います。文化は有用なものだ、文化は役立つ、文化は市場経済で開発できる活用可能なものだという考え方です。

最近、また少し変化が見られるようになりました。文化は私たちの富とか生きがいで、私たちの祖先が残してくれた大事な財産だ、子どもたちに伝えなければならない、これは価値のあるものだ、という認識が起こってきました。

このような現象を通して私が言いたいのは、この変化に特徴があるということです。中国の改革開放は、ある程度の節目に来ましたが、国内の利害関係が起こりまして、なかなかうまくいきません。そういう場合は、海外のパワーとか知恵を借りて、国内の問題を解決する方法がよく利用されてきました。例えば、WTOに加盟して国際的なルールを守るということで、自分たちのいろいろな施策も変えるようになったわけです。中国国内の文化の概念を変えるということも、同じプロセスで、例えばユネスコの、例えば無形文化を保護するという国際的な条約に従ってやってきたわけです。

かつて、中国政府の幹部や知識人たちの頭の中にある文化というのは、京劇とかオペラ、映画、バレエとか、あるいは新聞、雑誌、文学とか、どれも文字の形で表現されるものや西洋的なものだけでした。文字の教育を受けた人たちは、文化人・知識人、受けていない人は非文化人だと見なされてきましたが、これが昔の中国的な発想でした。しかし、ユネスコの国際条約に加盟してからは、文化について、海外的なものの考え方が中国にも入ってくるようになりました。以前の中国政府の文化に対する理解や考え方だけでは、ユネスコの文化に対する理念と概念に対応できないということで、近年、このような無形文化を保護しようとする変化が起こりました。

このような変化にも、やはり時代的な背景があるわけです。1つは国際化、もう1つは市場化でしょう。中国はいささか豊かな時代に入りました。ですから、文化について意識が高まったとも言えるでしょう。貧困の問題もまだまだありますが、人々も少しお腹一杯食べられるようになって、文化の中に人生の意味を求めようになりました。こ

数十年、例えば、春節、旧正月にはさまざまな文化の祭典とかイベントが開催されるようになったし、昔の過ごし方も回復されつつあります。清明、端午、中秋などが国民の祝祭日として認められるようになりました。もちろん、この流れの中で少数民族の芸能などもどんどん発展して、より豊かになってきています。以前は文化を革命の対象としていました。今は、文化を資源として、特に観光開発の分野では文化がお金になる、文化を市場経済で使おうとしています。また、文化を国民の財産と考えるようにもなりました。

では、文化の理解をめぐる混乱は本当に解決済みなのでしょうか、文化を本当にそれほど大事に考えているのでしょうか。私はそうでもないと思います。例えば、博物館の専門家や大学の先生は、「文化とは何？わからない？じゃあ、教えてあげよう」というような姿勢や態度をとりがちですね。文化を語る難しさは、草の根の文化を軽蔑する知識人たちの伝統によるものだけではなく、文化が誰のものか、または誰のためのものか、文化を資源とすると、それは一体だれの資源なのか等々、より根本的な問題もそこにはたくさん存在しています。つまり、その文化を創造した住民の主張や解釈、彼らの文化に対する正当な権利などをまず尊重しなければいけないと思います。

2つ目に、生態博物館について少し私見を述べてみたいと思います。生態博物館は、中国の「文物」に関係している分野のところから出た言葉です。文物（文化財）でいえば、歴史文物、考古文物、革命文物、そして少数民族の民族文物、または民俗文物の概念も次々と生まれてきたわけです。貴州省博物館の元館長はミャオ族出身の幹部で、彼は、文物を民族文物にまで広げたことはごく当たり前で、その中にミャオ族の民族文物があると考えています。では、ミャオ族のもの、文物を一体どう表現したらいいのか、そこから新しい概念、理念が思案されました。つまり、ある典型的なミャオ族の村を探し出し、その村を「民族村」（ミャオ族を代表する村）として、ミャオ族の民族文物の「展示場」だと、あるいは村ごとをミャオ族の文物だと考えたわけです。ミャオ族の英雄、清朝のミャオ蜂起のリーダー楊大六の故郷がその村のひとつです。村ごとを博物館のようにして、ミャオ族の生きている文化をありのまま展示し、それが村寨博物館とか生態博物館になったわけです。「原生态」の生態博物館の理念は海外の影響もありますが、国内の実践から生まれたとも言えます。

しかし、地元の村人にとっては、最初「自分たちは博物館の中にいる。住民たちの暮らしが見たければ見ればいい」と思います。しかし、1人、2人が見ているのだったらいいのですが、観光客の大勢の人々が見に来ると、どうして自分たちは見世物にされなければならないのか、というような意見などから、村の生態博物館に来る客をみんなが歓迎しなくなります。

広西の覃局長も話してくれましたが、文物を博物館に持ってくる場合、有形文化はよくわかりますし、扱いやすいです。しかし、文物・文化財の理念が有形から無形に変わ

る場合、あるいは人間も博物館の展示品のような形になる場合、さまざまな問題が生じます。人間はやはり発展とか変化を求めるものです。人間は欲のあるもので、いい家にも住みたい、よりたくさんのお金がほしいと思うものです。先ほど長谷さんもおっしゃいましたように、他者をどう見るか、他者としての村人も発展、変化をもとめる権利があるはずですが、村人を含む生態博物館の実践は、意義のあるものですが、失敗しやすい要因は、現地の住民をどう見るかにあります。生態博物館は結果として、観光スポットに変身します。そこに住む人間さえも原生態の一部として保護する発想には、問題があると思います。

村ごとの文化を資源と考えて開発された観光目当ての「民族村」や生態博物館などは、その利益がどれほど住民に還元されるのでしょうか。数多くのケースから見れば、大半旅游局に持っていかれて、住民たちにたくさんのお金を残す状況ではないと思います。なぜなら、これらの実践が、あくまでも、ほとんど地方政府のプロジェクトのもとでなされているからです。ここでもう一度、もし文化が資源であれば、その資源はだれのための資源なのか、経済だけを発展させるための資源なのか、といったさまざまな問題について考えなければなりません。

いま、文化と資源をめぐる議論は大変活発ですが、たくさんさんの混乱も生じます。たとえば、文物局の立場から言えば、文化は保護の対象であり、観光局の立場から言えば、文化は観光産業の資源であるのですが、ところがいずれも地域住民の表情とか彼らの声を無視しがちです。生態博物館のように、地域の住民を私たちの実験の対象にすべきではありませんし、彼らを博物館の標本と同じように見てはいけません。これが私が申し上げたい2つ目です。

3つ目は、広西、貴州の少数民族を語る時、私たちが常に何族とか、つまり、まず民族に注目してしまう傾向があることです。これは、地域性の概念への理解があまりにも浅いことから来るのでしょうか。謝さんは、雲南文化について、それはたくさんさんの文化が入り混じる鍋の底だという話をなさいましたが、私も、この考えは非常に重要だと思います。中国民族学を研究する学者たち、そしてまたこれらに携わる人たちは、いつもまず民族に注目し、地域に配慮しません。私はまず地域から出発すべきだと思います。

たとえば、麗江ナシ（納西）族の古典音楽、1950年代のころは、麗江古楽とか麗江洞経音楽と呼んでいたのです。つまり、それは民族の文化というより、地域の文化として捉えられてきました。それはナシ族が発明したものではありませんし、ナシ族独自のものでもありません。麗江盆地の他の民族、または隣の大理盆地においても、同じような洞経音楽がたくさん存在していますから。もともと民族音楽ではなく、地域の宗教音楽です。同様のケースとして、トン族の風雨橋もあげられます。これはトン族だけの独占的な文化ではないのです。漢民族もミャオ族もその風雨橋をよく作っています。無意識のうちに省略したのか、意識的に民族のものと強調したのか、よくわかりませんが、私

たちはより地域性を重視しなければいけないのではないかと思います。謝さんは、流域について、あるいは5つの地域の文化について話されました。その地域には、色々な少数民族がいます。ただ、民族だけで地域の文化を語ることができません。例えば、地域で共有する文化などもとても重要なのです。これから私たちはより地域について考えていかなければならないと思います。私たちは、博物館で文物を分類し展示する場合、すぐに民族というのを先に考えます。しかし、地域を無視してしまうと、実際のところ、漢民族の文化とか漢民族の存在すら無視されがちです。少数民族だけに目を向けて、まるで漢民族の文化がないかのような語りは、やはりおかしいですね。これも1つの偏見だと思います。

最後に、もう1点補足ですが、これは曾さんに対する答えにもなるかもしれません。1950年代から70年代に、政府の銀行から少数民族のニーズに応じて、銀の特別配給が行われました。市場経済が始まってから、次第にそのニーズが減ってきて、それで特別な供給も無くなったわけです。かつて、村では銀は富を誇示するものの象徴でしたが、現在ではそれもカラーテレビなどにかわりました。つまり、時代の変化によって、白銀とか白銅の値打ちも下がってきたということです。

以上が私の感想です。ご静聴ありがとうございました。

塚田 周先生、ありがとうございます。中国ではこの10年間に国際化・市場化を背景として文化が有用で資源、国民の財産として考えられる時代に至ったこと、その中で文化が誰のものか、誰のためのものなのか、文化を資源とすると、それは誰の資源なのかといった文化の理解に関する問題点を挙げられました。また、生態博物館に関する問題点を何点か述べられましたが、生態博物館にかかわる人々、特に村人がどのようにかかわればよいのかということに関する問題提起がなされました。そこに住む村人を「原生態」の一部と看做して保護することや実験の対象にすることの問題点、利益の住民への還元といった問題だったと思います。さらに、雲南の例をとりまして、民族文化という括りよりも地域で共有する文化、地域性をより重視すべきではないかという問題提起をされたと思います。文化資源が誰のためのものなのかとか、生態博物館にかかわるさまざまな主体の問題は、今日の全体の課題とも深く関わってたいへん注目されます。地域性の重視という新たな問題提起をもされました。生態博物館に関する議論は、また後ほど、それぞれの先生にお答えしてもらおうと考えております。

3番目に、武内房司先生にコメントをお願いいたします。

武内 学習院大学の武内です。今日は大変白熱したといいますが、予想外のいきいきとしたシンポジウムになって、私も大変勉強になりました。

私たちは、民博で文化資源をめぐる共同研究会¹⁾を立ち上げたわけですが、立ち上げ

た当初は、文化資源とって一体何を研究すればいいのか、どういう現実的な意義があるのかがあまりよくわかっていなかった。けれども、今日、中国から来られた先生方、あるいはそれに対する各先生方のコメントを通して、文化資源というものが今日の中国、とりわけ西南中国社会を理解する上で非常に重要なテーマであるということをあらためて認識させられた思いがいたします。

私からいくつか簡単な感想をつけ加えさせていただきたいと思います。

まず、西南中国地域の文化資源というテーマで研究することの意義は、やはり大きいのだろうと思います。つまり、今日のシンポジウムの中でもキーワードとして「多様性」がありますが、中国あるいは東アジア、東南アジア世界を含めて、「多様性」という言葉で象徴される地域は、ある意味では西南中国がまず第一にあげられる。そうした多様性を持った地域、多様性の価値というものをこれからどういうふうに位置づけていくかというのは、人類学や民族学だけではなくて、私が専門としております歴史学にとっても、とても重要なテーマであると改めて感じました。

北方民族、モンゴルあるいは満州といった民族については、日本の高校の世界史の教科書でも必ず取り上げられるのですが、ミャオ族やヤオ（瑤）族という民族をあげている教科書はまずないと思うんですね。せいぜい大理、雲南省といった固有名称がある程度で、ほとんど知られていない。けれども、これがいかに大きな価値を持った地域であるかということ掘り起こしていく。私たちだけではなく、中国の先生方とも協力して、そうした魅力や価値を掘り起こしていければ、そしてまた日本の人々にも紹介していければいいなということを、今日の報告を聞きまして強く感じました。これが第1点でございます。

第2点は、各先生方の報告の中で強調されておりましたのは、グローバル化時代の文化資源。特にグローバル化の時代を迎えて危機に瀕しつつある文化資源に対してどう取り組むかということが、共通の問題意識としてあげられていたかと思います。尹先生の最後のコメントの中で、「市場のための文化」という文化定義も大変新鮮に映ったわけです。これは、現在の高度成長下の中国だけで起こっている現象と思われがちですが、実はバブル経済、そしてバブル経済が崩壊した現在の日本においても、ある意味では日常的に進行しつつある事態であって、中国だけを見るのではなくて、日本の現実とも共通しているんだということを認識する必要があるのではないかと思います。

私は歴史をやっておりますが、あまり力がないのですけれども、日本歴史学協会というのをいろんな歴史学研究者たちでつくっているんですね。その活動の1つのテーマが、歴史的な景観をいかに保存していくか。遺跡あるいは建造物だけではなくて、空間そのものが非常に重要な文化であり、それを継承していくことが大切なんだということを、何度も署名を集めて行政に働きかけているんですけれども、そんなものよりも雇用を創出するために事業を起こして道路をつくるのが大切だと。地方自治体に対して要望書

を出すということをやっているんですけども、これもグローバル化時代の日本が現在抱えている問題であって、そうした虚しさを感じておりました時に今日のお話をうかがいまして、同じ現象が起きているんだなあということを感じました。

ただ、同時に、グローバル化の中で文化が消失するというマイナス面だけを見るのではなくて、残念ながら李先生は参加できなかったわけですけども、今日の李先生の報告を聞きまして、改めて人間の文化的創造力というのは大変なものだなと感じました。つまり、ミャオ族の銀細工、銀飾という文化は、歴史をやっている立場からすると、貨幣経済がすべて銀で一本化された十六、七世紀以降の中国に特有にあらわれる現象である。それは、今のバブル経済にも匹敵するような大変な衝撃力を持った時代であろうと思うんですけども、そういう中でミャオ族の人々がある意味では適応し、自分たちの文化として再創造していく。そういうダイナミズムを感じたご報告で、物事を一面的にとらえてはいけないと改めて感じた次第です。それが、グローバル化時代の文化資源という問題ですね。

第3の問題としては、保存と継承をだれが担うのか、担い手の問題があげられたのではないかと思います。それは、文化を保存するシステムとしてどのような形態が最も望ましいのかということで、覃溥先生の広西壮族自治区における生態博物館の実践的な取り組みのご紹介も大変刺激的なご報告で、多くのことを教えていただきました。

私も、文化資源の研究会で、貴州省の生態博物館の取り組みについて、簡単ですが調べて報告させていただいたことがあります²⁾。もともとはヨーロッパにおけるエコミュージアムという発想。1930年代のフランスで起こった民衆文化再生運動の中で出てきた、建物の中に各地から集めた民具とか収蔵品をただ死蔵し、それを専門家が研究するというのではなくて、先ほど尹先生が「六枝原則」という言葉で表現されましたけれども、住民が主人公となり、過去の物としての遺産だけではなくて、技術あるいは伝承、記憶、こういったものをまとめて保存していくシステムとしてエコミュージアムというものが導入された。

私が非常に驚いたのは、日本におけるエコミュージアムの本格的な導入の歴史よりも、中国のほうが早かった。しかも、実践化し、成功と失敗双方の側面を経験している。これに非常に興味をひかれましたし、新たな文化創造の可能性、いかに文化を伝承していくかという問題についての可能性を持つ試みなのではないかと強く感じたわけですね。

たまたま昨年、私は、貴州省黔東南ミャオ族トン族自治州を訪問いたしまして、そこにあります錦屏県の隆里という生態博物館を訪れました。ノルウェーから多くの資金が出たということは後で知ったわけですけども、まずその生態博物館という言葉が、私たちの博物館のイメージとは違って、村そのものである、それが非常に新鮮な印象を与えました。単なる日本の観光客目当てのテーマパークともまた違った試みであり、こういう試みが持つ可能性というのは、やはり日本人にとっても非常に刺激的であったとい

うことをお話しさせていただきたいと思うんですね。

そこで、保存と継承の担い手をどこに求めるか。先ほど尹先生が中国国家博物館の蘇東海先生の言葉を引用して、やはり理念は理念として大事だけれども、中国の現実に合わせてなければだめなんだということをおっしゃられたというんですが、その理念というのは、村人にとって現在は辛うじて残っているかもしれないけれども、あと10年、20年、30年たったら失われてしまう。それをいかに記録し、再生可能な形で継承させていくかというのはとても大切な問題で、そのためには、素朴な考え方ですけれども、学者と呼ばれる人々、研究者と呼ばれる人々との協力関係をいかにつくっていくか。

私は歴史をやっていますが、今まで歴史家というのは、自分の研究のために史料が見られればそれで満足。その史料がどういう使われ方をするかとか、村人にとってどういう意味を持っているかということは、あまり考えない。自分の業績になるという考え方が非常に強かったと思うんですね。だけれども、そうではなくて、私たちの努力がいかに村人に役に立つ形で還元できるのか。史料の保存とか修復、あるいは拓本をとって記録するとか、こういったことにお役に立てるような方向性が考えられないか。これは、中国だけの課題ではなくて、今の日本の課題でもあるかと思います。

過去の記憶。記録ではなくて記憶と言ったほうがいいかもしれません。記録と言うと、かつて中国語の「档案」は、裁判のための記録であって、いかに自分たちの権利を守るか、あるいは政治的な革命英雄の業績を顕彰するか。そういうためにつくられた記録とは違う、人々の記憶を将来再生可能な形で残すための取り組みを目指す必要があるのではないかということを感じながら、生態博物館の問題に関するご報告をお聞きしました。

その意味でも、広西の生態博物館の試み、野外パーク博物館の試み、あるいは雲南民族博物館の民間の埋もれつつある文書を収集し保存する試みは、とても大切な事業で、私たちが学ぶものが多いと感じた次第です。雑駁な感想ですが、私のほうからは以上です。

塚田 どうもありがとうございました。3人の先生に、それぞれの立場から総合コメントをいただきました。

続きまして、このコメントを受けまして、午前中から出ております議論とも重ねまして、いくつかの問題点を整理させていただきます。

まず、文化資源が非常に重要であるということは、もう十分確認されたと思います。その上で、文化資源をめぐる政府、学者、そして地元の人々のかかわり方、どうかかわればよりよいものができるのかということですね。

例えば尹先生は、先ほど学者がどのようにかかわればよいのかということについてご発言されましたし、武内先生も、研究者と村人とが協力関係をいかにつくっていくか、また歴史学の立場から研究者の努力がいかに村人に役に立つ形で還元できるのかという

ことをご指摘されました。また、地元の人々の関わりにつきましては、何人かの先生が指摘されており、例えば周星先生からは、観光目当てのところでは、村人に利益が還元されないような仕組みになってしまったことをご指摘いただいたと思います。また、生態博物館は、そもそも住民が主人公でなければならないという理念を持っていたことをご指摘されたと思います。尹先生のご指摘では、貴州ではそれは中国の国情に応じて政府の主導する体制に変化せざるを得なくなったのですが、そうした研究者や政府や地元の人々のあり方、それらがどういう関係であればよいのかということが1つ問題点としてあげられると思います。

2番目に、これも午前中から出ておりますけれども、観光業との結びつきという問題があります。呉偉峰先生のご発表の時に、兼重先生のご質問がありましたけれども、いわば商品化されて、もとの民族文化から離れた新たな価値が付与されているのではないかというご指摘でした。もともとのものを忠実に再現したのではなくて、観光用の民族文化として新たな価値が付与されているという現状がある。そして、そのことが観光業として文化の産業化、商品化ともつながります。これが2点目です。

曾先生のコメントでは、文化の真正性についてご指摘をされておりましたけれども、村民のレベルではその文化はどのように解釈されているのか、また商品化されている文化とかけ離れているのではないかというご指摘だったと思います。このような文化と観光との結びつき、あるいは文化の商品化という問題があります。

3番目に、今の問題ともかかわると思うんですけれども、文化の保護や伝承という問題があります。これは、どのような仕組みで、だれがどう扱うのかという問題です。また伝承とともに文化の創造、あるいは文化の再創造といった問題があります。ほかにも、少し飛躍しますが、文化の保護や伝承に関する地元の人々からの積極的な発信ですね。文化はだれのためのものかという問題を考える時に、地元の人々もかかわっているという問題もあります。

3つほど問題点を整理しましたけれども、この問題点を含めながら、中国の3人の先生方にそれぞれご感想なりコメントをしていただきたいと思います。どなたからでも結構です。よろしくお願いします。

覃 まず状況説明からいたします。率直に申しまして、私は今、本物の学者ではありません。文物局の局長です。私は、ちょうど半分の時間は学者をしておりました。最初に博物館の仕事をしまして、都市の博物館の館長をしまして、文物保護の行政の仕事をするようになりました。ちょうど半々の人生です。

今回、この会議に参加して、本当に感動的です。最初に申し上げたいのは、日本の学者が中国の少数民族の研究にこれほど詳しいとは思いませんでした。私が考えもしなかったような質問もありますし、研究もありますし、成果も上げておられますし、本当に

今感動しております。さらに、長期にわたって国内で絶え間なく研究をしておられる、また、海外の学者と研究をしておられる専門家の皆さんのお話を聞くこともできました。ですから、今回の収穫を一言、二言で申し上げることはできません。これから広西の民族文化の保護と活用の仕事に生かしていきたいと思います。本当にありがとうございます。

次に、行政管理の立場から皆様に1つ提案をしたいと思います。この提案が受け入れられましたら、今後、皆さんが研究する上で、政府の担当者、あるいは管理者とも何らかの役割が果たせるのではないか、もう少し科学的な研究ができるのではないかという私なりの提案です。

1つ目は、私の体験です。私は、36年、仕事をしてまいりました。ちょうど半分は、学生、そして学問を終えて、研究者として仕事をしました。そして、もう半分は行政の仕事をしてまいりました。文化という仕事と現実には可能かどうかのバランスをとるということで1つ申し上げたいことがあります。

文化を管理するほとんどの人たちは、もともとは学者です。そして、管理の仕事をするようになりました。私と同じで、彼らは皆、もともと文化の仕事、文化と資源、保護と活用の仕事をしてきたわけです。何をすべきか、現実にはどうすべきか、私たちがそうですが、政府の少し責任感を持つ人たちは、そのバランスをとろうと努力します。あるいはあがいているところです。皆さん、ご理解いただけるとと思います。私が実際にそうなんです。ですから、私たちがその意思決定に参加する場合、その間でできるだけバランスをとろうと模索します。すべてを求めようとしても無理なんです。ですから、できるところからやっていく、そしてバランスをとっていくというのが、私たちのやり方だと思います。

文化は資源になる、それから最終的にどうなるというお話もありましたが、研究者として、私たち行政の人たちの気持ちをご理解いただきたいと思います。これをまずご理解いただきましたら、いろんなことがわかってくると思います。今、中国は、民族文化について、また雲南や広西や貴州の民族文化の豊かなところで民族文化に対する仕事をいろいろしておりますが、まず私たち行政の人間の気持ちを理解して対応していただけるようになれば、私たちがよりよい方法をとることができるようになると思います。ですから、皆さんもそこはご理解いただきたいと思います。相手の立場に立って、仮にあなたが行政の責任者であれば、文化を資源として保護し活用する場合、どう考えるか。そのように少し相手の立場に立って考えてみることで、私たち中国のいろいろ模索している事情もご理解いただけるとと思います。

2つ目に、中国に「国情」という言葉があります。中国では「国情」が慣用語になっています。来日する際に飛行機の中でも「国情」について話し合いました。これは流行語ですが、表面的な意味と内面的な意味とがあります。例えば中国の生態博物館ですが、

私たちは国に1つ課題を提案しました。中国の生態博物館は、やはり「国情」を考えなければなりません。

広西で6年間準備をして、ようやくこの博物館ができました。どうして私たちはそれを1つのモデルケースとしたのか。政府の文化機構、住民が考えたのは、「国情」です。そして、もう1つは広西の地域の状況です。なぜここを選んだか。率直に言って、適当に選んだわけではありません。慎重に選んだのです。

では、最終的にそれは正しかったかどうか。報告でも申し上げましたが、広西の生態博物館は、まだ始まったばかりです。ですから、成功したとは言えません。中国の生態博物館にどのような影響を与えるか、どのような貢献をするかは、今はまだ言えません。しかし、尹先生が私たちの取り組みを評価してくださったことを大変うれしく思います。私も呉さんもこの仕事をしてまいりましたが、本当は私たちもそれほど自信があるわけではありません。でも、100パーセントを求めるよりも、とにかく何かできることからやっつけていこう。私たちは、そういう考えを持って行動してきました。

多くの学者も、外の文化と民族文化の衝突を経験しなければ、なかなか私たちの気持ちをご理解いただけないかもしれません。生態博物館は、例えば数カ月行かなければわからなくなってしまいます。変化が非常に大きくて速いです。生態博物館の仕事をしてきた村民と話をすることがあります。「ここにこんな家を建てないでとお願いをしたのに、どうして建てたのですか?」と聞くと、「ああ、そうでしたか」と人ごとのように答えるだけでした。とにかく現地に行かないとわからないこと、変化が起こっていることはたくさんあると思います。ですから、国情、地域の状況がそれぞれ違います。

中国は非常に豊かなところがあります。その文化の保護は、主体的に、自主的になされています。経済的發展が少し遅れているところは、政府や学者のかかわり、文化機関のかかわりが大事だと思います。私たちは、いずれ住民が主役になってほしいと思います。その時には、その村はきっと豊かになっていると思います。変化するんです。しかし、その変化は、プラスの変化もあれば、マイナスの変化もあります。これが私の2つ目の提案です。何か事業をする時には、そういうさまざまなことがあることをご理解ください。

3つ目は、先ほどお話をいたしましたように、中国の各省の文物局長の中で、私は少し経験を積んでいます。いろんな行政の関係者にも会いました。学者を経験した人としていない人では、役人といっても仕事の仕方、考え方が違います。学者を経験した人たちは、文化を守ろうという学者の立場を考えながら仕事をしています。しかし、学者の経験をしたことがない人は、もう少し私たちに比べて複雑だと思います。私たちは、大きな法律のもとに仕事をするわけですが、やはり変化があります。その変化の中で、いくつかの選択があります。文化のプロジェクトの選択、そして結論もそれぞれ違ってくると思います。

どうして私がこの3つの提案をしたかと言いますと、これは私自身の経験からですが、学者の皆さん、中国の文化を研究しておられる皆さん、長期にわたって努力をしてくださる皆さんから、私たちもいろいろ得たいと思います。ぜひ皆さん、私たちの状況もご理解ください。以上、私が申し上げたい3つです。

さて、今朝、時間の関係で、まだ皆さんの質問に対して回答していないテーマがあります。兼重先生からのご質問だったでしょうか。皆さんに実際の背景をご紹介したいと思います。

例えば貧しいから、発展するために努力をする、何とか現状を打破しようとする。これは経済的な原因ですね。もう1つは、文化を収蔵する博物館は、収蔵品を増やす、展示品を増やす、社会に貢献するという役割も果たさなければなりません。ですから、私たちも資源開拓のルートを探さないといけないのです。

例えば10の生態博物館をワークステーションにしようと考えていたわけですが、今後の広西博物館の収蔵品はどこから来るのだろうか。社会は発展し、変化する。では、私たちのまったく新しい、基盤のない広西の生態博物館は、この先どうすればいいのだろうか。4,000点ほどの収蔵品がある。きょう、皆さんに3万平米の場所があるをご紹介しましたが、そこで展示するためには、まだまだたくさんの仕事をしなければなりません。ですから、生態博物館をつくる場合、運営する場合、今も大事ですし、これからのための基盤づくりもしなければならぬと思っています。私たちのワークステーションには、いろいろな仕事の仕方があります。中国あるいは外国の学者の人たちに、可能性の調査やテーマの研究をしてほしいと思いますし、ぜひ皆さんに来ていただきたいと思います。

生態博物館は完成したけれども、いろんな問題がまだ山積みです。例えば政府の各部門の生態博物館に対する態度ですが、中国の行政は、今、いい方向に向かっていきます。人民代表大会で非常に重要な問題、政府機関の問題について話し合っているわけですが、旅遊局、文物局という行政の部門が、ひょっとしたら将来は文化遺産部という機関になるかもしれません。そして、建設部が今管理している歴史景勝地、また無形のものも、ひょっとしたらその部署に入るかもしれません。

つまり、今、現実的に新しい提案がなされているわけです。それぞれが自分たちの仕事をする。中国の社会は、世界の発展とリンクしています。中国が国際社会とリンクしていればこそ、今のやり方ではだめなんです。中国は変わらなければならない。生態博物館は、文化部門が関心を示す問題だけでいいのか。そうではありません。私たち発展改革委員会も、財政部門も、また旅遊局も、文化庁も、みんながこの問題について関心を示しています。そして、それを自分たちの仕事の一部にしようとしています。自分たちのできることから、この文化の発展のために役割を果たそうとしています。いずれにしても、まだ始まったばかりです。お互いにいい意味で影響し合うということですね。

広西の生態博物館の経費は、ほとんどすべて広西自治区の経費です。発展改革委員会の支持がなければ、私たちはこれをやっていくことはできないのです。私が強調したいのは、国情と地域の状況です。これは、生態博物館が避けて通ることのできない道です。

17年前、私は学者の立場から呉館長にも話したことがあります。これは私の見方で正しいかどうかわかりませんが、博物館について私はこう思います。仮に今のこのような状況で発展させるならば、中国の生態博物館の発展の可能性は2つある。1つは、最終的に伝統的な博物館に戻るということ。私は、今、中国の博物館を中国の民衆に無料で開放するという文書を用意しているところです。現状を見れば、いろんな現実が見えてきます。中国の政治体制の問題や、これからの問題も不透明です。ただ、これらのものがなくなれば、博物館もなくなってしまいます。先ほどの武内先生のお話にも同感です。なくなってしまうかもしれません。しかし、100パーセントなくなるということはありません。100パーセント伝承されるということもありません。

2つ目は、状況がよくなれば、今の中国の生態博物館の目標として、現地の住民が博物館の半分を支えるということが挙げられます。100パーセント主人公になることは無理です。半分支えてくれればいいと思います。自分のこととして博物館の運営に参加してください。50パーセント参加してください。そうなれば十分だと思います。

10カ所の生態博物館は、それぞれ条件も状況も違います。例えば那坡の博物館は、私たちは呉館長と何度か行きましたが、場所を選ぶ時、本当は心配でした。しかし、地元の人たちが非常に後押ししてくれました。今、彼らは、非常な力で参与してくれています。この展示センターや素材は、すべて現地の住民が準備してくれています。また、客家の博物館も、現地の住民が自主的に組織をして、私たちの文化部門と連絡を取り合い、彼らの土地や建物を提供してくださっています。また、ある漢民族の博物館もそうです。ですから、いい面もあります。100パーセント主人公というわけではありませんが、住民の参与はどんどんよくなるのではないかと思います。

それぞれの博物館に文化のモデル基地をつくっているわけですが、私たちは指導性を発揮します。例えば三江の農民が描いた絵、木工、刺繍、これらはすばらしいものです。彼らの展示は、すべてが自発的です。自分たちが主体になって、自分たちの家の中に絵を飾ったり、酒造りも自分たちが主体となってやっております。ですから、それぞれ博物館によって状況は違います。

いずれにいたしましても、短期においては、尹さんがおっしゃるような主人公になるというのは無理です。しかし、学者や行政がしっかりとこれをうまく運営していけば、長い目で見れば可能性があると思います。

さらに、利益についてですが、私たちは経済的な利益はそれほど求めてはおりません。農民は、そのほかに自分たちの利益を得る方法、ルートがあります。観光によって利益を増やそうということは、あまり考えないほうがいいと思います。それは、ある程度自

然に任せたほうが良いと思います。交通の便もよくなります。また、見学する人たちも、交通の便がよければ、なにもそこに泊まらなくてもいいわけです。ホテルがあってもなくてもかまわないわけです。便利になれば、来たり帰ったりできるでしょう。今、一番遠い生態博物館は、金秀瑶族自治県の村にあります。でも、今は交通の便がよくなりましたから、それほど時間がかかるわけではありません。町まで30分で行けます。もともとは大変遠いところだったんですが、政府がいろいろな仕事をするので、悪いものもよくなってくると私は思います。

博物館は、現地の住民に、例えば交通の便をよくしてきました。都市から離れている博物館も、今は交通の便がよくなりました。2つ目には、現地の住民の生活環境もよくなりました。生態博物館ができたために、国際赤十字社がその環境を悪化させない政策をとるようになりました。3つ目は、水です。このあたりの住民は、ずっと水道の水が使えませんでした。今は博物館ができたことによって、住民は水道の水を使うことになりました。これは、彼らの健康にとっても非常によいことです。以前は、水の問題で随分苦労しておりました。いろんな病気もしていました。これは彼らの衛生にいいことだと思います。

では、これぐらいにしましょうか。私は、今、学者ではないので、間違っただ点もあるかもしれません。うまく話せなかったかもしれません。いずれにしろ、今回来て、実際にこんなふうに感じました。ありがとうございました。

塚田 ありがとうございます。文化を保護し、それを伝えるため、大変注目されております生態博物館の試みにつきまして、補足説明を加えながら、住民が少しでも参与して生態博物館を支えてほしい、さらに国情や地域の事情を踏まえながら、できることから一歩ずつ努力していくという姿勢がひしひしと伝わってくるお話でありました。私どもも、そのことについては大変共感を持つことができますし、生態博物館の今後の発展を注視していかなければならないと思います。

続きまして、今までの議論を踏まえて、謝沫華先生にご感想なりご意見をお願いいたします。

謝 時間に限りもありますので、できるだけ短く話します。今日、文化の保護について語り合いました。民博は「深奥的中国」という展示を行いました。これを見て、中国から来た少数民族として、私は白族ですが、感動いたしました。

文化の保護について、中国には中国の国情があります。覃さんがおっしゃったことは、私も同感です。1960年代の文化大革命以後の文化に対する見方の変化は大変重要なものです。具体的な例をあげてみましょう。最近、中国の政府は、省と市の博物館、国立の博物館をすべて無料で開放すると決めました。しかも、最近国際的な影響もありまして、

皆さんご存知だと思いますが、中国では世界遺産に登録するのが1つのブームになっております。1つは保護、1つはそれによっていろいろな利益が得られるということです。

文化の保護を機構の面から見ますと、少し複雑なものがあります。例えば雲南と広西では、広西はうまくやっています。文化庁の下に民族博物館、いろんな博物館があります。私たち雲南は、多様性がありますから少し特殊なのかもしれません。大きいものは文化庁が、私たち雲南民族博物館は民族事務局がやっております。雲南には26の民族があります。ですから、これも私たちの特殊性と言わざるを得ません。他省とは違うんです。

私が今日紹介したのは、あくまでも雲南のここ数年の文化の保護についての簡単な紹介でした。尹さんがおっしゃいましたように、博物館は伝統的なものを記録していかなければならない。こちらの民博のようにたくさんの資料を集め、それを記録したり、記憶したり、展示しなければなりません。私は、とにかく生態博物館さえつくればいいという問題ではないと思います。そういうものを記憶し、記録しなければなりませんと思います。

では、私たちはどうして雲南民族博物館をつくったのかということですが、第11次5カ年計画の中で、少数民族地域では民族あるいは民俗博物館をつくらないといけないという決まりがあるわけです。人口の比較的少ない民族も、それぞれ自分たちの博物館を持たなければなりません。国がそう決めたわけですから、地方もそうしなければなりません。そこで雲南は、人口の比較的少ないところで博物館をつくらうと考えました。

これは中央の民族事務委員会が決めます。省区の政府機構が提案をします。雲南、貴州、広西は、さまざまな提案を出しました。これはあくまでも提案です。というのは、現地が管理し、そして国が資金援助をするわけで、私たちはただ提案をただけです。私たちは、省に対して、ああだ、こうだと言える立場にはありません。ただ平等な提案をいたしました。いずれにしても、民族博物館としては、収蔵、展示、研究が主な仕事だと私は思います。

展示「深奥的中国」を拝見いたしました。それそのものが文化の記憶です。展示物のなかには今は少なくなったものが多くありました。例えば銀飾り。曾さんもおっしゃいますが、私たちもそう思います。民間の技術は、非常に価値のあるものです。しかし、放っておけば、それはなくなってしまうかもしれません。博物館としては、それを記録しなければなりません。政府として、できれば彼らを手助けして発展させ、継承させていかなければならないと思います。

私の考えですが、先進国の日本や韓国から学んだことですが、中国の民族、民間の技術を持った人を、国家級の民間技術者、あるいは省の技術者に認定して、多くなくてもいいですが、例えば数千元の人民元を国あるいは市の行政から提供する。政府がそのような補助をすることによって、彼らは銀飾りの技術を継承させていくことができると思

います。国レベル、省レベルの伝承者という認証をして、資金援助をすることが大事だと思います。そうでなければなくなってしまいます。

社会と経済の発展によって、世界はまだ多様的です。しかし、私たちは、今日ここで皆さんとともに国際シンポジウムを開いています。皆さんからいろんな意見をうかがいました。これは1つの文化のぶつかり合いです。尹さんがおっしゃいましたように、失敗した、あるいは成功したとどちらかに断言できるものではありません。しかし、社会の発展の中で、文化の伝承、保護、活用について、私たちは努力して博物館の仕事を続けていかなければならないと思います。間違いがありましたら、どうぞ皆さん、ご指摘ください。

塚田 謝先生、ありがとうございました。博物館という装置もまた、文化資源を保存し、記憶し、記録するということで、大変重要な役割を果たしていること、そして、これからもそれを続けて一層発展させていかなければならないということ、改めて私も確認させていただきました。

続きまして、呉偉峰先生にご意見、ご感想をお願いいたします。

呉 文化と観光について、少し補足させてください。朝、発言した、それについての補足とお考えください。

博物館というのは、博物館自身の発展の法則性に従って仕事をしていかなければならないと思います。博物館の運営は、科学です。私たちのような人間は、博物館の専門性を重視しなければなりません。博物館と言えば、博物館なのです。私たちは、世界のいろんな博物館に行き、進んだ経験をたくさん学びました。日本の民博からも学びました。来るたびにできるだけ多く学ばないといけないなと思っております。文物を保護するための進んだ技術を学びました。研究者が極めて高い成果を上げています。本当にいろいろ勉強になっています。博物館の一番大事なことは、商業ではありません。文化を守ることです。

次に、私たちの屋外の展示の内容は、あくまでも博物館の一部です。これが博物館の全体ではありません。今朝、文化産業についてもお話ししましたが、私は、屋外に展示している内容、そして文化産業としての活動をご紹介したいと思いました。

3つ目に、博物館は、より多くの観衆を魅了するものでなければなりません。今、私たち広西の博物館は、それほどたくさん来てもらっているとは思いません。1年に十数万、20万です。博物館の機能は、展示することです。そして、その展示したものを見てくれる人がいなければ、博物館がそこに存在する意義は薄らいでしまいます。

ですから、博物館の機能をよく考える。収蔵する、保管する、展示する、研究する、宣伝する、広告する、教育する。そして観光と結びつける。こうすると、魅力的なもの

ができ、観衆を呼び込むことができると思います。したがって、やはり観光業と結びつけること、産業と結びつけることも大事だと思います。今の基礎をもとに、私たちのサービスの範囲を広げていきたいと思っています。

さらに、博物館の収益を博物館事業の運営に生かしていきたいと思っています。私の論文を見ていただきますとわかりますが、国内あるいは海外の有名な学者に来ていただきまして、中国の民族文化を研究していらっしゃる方たちに、文物苑で講座を開いていただく。社会に開放された無料の講座を開きたいと思っています。また、広西の地方の伝統的な工芸品を展示したり、あるいは形に表れたものだけではなく雑技とかサーカスとか、そういうものも皆さんにお見せしたいと考えています。つまり、社会に奉仕する、民衆に奉仕する、それが私たち博物館の仕事だと思います。

塚田 呉先生、ありがとうございます。博物館の展示以外のさまざまな社会的なサービスの重要性があらためて再認識されるところです。

さて、本日は、中国の少数民族の文化資源をめぐる議論、とりわけその最前線に立られている諸先生方が、その現状と具体的な取り組みに関しましてさまざまな問題点を提示され、活発な議論が行われました。西南中国の民族文化、文化資源を見直し、さらにより深く掘り下げていくためのよいきっかけになったかと思っています。

いろいろな先生がご指摘されましたように、いろいろな問題はすぐには解決できない。どういう問題点があるのかということは、今日、この場で皆様と共有することができたと思うんですけども、すぐには解決できない。やれる範囲の中で一歩ずつ前進していくことが大変重要でありますし、そのために議論をすることも重要であります。今日は、国境を超えた議論、日本と中国の研究者の間で文化資源に関する議論ができて、大変有意義なシンポジウムだったと思います。

最後になりますが、本日発表されました3名の先生、覃溥先生、謝沫華先生、呉偉峰先生、及び総合コメントをされました尹紹亭先生、周星先生、武内先生、さらにコメントをいただきました皆様に衷心より感謝申し上げます。

これをもちまして、本日のシンポジウムを終わらせていただきたいと思っています。皆様、どうもありがとうございました。

注

- 1) 民博共同研究「民族文化資源の生成と変貌—華南地域を中心とした人類学・歴史学的研究」、代表者 武内房司、2006-2009年。
- 2) 武内房司「文化資源と歴史景観～雲南・团山村“漢彝合璧”古村落建築群と貴州・隆里郷」（口頭発表）、民博共同研究 2007年度第2回研究会、2007年12月1日、於国立民族学博物館。

シンポジウム「西南中国少数民族の文化資源の“いま”」日程

2008年3月13日(木) 10:00-18:00 国立民族学博物館第4セミナー室

(※所属は当時のもの)

第一セッション

座長：韓敏（国立民族学博物館）

10:00-10:30 ご挨拶、主旨説明、参加者紹介 塚田誠之（国立民族学博物館）

10:30-11:10 報告 覃溥（広西文物事業管理局）

「現代社会の発展過程における少数民族文化保護・伝承を担う
時代の責任と義務—中国「広西民族生態博物館建設1+10プロ
ジェクト」の実践—」

11:10-11:30 コメント 塚田誠之

11:30-12:10 報告 呉偉峰（広西博物館）

「広西博物館の室外展示の特色と発展」

12:10-12:30 コメント 兼重努（滋賀医科大学、民博共同研究員）

〈昼休み〉

第二セッション

座長：横山廣子（国立民族学博物館）

13:40-14:20 報告 謝沫華（雲南民族博物館）

「文化多様性の保護：雲南の探求と実践」

14:20-14:40 コメント 長谷千代子（総合地球環境学研究所、民博共同研究員）

14:40-15:20 報告 李黔濱（貴州省博物館）

「ミャオ族銀飾りの文化賞析」

15:20-15:40 コメント 曾士才（法政大学、民博共同研究員）

〈休憩〉

第三セッション

座長 塚田誠之

16:00-17:00 総合コメント

尹 紹 亭 (雲南大学、東京外国語大学アジア・アフリカ言語
文化研究所外国人研究員)

周 星 (愛知大学)

武内房司 (学習院大学、民博共同研究員)

17:00-18:00 討論

発表者・討論参加者一覧

【国内】

兼重	努 (かねしげ つとむ)	滋賀医科大学 准教授
韓	敏 (かん びん)	国立民族学博物館 教授
片岡	樹 (かたおか たつき)	京都大学 准教授
周	星 (しゅう せい)	愛知大学 教授
曾	士才 (そう しさい)	法政大学 教授
武内	房司 (たけうち ふさじ)	学習院大学 教授
谷口	裕久 (たにぐち やすひさ)	立命館大学 講師
塚田	誠之 (つかだ しげゆき)	国立民族学博物館 教授
長谷	千代子 (ながたに ちよこ)	九州大学 講師 (当時、総合地球環境学研究所 所員)
長谷川	清 (はせがわ きよし)	文教大学 教授
松岡	正子 (まつおか まさこ)	愛知大学 教授
横山	廣子 (よこやま ひろこ)	国立民族学博物館 准教授

【国外】

覃	溥 (チン プー)	広西文化庁 副庁長 (当時、広西文物事業管理局 局長)
尹	紹亭 (イン シャオテン)	雲南大学 教授 (当時、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 外国人研究員)
謝	沫華 (シエ モーホワ)	雲南民族博物館 館長
呉	偉峰 (ウー ウエイフォン)	広西壮族自治区博物館 館長
李	黔濱 (リー チエンビン)	貴州省博物館 名誉館長・顧問

Senri Ethnological Reports (最新号)

当館のウェブサイトにてバックナンバーのPDFをダウンロードすることができます。

<http://ir.minpaku.ac.jp/dspace/handle/10502/49>

- No.108 土方久功日記Ⅳ (2012; 土方久功, 須藤健一・清水久夫編; 日本語)
- No.107 A Herder, a Trader, and a Lawyer: Three Twentieth-Century Mongolian Leaders (2012; Interviews conducted by Yuki Konagaya, I. Lkhagvasuren, translated by Mary Rossabi, edited and compiled by Morris Rossabi; 英語)
- No.106 情報化時代のローカル・コミュニティー-ICTを活用した地域ネットワークの構築 (2012; 杉本星子; 日本語)
- No.105 *Buddhist Fire Ritual in Japan* (2012; Madhavi Kolhatkar and Musashi Tachikawa; 英語)
- No.104 東アジアの民族イメージ前近代における認識と相互作用 (2012; 野林厚志; 日本語)
- No.103 マダガスカル地域文化の動態 (2012; 飯田卓編; 日本語)
- No.102 「障害のない社会」にむけて—ウエルビーイングへの問いとノーマライゼーションの実践 (2012; 鈴木七美編; 日本語)
- No.101 *Altai Uriankhains: Historical and Ethnographical Investigation Late XIX – Early XX centuries* (2012; Ichinkhorloo LKHAGVASUREN; 英語・モンゴル語)
- No.100 土方久功日記Ⅲ (2011; 土方久功, 須藤健一・清水久夫編; 日本語)
- No.99 *Research Notes on the Zhangzhung Language by Frederick W. Thomas at the British Library* (Bon Studies 14) (2011; eds. Tsuguhito Takeuchi, Burkhard Quessel and Yasuhiko Nagano; 英語)
- No.98 *A Great Tibetan-Mongolian Lexicon* [CD-ROM] (2011; eds. Urianhai L. Terbish, Urianhai T. Chuluun-Erdene; チベット語、モンゴル語)
- No.97 海洋環境保全の人類学—沿岸水域利用と国際社会 (2011; 松本博之編; 日本語)
- No.96 *Socialist Devotees and Dissenters* (2011; Interviews conducted by Yuki Konagaya, I. Lkhagvasuren, translated by Mary Rossabi, edited and compiled by Morris Rossabi; 英語)
- No.95 *Bonpo Thangkas from Rebkong* (Bon studies 13) (2011; ポンギャ ゲレ フンドウツプ ギャムツォ・津曲真一・立川武蔵・長野泰彦編; 英語、チベット語)
- No.94 土方久功日記Ⅱ (2010; 土方久功, 須藤健一・清水久夫編; 日本語)
- No.93 *Une version rgyalrong de l'épopée de Gesar* (Gyarong Studies 1) (2010; Guillaume Jacques and Chen Zhen, ed. Yasuhiko Nagano; フランス語)

[国立民族学博物館刊行物審査委員会]

須藤健一 館長
西尾哲夫 副館長
杉本良男 副館長
韓 敏 民族社会研究部
八杉佳穂 民族文化研究部
寺田吉孝 先端人類科学研究部
岸上伸啓 研究戦略センター（研究出版委員長）
朝倉敏夫 文化資源研究センター

平成25年1月25日発行

国立民族学博物館調査報告 109

編者 塚田 誠之

発行 人間文化研究機構
国立民族学博物館
〒565-8511 吹田市千里万博公園10-1
TEL. 06(6876)2151(代表)

印刷 株式会社 遊文舎
〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-17-31
TEL. 06(6304)9325(代表)
